

鼠色の服の背頸のところを、片手で丁度ネクタイの下にあたるチヨツキを掴むで、ぐつと彼を爪先立ちに立ちあがらせて前後に小突きまはし出した。

グライムス氏は瘦せこけて蒲柳質の老人である。フォート嬢は効力の旺盛な機械體操で練りあげた少女である。だがそれにしても男女の區別は偉いもので男性を覆すまでには酷い努力を要した。酷い努力——もとよりさうだ。處女が自尊心をすっかり打ちわすれて、何時しか腕に渦を巻いて血潮が爆發して出たと云ふ物凄じい力である。加之もそれが突如として一瞬の雷霆の如くに出現したのだ。その最初の一秒時グライムス氏はシヤロツト女史の此の光景を睨みくたした様な眼の前で身動きも出来なかつたが、その次の瞬間に科學者の所謂宇宙震動が行はれた。フォート嬢の腕力のもとにあつては、グライムス氏は襦袢布か段通のきれはし位なものだ。嬢の身内にある小突きまはしたかつた欲望は、小突くことを盛にするにしたがつて益々旺盛を加へて来る様に見えた。

フォート嬢が掴みかゝつてから、小突きまはす運動が最高潮するまで、傍に居るものはただシヤロツト女史が一人つきり、しかも女史は全く驚愕してしまつて、ただ一言「まあ」と驚きの聲を發したきり何もすることが出来なかつた。グライムス氏の顔は石のやうに瘻きつて、

ただ時々歯並のちか合ふ音が聞こえるばかり、フォート嬢の顔は非常に真面目な沈着さが溢れ、あだかも洗濯する時かパン粉を捏る時に見る主婦さんの表情の様であつたが、驟て突然に夢からでも酔めたやうに我れに歸つて、

「あ。貴下は私にまるで前後を忘れさせてしまひました」とさう云つた。そのフォート嬢の言葉にはひくい獻意さへ含まれて、最後の一小突がすむとさうさう手をゆるめてしまつた。

グライムス氏はよろ／＼と輔げかかつて、やう／＼大きな寫字臺に身を支へかけたまゝ、ちつとフォート嬢の顔を見いつて居た。

そしてしばらく此の三人は深い吐息を重ねながら此の亂暴の意味を讀まうとするものゝ如く黙つたまゝで居た。がとう／＼グライムス氏がぶる／＼震へる手をもたげてフォート嬢を指しながら「貴嬢は——貴嬢は……前後をすっかり忘れてしまつた。」

そして又黙つて恰も有利な發言でもして置くやうな努力した聲で「あなたは私に危害を加へましたね。」

「將來の見せしめです」とフォート嬢。

「明かに脅喝です。」

『さうです』とフォープ嬢は、もとより脅喝の意味は秋毫も無かつたのだけれども呼吸をはずませながらきつぱりと答へてしまつた。

『それを御承知の上だつたら、此の危害は無罪では済みませんよ。』

『承知の上です。貴下の襟頭を掴むた時から覺悟しましたよ。すこしは手ごたへがあるかと思へば、骨の……骨ばつかりね——ほんとに男の癖に……』と罵言を並べかけたが、不圖眞面目な顔になつて、『さうです。脅喝です。』

と云つて凛と口を緘めた。そして三人ともしばらく瞰みあつて黙りつづけた。

『ですが、わたしはまた何で間違つて這塵人間に言葉なんぞかけたのだらう。あなたの様な……』

とまで云つてフォープ嬢は自分の身分と云ふことに考へ及んだかの様に威容を整へて『あなた、のやうな……』

とまで云つたところで言葉を注意して擇みぬいて。

『紳士でない方に。』

と云つたのであつた。そしてそれを云ふがはやいか、フォープ嬢は丸で竝にやつて來た最初の目的を忘れたかの様に此の場面から消え去るべく退出しようとした。嬢にはその時とても此

の上斯う云ふ光景を續けて行くことが堪へられぬと思はれたらしい。加之も尙ほ捨科白が云つて見たかつたのか、後ろ向きになつてからまでも『法律ごろ』と一喝して置いて扉の方にさつさと急いだ。新しい女と舊い女傑との間の此の始めての激戦の上で、體質上では確かに舊い女よりは新しい女が數等優秀である事が證據立てられた。舊い女のシャロットは明かに恐怖に襲はれながら暖爐に凭りすがつて居た。フォープ嬢がやうやく玄關の出口に行きついた頃になつて始めて、嬢の退出を送るべく電鈴を鳴らさねばならぬ事に氣が附いたのであつた。手がぶるぶると震へるので電鈴の鈕に指尖をあてがふのが容易で無い。その他の事、今日のシャロット女史は實に意氣地を缺いて居た。大罵倒を適々浴びせかける好機會がありながらそれも逸してしまつた。そして一向に、自分は何うしてもつと體格の立派な堂々たる狀師を代理にしなければならうと、そればかりを残念がつた。女史は全く親らの力を疑つた。まことに女史の生涯にあつては此の時こそ始めて自分の力量と云ふことを疑ひ出し、新時代の生れて來たのに對してその後へに堂若たらざるを得なかつたのである。

電鈴の音を聞いてカツセル爺やが佛頂面をして、黙つたまゝフォープ嬢を送り出したのであつた。そして二本の指で自分の頬つべたを埋もれる様に壓さへたまゝ、嬢が消え行く後ろ姿を

長いこと眺めて居たが、纏て扉を閉じた。

そして暫くまた立つたまゝで此の記憶を深く彫り込んで行く様な顔をして居たが、「淑女らしくない女だ」と別に興奮したのでもなく、罵倒するのでもなく小さい聲で云つて見た。ただ當り前に見た處を記憶に收めるべく讀みあげただけであつたらう。それから彼は二階の方にあがつて行つて、何か御用命はないかとそれを伺ふつもりで黙つたまゝグライムス氏の額をじろじろ尊敬と従順との眼をしばたゝきながら長いこと見あげるのであつた……。

* * * * *

フオーブ嬢はイングル・スツクの家には半ば勝利半ば惑亂の變な心持ちで歸つて行つた。

「わたしまだ男つてあん廢弱蟲とは知らなかつたの」と云ふと、

「ですが子供達は何處に居たの」と、フィリス嬢。

「男がみんなあゝだとすれば——男が偉がつて居るのはみんなベテンね。」

(然うだわ、だが小供達は何處に居るの。)

「勇氣のある女はみんな廢男を馬鹿にしてもいゝわね。」

フィリス嬢は狀師シカモア氏に手紙を認めることに心を決めた。

* * * * *

學士メンウキリング氏は紳士的豫備教育を授けると云ふ私立聖十字學院の持主である。もつとも大に努力して此の持主になつたのでは無くて、彼の性格の力の弱さが茲に至らしたのである。彼をして教育家たらしめた動機は要するに骨牌遊びが過ぎたからである。そしてその骨牌遊びを始め出したと云ふのは一つに虛榮心があつたからだし、一つには何ら心の平均と云ふ様なものを持つて居なかつたからである。

彼の父は恐ろしい嚴格——嚴格過ぎて作を目的にした程の人物であつた。早く妻に死に別れた爲めか、作にあたり散らして、その面魂が氣に喰はぬと云ひ續けて居た。折角劍橋大學に入學させながらも、どうせ碌なものになりやしないと始まりから明白に蒿が括つてあるので學費を送ることのせも辛いこと世にも類が無く、加之もそれで居て自分自身の財産——彼はお茶の仲買商をやつたしもた屋であつた——末の見込みなしと物見遊山の捨鉢に費ひ果たして頓死——無論頓死せねば残る筈も無かつたのであるが、それでも三千磅ほどの金額が遺産として殘

ることになつた。伴のメンウキリング君、いつも小遣錢に窮して居た身分だったので、三千磅の遺産は一時無盡藏の財源に思はれ、素寒貧書生一躍大高襟黨と化し、染別け色のシャツや華なネクタイ、乗馬俱樂部に頻に出入りして、意氣揚々と倫敦に乗り込むでは、音樂會だの、觀劇だのと『生』の觀樂をつくした。だが漸くにして三千磅必しも掬むで盡さざる金錢の海ならすとの悟りがつくと、今度は大學の友達同志の間に骨牌でもつて金を掻き集めやうと企てたのであつた。トランプ遊びのうちでも奈翁とポーカ―とは彼の十八番で、彼は日頃から、骨牌にかけては天晴の天才氣取り誰にも負けるものかと自信が強かつたが、それも要するに自信だけらしかつた。牛津大學を卒業する時には數學競争試験で第三位と云ふ好成绩の上に、金錢も七百磅ばかりあつた。運動ではクリケットにフットボール、特にフットボールが得意で大きな團體を小供のなかに駆けこんで大立廻りをするのであつた。さて將來何をしようかと思ひ巡らした揚句學校教師が一番適任だらうと云ふので、早速廣告した。「風彩ある紳士」と「運動に得意」と云ふ文句が利いて、すぐとブライトンの豫備學校で教職に就くことが出来、そこから更に規模の大きな小學校に移り、三轉して此の聖十字學院に先づ助手として備はれたのである。それから院長の養子となり、維持員となり、遂に持ち主にまでなつた。家附きの妻君た

るメンウキリング夫人は別に癪にさはると云ふ程度ではなかつたが少々心理上の缺陷があつてあまり内助の效は挙げ兼ねた状態、ともかくも縁あつたものは我慢して續けて行くのが辛棒だと云ふ考へであつた。とは云へ家事一切の事は家政婦がやつて呉れ、妻君は毫も家政のことに干渉しなかつたから無事で済むだ。此の家政婦君は頗るの適任者で信頼するには餘つて足れりで、小遣錢をまだ親元にねだつて居る位の正直ものである。

勿論メンウキリング氏は教師としての特別な修業をした人間では無い。教育上の理想は全然皆無だ。且つ又何等の處世哲學をも持つて居ない。彼は自分が何故に生きて居るかを考へて見たことがなく又何が適任かを深刻に思つて見たこともない。直覺的にそれを考へるのは嫌な解答が出て来るものと警戒して觸れずに置いたのだつた。その問題を自分自身に究めて見ない位だから無論生徒の傾向がどうかを考へて見るやうなことは更でない。しかも之れを究めないことが教育上の一蹶となるなど云ふことは彼は夢にも思はず、彼の時代の人でそれに考へ及んだものは誰も無い。そしてすん／＼紳士の稱備となる學問とかを授けたのである。彼は唯彼が教へられた様に生徒を教へた。彼の部下の教師達も無論さうだつた。彼はおそらく教育上の此の長い長い因襲的傳統の最後の一鎖環であつたらう。無論此の因襲的傳統だつてその始めに

おいては激測としたものがあつて、生徒を如何に養成すべきかと云ふ目的が切實に含められて居たに相違ないが、抑も學校と云ふものは宗教と同様に常に「何の爲めに起つたか」を忘却してしまふものだ。聖十字學院も、その頃の英國に澤山あつた學校と同様に、御多聞に漏れず、綺麗にその元始目的を忘れてしまつて居る。ただわけもわからず行きなれた褪せた道を行くばかりである。そしてその潜在意識は要するに小供は恰も小犬が一度は疥癬にかゝらねばならぬ様に一度は學校に通はねばならぬと云ふことだけだ。或る一定の教科書が擇ばれる（教科書が擇ばれる標準こそは神のみぞ知る）そして毎組のそれをすつと讀むで行く。それは丁度僧侶が御經を讀みあげると同じことだ。又一定の試験と云ふものがあつて、時々此の進行に停止を與へる。その試験たるや蓋しメンウキリング學士の威嚴を忘れさせない爲めのやうなもので、學士先生も他の下司な空威張屋と一斑出来るだけ試験の點を辛くして大に峻嚴を示したいのだけだ。とも、悲しい哉生徒の父兄達が満點ばかり欲してやまないで、仕方なくそれをやらなければならぬ。茲に試験の準備と云ふことが學校を風靡する。試験を受けると云ふ準備以外の事は一切爲ない様になり、試験が無かつたら學校は何んにもすることが無くなつてしまふのだ。特にまた悪いことには試験そのものが當り前の試験よりも賤敗して居ることだ。試験者が抑も手練

れた先生達で頗る手心のある試験問題をだす。そして絶えず此の因襲的傳統の古ぼけた道ばかりを尊重して居る。例へば古典の試験問題を出す外生であつて見れば、上乘の部で訛つたラテン語は知つて居るかも知れないが希臘語はさつぱり知らない、そして、その提出する試験問題はと云へば、成るべく利巧な生徒だつたら之れ等の古典語を讀むたり書いたり話したりする能力が無いことを上手に匿せる様な意味の問題ばかりである。又、數學の方の試験者になると、試験者自身一向實世間の實際の打算を辨へて居ないものだから、ただ徒らに骨牌のペーシエンヌ遊びのやうな机上のことばかりを問題に出す。又、外國語の試験者となると、文典ばかりにこだはつてしまふし、繪畫の試験者にいたつてはひたすら手本を寫すことばかりを問題に出し實際ものを描く手腕は一向問はない。之れ等全部の惡弊を總稱して「試験の阻ひ」とでも云はうか、此の呪ひが一番執念深くメンウキリング學士の頭腦に襲つて來て居るのだ。先づ察しても見られよ。外國語の試験と云へば、△英文譯英文○譯の無限の連續ばかり、數學の試験と云へばすべてが机上難問ばかり、繪畫の試験と云へば之れまた手本の暗誦的寫生ばかりだ。如何なる學生か此の重みに堪へ得られやうぞだ。

メンウキリング學士は自分の學院の事務を司らすべく部下を備いれ三人の幕僚を置いた。そ

の一人は年若い劍橋大學出の人、植物學が専門であつて社會的地位から云へば院長と同格だが臆病だから下に喰つゝいて居る。も一人は大きなしほも曲つた鼻のノークレー氏で年もとつて居る方だし頗る瘦せても居る。何年か前に教員檢定試験を失敗して爾來ぐすりぐすり此の私設學校に流れ込んで來たのである。そして一人はカンと云ふアルサス人で之れは外國語とピアノとを教へるのが役目だつた。尙ほ此の他に頗る活動的なリツチ夫人と云ふ家政婦が學校の事務をも手傳つて居て、ともかくも學校のあり來り主義がのろ／＼動いて居るのであつた。生徒等の寢室は二階を打通にした二つの長い部屋であつて、各の寢臺架に抽出が喰つゝいて居て簡單にしてまた頗る巧妙な仕掛けになつて居る。此の寢室の受持ちは「天狗」のノオレ先生で、先生は一番高い三階の一室に寢ながらも朝の七時には必ず起きて、おきて來て總員を離床せしめ、その日の課業の爲めに一大運動をやらせねばならぬことになつて居るのである。先生と小供達との間には既に默契が成立して居て、二十分を過ぎる迄は互に安眠を碍害し合はないことになつて居る。

既に數年前に院長が非常に熱心な衛生的見地から案出した規則であるが、天氣のよい朝には必ず生徒は食事前に駈足運動をやらねばならぬことになつて居る。之れは頗る近代的で印象的で、しかも何等の經費を要せない。ノオクレ先生が此の朝の駈足に一所に駈ければならぬ義務になつて居る。ところで先生にとつて之れ以上うんざりする仕事はない。で先生は天が恵む雨の日以外如露でもつて雨の日らしく濡らして置く方法を發明に及んだ。天狗先生の寢室は丁度院長の寢室の上にあつて居るのであるが、院長は必ず窓を閉め、幕をおろして寢る。朝の七時十五分頃その邊を歩く好奇心ある通行人は必ずや、巨大な歪むだ鼻を持つた一人の瘦せた狡猾さうな男が、聖十字學院の三階の窓から半身をのり出し、一生懸命だから口は開いたまゝ舌まで長く突き出して頻りに如露を振りながら、階下の窓や窓枠やに水を散布して居るのを見たであらう。著しその通行人にして今すこし好奇心の心にひかれて立ちとどまつて居るならば、必ずや暫時の後メッシュキリングの寢室の窓掛があがり、窓が開かれ、白綿布の夜着のまゝ、髭も剃らない顔でもつて、頻りと天候の具合——雨の落ちたらしくもない雲行を眺めて居る姿を認めに違ひない……………。

這麼具合で事實毎朝やつて居ることは愚圖愚圖の駈足、多くは雨天體操場のなかで、寢むさうな眼をこすりながら朝の勤めをやつて居るに過ぎなかつた。だが、一度或る週にカン先生が交替でやつて居る際に始めて本當の駈足がおつ始まつた。だがそれさへも本式とは參らぬ。

學校が見えない處まで駈けて来るや否や、歩調は俄かに重々しく、カアン先生また頻りに獨逸語でもつて此の『腹ごなし』に對する不平の獨白をやるばかりであつた——カアン先生は朝食前に獨逸語以外を使つたためしが無い。

ノオクレー先生が朝の豫習をやる方法は、冬ならば暖爐の一番近いところに、夏ならば一番高い教壇のところに陣取つて、生徒たちは好きにさせて置く、生徒がみんな逃げてしまつて先立たつた獨り残れば尙ほ更結構だと云ふことになる。その間生徒達は低い聲で話しあつたり、紙を投げあつたり、禁讀の小説を竊いて見たり種々なことをする。するうち朝食の八時半になつて、それから授業が始まる九時半までは運動場に出て勝手放題な面白いことをする。愈々九時半になると、院長メンウキリグ學士及び植物學の劍橋學士スミサアス先生が現れ出る。身にガズンを着けて、すこし慍つたやうな顔付をしてやつて来る、院長メンウキリグ學士の宗派は健全なる英國教會派であつて、毎日の授業は必ず祈禱を以つて始めねばならぬことになつて居るのだ。それから下級生一同はスミサアス先生に引率せられて階上の第二教室にいられるし、その間院長は黙々として何か祈禱の様なものを口のうちに唱へて居る。カアン先生と鼻のオクレーとは第三教室で生徒等の練習帳を集めてまさに大英國第二の國民を養成す

るの任務にわれも参加すると云つた顔付をして居る。十一時になると各教室とも一つばいになつて此の學院の修養の最も緊張した時になるのだ。ジュブナアルの諷刺詩一つ譯せないうがらに院長メンウキリグ學士は希臘語を教へたり、ラテン語を教へたり、また歴史を教へたりする。スミサアス先生は一生懸命となつて、平方根を出すことや、ユトクリッド原理やを説く。これが此の聖十字學院では最高級の數學なのである。カアン先生は喧れ聲を怒鳴りあげて佛蘭西語の教室で生徒と唾み合ふ。ノオクレー先生は地理と算術とが受け持ちで屢々生徒を途方もない處に迷ひ込ませる。是れが毎日の努力で一番高い潮時であつた。

馬鈴薯澤山の脂つこい午食が濟むと此の高潮がだれ氣味になつて来る。午後になると院長は生徒達に何か運動をさせ、一切の責任を級長のプロピンに委ねて置いて、自分は書齋に歸つて晝寝をまどろむ。スミサアス先生及びカアン先生は胃のこなれが悪いものだからよく行儀の悪さうな小供を掴へて來ては嚴罰を喰はせる。ノオクレー先生もまた圖書の稽古の時間になると屹度まどろみ給ふが、之れはまた念入りで、生徒とは例の默契が成立し、單に大聲をあげて騒がないばかりか、院長がやつて來さうになると、そつと先生に御注進に及ぶことになつて居るのだ。

學院長メンウキリング氏またく狡猾で頗る突如として現れ出て来る。彼が晝寝から醒める時は大てい不氣嫌な氣持ちであつて、しばらくは自分の義務を呪ひながらむぐぐして居るが、突差にがばと跳ね起きる。小供達が狡いことをやつてはいないか、部下の教員達が怠けては居ないかと疑ひの心がむら／＼とするからだ。すぐと鞭を把つて岩石のやうな澁い顔をして、長い廊下を通りながら、先づ自分が見捨て置いて来た方の組へと急ぐ。

彼の耳には生徒がざはめく氣配や、『そら来たぞ』『シッ』など云ふ聲が聞こえる。

時によるとプロピンの大きな我武者な聲で『おい。閉めとけ。バイエクロット。閉めて置けつて云ふに——閉めとかないと先生に云ひ附けてやるぞ』などと叫むで居るのが聞かれる事もある。

そこへ院長はぬつと姿を現はして、

『プロピン。何かして居たのか』と聞く、『バイエクロットが何うかしたとでも云ふのか。』

『先生。あいつ何時でも馬鹿です。』

院長の混沌たる怒氣は茲にはじめて焦點を結むで来る。若し此の學院にバイエクロットのやうな悪戯童が居なかつたならば、院長は餘程厄介が抜けて、もつと晝寝の夢がむさばられた

筈である。

『バイエクロット。お前は又抜け出やうとしたのだな』と一喝して『茲に出なさい。』

『先生。僕は……………。』

更に激した聲で『わたしの命令を聞かないか。茲に出なさい。』

『先生。僕は……………』と云ひながらも、バイエクロフト少年は泣きながら重い足を引きすつて院長の前に頭垂れると、院長はまるで餓えたものゝ様に少年の肩を掴み、

『悪いと云ふことが心に浸まないか（鞭をビシヤン）よく性根にいられておくがい、（ビシヤン）ほんのしばらくだけ私が居ないともう此の有様だ。お前達はすつかり此の學校の規律を亂してしまふ（ビシヤン）……………。』

『ア——ア——。』

『私に謝罪らないか（ビシヤン）謝罪らないか（ビシヤン）何故黙つて居る。』

バイエクロフトはすつかり骨身に浸み込んで悔悟した。赦された。

『まだ他に悪いことをしたものは無いか』メンウキリング學士はすこし鬱氣が晴れた様な顔をして更に聞き糺して見るのであつた。

妓で彼は一寸躊躇する。此の儘此の教室で授業をしたものだらうか、それともすぐと二階に
 忍びあがつて、懶けて居る教員をとつ擱へてやらうか……彼は毎日屹度これに迷ふ。彼は始終
 ノオクレーの晝寝に疑をかけて居るのだが一向見とどけることが出来ない。ノオクレー先生は
 何時でも教室の戸をすこし開いておいて、下の方で院長の足音がすると、すぐ生徒が耳聴く聞
 きつける様に仕掛けて置くのだ。若し院長が近く氣配でもすると、すぐ生徒の一人が彼の近く
 に来て教科書でドンと机上を叩く、するとノオクレー先生丸で自動機械のやうにびくりとやる
 が早いか教授を何處からでもやる。彼が目を醒ますのは犬よりも迅速だ。とても現行犯を擱ま
 へるわけには行かない。

それから四時になるまでは學校の空氣は次第に落潮して行くので惰氣が加はる。四時になる
 と鈴が鳴つて、全生徒は一番大きな教室に集まつて、院長メンウキリング學士の指揮下に夕の
 祈禱を捧げるのである。祈禱が終ると一同はカアン先生が、隅に置いてあるオルガンを鳴らす
 に連れて讚美歌を歌ふ、その讚美歌の最中にも屹度、その日の晝食にカアン先生やスミサア
 ス先生やに罰課を仰せつかつた五六の生徒等は、その罰課をやつた方がいゝか、いつそ忘れて
 やらうかと腹のなかで考へて居るのだ。讚美歌が済むと、カアン、スミサアスの兩先生は罰課

を命じておいた生徒等の成績を收めるべくそれぞれの教室の方に急いで行くのであるが、ノオ
 クレー先生だけは手持無沙汰でぶらりとして居る。先生は罰課などを命じたことはないのだ。
 院長から折々それを注意されることがあるのだが、その時は先生勿體らしくもその巨大な鼻を
 下に向けながら、おつとりした調子で云ふ『生徒は私の云ふことはよく聞いて呉れます。』
 罰課を授けられなかつた小供達は運動場に行かうと何處へ行かうと勝手放題に遊ぶで五時の
 夕食までは自由である。時にはクリツケットや蹴毬やの赤熱的な競技が演ぜられて、院長のメ
 ンウキリング學士までが仲間にはいる。その時には夕食の時刻は五時半まで延ばされるのであ
 った。院長が仲間にはいると、先生勝つのが好きで負けるのは大嫌いと來て居るから、どうし
 ても勝ちになるまでは競技が長びくのである。夕食の監督と夜の復習とは之れもぼんやりノオ
 クレー君の役目と云ふことになつて居て、牛乳とビスケットの夜食があつてそれから八時半に
 一所に寢床のなかに追ひこまれると云ふ順序だ。此の八時半と云ふ就眠時間は年上の小供達に
 とつてはすこし早過ぎるのであるが、それでも院長に云はせると『終日終夜眞に休む暇なし』
 で教育のことに盡瘁して居るのであるからやむを得ないことである。尙ほ院長は生徒達が就眠
 時間後にも大寢室でノオクレーの監督のもとに間違ひないかどうかを見るべく、そつと靴下だ

けになつて音を忍ばせながらやつて來ることがあつた。

水曜日と土曜日とは半日休業で、午後になると小供達はフランネルか短服かの身輕になつて、それぞれの季節によりて、或はクリケットをやつたり、蹴毬をやつたり、ホッケーをやつたりする。場所は何時でも後ろの校庭の馴れたところ、それをやらない時には、ノオクレ先生かスミス先生かに引率せられて遠足に出かけるのである。日曜日になると生徒達は絹帽に類似の短上衣を着て朝と晩とに教會堂に集まる。午後はスミス先生が一時間息屈さうに聖書の講義をした後、ノオクレ先生が矢張り散歩に連れて出る役目だ。夜は教會堂が済むと、生徒銘々父母にあて、手紙を書く、その手紙は綿密なる検閲のもとに、如何に學院の生活が幸福であるか、健康は盛れ、學問は勵み、次ぎの試験においては立派な成績をあげるなど云ふことを書く。けれども彼等生徒達は運動場で話したあつた戲談や喧嘩やのいささつは書いてはならぬ。又大寢室のなかでプロビンがお山の大将になつてお臍の宙がへりをやらせる藝當のことも書く可からず、もとより學院長の答でしたゝかに鞭たれる痛さを書いてはならないのだ。此の學院には圖書館の設備が無かつた。だから生徒はただ教科書を読むか、それでなくば生徒等各自が持ちあはせて居る僅かなものを讀むに過ぎないのだ。生徒等は自ら娛むと云ふ意

味で本も讀まず、繪もかゝず、童謡をつくつたことも無い。もとより茲の生徒達は芝居の立ちまはりをやるとか、音樂に興ずるとか云ふことは夢にも知らない。彼等の唯一の手の運動としてはクリケットなどの武骨な運動があるきりで、しかも新聞ひとつ讀まされない。時々スミス先生が植物學の講義をして聞かせるのであるが、他に何等自然科學は教へられない。自然科學を教へるためには實驗室が要るし、實驗室をつくるには金錢が要る。ただ學校の教授目錄のなかに、自然科學と云ふ部が必要であると云はれた際に、植物學を教へて居ると苦もなく云ひのけてしまふことが出来るのだ……………。

以上のやうなやり方でもつて、『聖十字學院』では一群の男生徒を、石臼にかけて挽きこなすやうに碎いて磨く、…………之れが世界空前の大文明帝國たる英國でしかも最も文明の先驅たる紳士の豫習をやつて居るのである。

無論之の學校は英國の私立學校の中での悪い標本ではあらうが、しかし飽くまでも標本たるべきものである。之れより悪い學校もいくらもあつたし、また此の學校でなければ見られない

やうな特長もあつたのである。勿論是れよりも新式で規模が宏大で清潔な學校が幾らもあり、或る學校には兵式體操の教師として軍曹が通つて來、或る學校には科學試驗室があり、或る學校には特別な雨天體操場があり、またある學校には圖書館があつて何百冊の書籍が生徒の爲めに閱覽に供してあつたであらう……そして大抵な學校が此の聖十字學院よりも立派な建築を有し、廣大な大寢室を持つて居たのである。また大抵の學校は『豫備的』と云ふ意義に執着して、生徒の年齢に制限を置き、少年期の生徒が青年期に達する様になると、實業界に行くか醫界なりその他高等の學校にはいるなりしたのであるが、メンウキリング學士の此の學校だけは特別で、出来るだけ澤山の生徒を留めて置かうと青年になつても引き留めて居るのであつた。學士は三四の狀師と連絡を有し、——グライムス君もまたその一人で學士の親友である。——狀師の手を通じて、ピイター以外にまだ澤山の金のある孤兒が入學して居る。かう云ふ孤兒連の或るものは暑中休暇の間など院長メンウキリング學士とともにウキンズルに暮すことになつて居る。此の夏期の寄宿制度を持つと云ふことでも此の學院は頗る特徴があると見られる。だがこれほど特徴を多く有する『聖十字學院』でも、知識的興味を啓發することの缺點、兒童の自發本能性を無視することの缺點にかけては、他の學校と同様何等特別なところを見出さない

のである。

人生は常に流れ動いて静止することがない。だが不思議にも處々に動かぬ渦があつて流水がそこに停止する。すくなくとも過去一世紀の間英國の上流中流の子弟は學校教育と云ふ渦のなかに停滞したのである。新時代に打つて出づべき活潑な純潔な兒童の腦髓が、人生の流れに流れながら、好奇心と知識慾とに燃えたと居るところを、ぐつと學校と云ふ熊手が靡いよせて六年か七年か大切な時期をぐるぐる渦に巻かせて停滞せしめた上に、またぼつと人生の流れに突き出すのである……………

此のメンウキリング學士の生涯と學校とのめぐりをぐるぐるやつて居る渦は、わけても悪性の鈍い渦であるが、そこへスタブランド家の嗣子たるピイターが活潑なる精神力を以つて舞ひ込んで來て、頗る癩に觸つた。最初はリムスフィールドからあまりに急激に運んで來られたものだから何等の感想を抱く餘地も無かつたのであるが『聖十字學院』で四五日送ると、ピイターは此の新經驗が單に驚愕である以外に、如何にも自分の傾向とは反對で堪られぬ程嫌惡なもの

として感ぜられたのである。

彼の此の新學校では見れば見るもの悉くが嫌であると感じた。此の全體に對する憎惡心に拵て、加へて種々な特別な憎惡心がある。先づ第一にニウトンが嫌やでたまらぬ。あの喧嘩がまだひつかつた儘である。兩方とも眞當の拳闘はすこしも知らず。拳闘手袋をはめた経験さへ無い位であるから、晴れの場に格闘して、多勢の生徒の環視の中にはいることはおそろしい。けれどもニウトンは空威張をやつてビイタアの顔さへ見ればしかめ面をする。一度階子段ですれちがつた時に、彼はビイタアの背のまんなかを抓つた。

ニウトンに對するビイタアの憎惡心は簡單だが、プロビン及びその愛物とも見られる、彼れも身體の大きさのある睡むさうな美しい顔をしたアメスと云ふ少年に對する感情は單なる憎惡心ばかりでは無い。敵愾心恐怖心が要素をなして居る。プロビンは右にアメスを従者とし、左にニウトンを誦讀者として全校を支配して居るのだ。いつたい「聖十字學院」の様に、年齢のいろ／＼異つた少年や青年やをこつたに一所にして置くことは甚だ不自然で且つ不健全なことである。少年の自然の本能性はかう云ふ群集には正反對だ。その校風の健全な立派な大きな學校では、生徒達はそれぞれ一團をなして居て、他の團體とは交渉をせず、他の年長者の組の子

供達は碌に話もしない位である。或る人は少年の心理を評して、上に倣して下に驕る傾向を持つと云つたが、そんな馬鹿なことは無い。子供ほど眞に峻烈な獨立自尊の精神を持つて居るものは無い。全然狷介だ。あらゆる生命及び生命に關するあらゆる問題は少年の腦裡に湧きおこり、芽を萌き出しつゝある。何物にあつてもその發育の時代に於いては、その自然的な峻別力が毅然として働き、無理な壓迫や、程度を越した發達やに對して戦ふものである。「爾の世界を守れ」と自然は云ふのである。もし青年と少年とを一所くたに置けば、青年は、年下の少年達の究知心と好奇心とに惱まされどほしだし、また年下の少年達は年長者たる青年の前には必ず威壓を感じ、心から打解けるやうなことは斷じてしない。しかし此の様な問題はメンウキリング學士の様な人にとつては、何の價値もない。彼は夢にも其處ことを考へないのだ。彼は自分御自身の教育さへとつきの昔に忘れてしまつて居るのだ。年上だらうが年下だらうが何んな子供でもいゝ、ただその親が金銭を拂ふ能力がありさへすれば、どし／＼收容して、出来るだけ長く學校に留めて置かうと云ふのである。學校の授業に面白いものは一つも無い。そして授業の時間の抜けた時にはただのらくら遊ぶより他には何等の興味ある仕事も無いのである。此の遊びの時間に何んにも興味がないと云ふことは、纏て年長の生徒を惡漢然としたものにして

しまふことである。彼等は他にすることが無いから、年下のものを虐めたり、腐敗させたりして面白がる。若しさうでなくて他に興味があることを發見するとすれば、今度は、年下のものを全く捨て、しまつて、絶対に構ひつけないと云ふ有様だ。そして年下の少年達は全力を擧げて之れ等年長者と云ふ恐しく力の強い端倪す可からざる巨人等の意を迎へ、やうとして、遂に奴隸の心持にさへなるのである。即ち年下の子供は年上の子供の爲めに吸ひ取られてしまつて、恰も信賴者の心理となり、茲に親分子分の關係が成立する。その保護を得たいが爲めに絶対に無限の服従を誓ふのである。その好適例はニウトンで、彼は親らプロビンの『猿』と稱して居る。バリエクロットはアメスの子分だ。プロビンはしかしあまりニウトンを保護しない。親指だけ位で喚しかけることはあるが、それも、ニウトンが喧嘩の相手に散々に負かされて、犬のやうに降参するのを見るのが面白からだ。時によると、相手の弱蟲の方を援けてやつて、盛にニウトンをじらして面白がることさへある。

さてピイターは斯う云ふ親分子分の關係と云ふ變に自尊心のひねくれた空氣のなかに、突如として燃ゆるが如き自負の念をもつて飛び込んで來たのである。もう茲に投げ込まれた早々から、ピイターは、何だか此の學院の空氣が、自分の呼吸すべき空氣とは非常に異つて居るやうに感じた。そして何處やら自分だけは皎々然と一段上の高潔なものになつて居らねばならぬと云ふやうな自己警戒の念にうたれた。何だか彼の語彙にはなかつた筈の一語がある。ある。それは『馬鹿野郎』と云ふ言葉である。『聖ジョージと尊者ビードの學園』では『馬鹿野郎』と云ふ言葉は誰にもつかつても云はなかつた言葉であつた。

ピイターは餘程緘黙な少年であつた。彼はウキンタバムの様に何んでも自分の考へて居るところを周圍に押しつけやうなどとは仕ない。彼は自信のあるところは平氣で打ち解けて居るのだけれど、此の親分子分の關係に就いて、自分だけは違つて居ると云ふ感じが、何處までもピイターを沈黙の少年にしてしまつた。ノオクレー先生でもメンウキリング學士でも、ピイターに對して愛嬌の言葉をかけてやつても、ただ黙り勝ちなのには少々持たぬ餘味であつた。此の學院の先生達はよく生徒に對して荒い言葉を戲談口のやうにして云つたのであつたが、ピイターに對して、さうした漫罵的戲談を加へると、ピイターは眞から眞面目腐つた顔付をして凝平と聴き、全然別な標準からそれを比較商量して見るとでも云ふ様な凄惨な沈靜を見せる。之れは罵倒に慣れた此の學校の當局者にとつては頗る苦手であつた。プロビンはピイターがニウトンを撲つた時から彼を一風變つた少年だと好奇の眼で見だしたのであつたが、ピイターの

方では依然として、その赤い鼻の穴、唾液だらけな口、仰山な怒唸聲に對して本能的な憎悪と反感とを持つて居り、プロビンと話をする様な時は上手に出来るだけ早く避けてしまふ。之れがまた一層プロビンの心をビイタアの方に集中せしめた。プロビンの心持ちは時にビイタアを釣つて慍らして見たいのと、時に御機嫌をとつて融和して見たいのとの二つの間を往來して居る。彼はニウトンとビイタアとの喧嘩の約束を何時もおぼえて居て、公々然とビイタアはニウトンをやつつけることが出来るかと吹聴して居る。ニウトンは捨てられた娼婦のやうな淋しい心持ちで居た。

或る晩のことあの死骸の様な顔をして居る子供が不圖ビイタアが騎士の繪を描いて居るところを見つけた。そして此ん麼に上手に繪をかく能力があることを直ぐとアメスに報告をした。アメスはやつて来て、もつと繪を描いて見せろと迫まり、ビイタアもそれに従はねばならなかつた。

『うむ、うまいよ』とアメスは云つた。『聖ジョージと大蛇の繪か。うまい。うまい。』
 プロビンも大聲で呼ばれ、すぐやつてきて褒めた。
 ビイタアは要求されるまゝに種々なものを描いた。

『おい。女を描いて見ろよ』とアメスが叫むだ。聲に應じて鉛筆が敏速に動いた『やい。そんな婆さんの女ぢやないや。描けよ。知つてるだらう。女。野蠻人の女をさ。』

『いや。風呂にはいつて居る女を描けよ。温泉場がいゝ』とプロビンが云ひ出した。『ちよつと、ふわつとしたものを巻いて居るのを。』

『いゝや。野蠻人の女神様がいゝや』とアメス『何んにも巻いて居ない奴を。』

ビイタアは野蠻人の女神は描けないと拒絶した。

『何。かけるよ。描けよ』とアメスが云ひ張る『野蠻人の女でもいゝ。』

ビイタアは止むを得ず黒坊の女を描いた。皆んなは寄りたかつて、もつと詳しいところまで描けと迫つた。

『おい。ニウトン。もつとこつちに来い』とプロビンが突然に叫むだ。『そんな麼に遠くに居なくともいゝだらう。ビイタアが面白いものを描いて居るよ。』

『もう描けない』とビイタアは云つて鉛筆を投り出してしまつた。

『何んだ。それつきりか。シモン・ビイタア』とアメス『おぼつちやんだなあ。』

『僕なら素敵なのを描くんだけど』とプロビン。

けれどもビイターは断じて描かなかつた。

ビイターに親父は何だと云ふ詰問をかけることは、あれからこつちは別段になかつたが、圖らずも日曜日の晩になつて、父兄宛の手紙を書く時間が遡つて来た折、院長メンウキリング學士自身がビイターの父の社會上の地位如何の疑問を晴らしてしまつたのであつた。いつたい此の『聖十字學院』の生徒達が一週に一度必ず父兄宛に手紙を書くこと云ふことは、餘程妙味のある思慮をつくしたもので、その手紙は悉く學院長が監督し檢閲することになつて居る。先づ學院長が學院の名前を刷り込む用箋を一枚づつ生徒に配り、それに生徒が書いたのを一纏めに集めた後、書齋に持ち歸つて、ゆつくり檢閲しながら、學院長が宛名を書いて郵送すると云ふ仕掛けになつて居る。

「さあ。スタブランド少年」と云つて學院長はビイターに愛嬌顔を見せながら「お前は伯母さんのところに手紙を書くんだつたね」と大きな聲で云つた「此の學院に来てからの模様を書くのですよ。」

「フィリス伯母さんに？」とビイター。

「いや。いや」學士ははつきりした聲でそれを打ち消し「それ、お前の伯母さんのシャロット女史に書くのぢや。」

みんながビイターの方に向いた。プロピンの眼が驚いたやうな輝きを閃かした。

ビイターは暫く考へて居たが、聽て頭をきつとあげて、

「先生。僕はシャロットの婆さんには手紙は書きません。」

「書かねばならぬ。」

ビイターはまだ暫く考へて居たが、矢張り「僕はフィリス伯母さんのところに手紙を書かねばなりません。」

「馬鹿をお言ひでない。私の命令通りになさい。」

ビイターはまた暫くの間考へ込んだ。大へんに悲しくなつて来たが、根かぎりの力を出して泣くのを堪へた。(誰も此の學院でビイターが聲をあげて泣くのを見たものは無い。——彼は断じて泣かずに堪へた)するうち學士はビイターが深い溜息をつきながらも書き始めたのを見た。だがその書き上げた手紙は不満足なものであつた。

「懐しいフィリス伯母様」と院長の命令があつても全然無視してしまつて居る。「此の學校は大へんよい學校で僕は好きです。だけど僕には小遣錢がありません。食べるものもまづいです。伯母さんはやく来て僕を連れだして下さい。伯母さんの親愛なる甥のビイター。」

かう書き終つて臉をふいた。彼の指尖は涙に濡れた。そして一筆は紙の上にぼたりと落ちたが、それでも泣き聲はたてなかつた。彼はそも／＼から泣いてはならぬと決心をして居たのであつたから斷じて泣きはしなかつたのであるが、その顔は、全く泣き腫らした顔と同じやうに赤らむでしまつた。

院長の學士が来て此の手紙を讀むだ。「こつちにお出。こつちにお出。これちやいかん」と云つた。これはもうビイターが覺悟を決めて居たことであつた。「お前は何と云ふ片意地な子供だ」と學院長は怒鳴つた。

それから院長は別にもう一枚用箋を與へ、その前に立ち塞つた。「わたしの云ふ通りに書きなさい」と院長は命令を下した。

他の子供達は一齊に耳を聳かして、院長の云ふ通りを靜かに黙つて筆記して居るビイターの方に心を向けた。

親愛なるシヤロット伯母様

僕は水曜日無事に聖十字學院に入學しました。僕は此の學校が大好きです。來る途中自動車に長いこと乗つて面白かつた。グライムスさんは僕にきれいな棒を買つて呉れました。院長のメンウオリング先生は僕の學力を試験なさいましたが、僕は勉強さへすればいくらでも進歩が出来るさうです。僕は此の學校で關卷をやります。學校では讀本の他に科學の研究もやります。僕は伯母さんのお蔭で此んなりつばな學校にはいりましたのですから、しつかり勉強します故、どうぞ安心して下さい。

親愛な甥の

ビイター・スタブランド

その夜、ビイターは嫌な悲惨な夢にうなされた。そして不圖眼を醒ましたが、臉には一つば

い涙が溜まつて居た。彼はいつまでも此の聖十字學院に掴まへられて捕虜にされたものと思はれ出した。嫌なもの怖ろしいものが残らず集まつて自分の身體を何時までもとりまいてしまつて通れる道が無いのだと思はれ出した。

.....

抑もから院長メンウキリング學士はビイタアの敵愾心に就いて警戒されて居た。グライムス氏がビイタアはすこし「手におへぬかも知れない」と断つて置いたのであつたが、案の通りフィリス嬢宛の手紙一件で、學士は此の新生入生に對し、捨てゝは置けないと度胸をきめ、「よくよく訓戒してやらねばならぬ」と呟いた。

しかもその機會はすぐとやつて來た。

その翌朝の聖書輪讀の時のことである。生徒はそれぞれ聖書馬太傳のところを開いて居る。院長メンウキリング學士は生徒の注意を鈍らせないために、わざと順番には輪讀をさせないで、極めて不規則に生徒を指名して一節づつ讀みあげさせるのであつた。「次ぎはバイエクロフト」……「次ぎは……リバース」と云つた調子で何處に飛火するかわからない。

院長は一班の愛嬌のつもりでもあつたらうか。時々生徒を指名するにわざと綽名を云つて見て、すぐ訂正する。シモン・ビイタアの綽名はシモニイドであつたが、すぐと院長は、次ぎはシモニイド君」と云つた。

返辭が無い。

『シモニイド』

その時ビイタアは顔前に新約聖書は開いて居るものゝ眼は壁に掛けてある阿弗利加の地圖の方に飛んで居る。あすこが埃及で、あれがナイル河、ナイル河に沿うてすつと行けばウガンダ……あすこには人間が白い着物を着て居り、その間を偉い偉いノビイが獅子をもおそれずに歩いて居る。

するうちとう／＼ビイタアの耳にだん／＼高まつた『シモーニイデーヌ』の聲が響いて來た。

見ればメンウキリング學士が自分に呼びかけて居るのである。ビイタアの心は一足飛びに歐羅巴——聖十字學院に呼びもどされた。

『またばんやりして居たな』とメンウキリング學士『お前は今迄居ただらしいの無い學校のつも

りて居ると大間違ひであるぞ。茲では断じてゆるさない。さあ、お前のその傲慢でする根性を治療してやらねばならぬ。いつもの懲らしめだ。出て来い。」

さう云つて學士は教壇の側の高い釘に掛けてある苦鞭の方へと動いて行つた。

興味半分で見て居る生徒達はビイタアに説明した。「先生は三度も君の名を呼んだのだよ」君は苦でうたれるんだ」「出て行きたまへ」などと。

ビイタアの顔は見る見る變つて、座つたまゝ石の様に固くなつて居る。

「早く出て来ないかッ」とメンウキリング氏は苦鞭を爪繰りながら「出て来ないかッ……………」出て来ないかッ……………」

ビイタアは何の返辭もしない。

「スタブランド」と院長は更に大喝した「はやく出て来ないかッ。」

茲に聖十字學院開院以來の傳統に大きな罅裂がはいつた。

ビイタアは立ちあがつた。そして一寸學士の一喝のまゝ出かけて行くやうにも見えたが、體て微かな小さい聲ながら明瞭に「僕は出て行かない。鞭うたれるのは嫌だ」と云つた。

すべての進行が一時に中止した様な沈黙が續いた。しばらくの間は沈黙が天を傾してしまつ

たかと思はれる位に森としてしまつたが、聽て靴の音を天井に反響させながら、メンウキリング學士はビイタアの方に押し寄せて来た。それと見るとビイタアは大きなわめき聲をあげて、地圖の掛かつて居る壁の下に沿ふて戸口の方に逃げ出した。

「アメス。掴まへて呉れ」と學士は叫んだ。

だがアメスは頗る鈍感であつた。

メンウキリング學士は答鞭を暖爐蓋の上に置いて、一大躍動を始めた。醜く教壇を飛び越え、インキ壺をひつくりかへし、ビイタアが戸口から逸しさる瞬間、アメスと鉢あはせをしてしまつた。教室の戸口を出るがはやいかビイタアは階段の處まで行つてちつと躊躇して居たが、追手が迫ると見るや、一足飛びに飛びおろる。流石のメンウキリング學士も面喰ひの體たらくで「コン畜生！」と云つた。全生徒は茲に始めて院長が「コン畜生！」と叫んだのを聞きつけたので、これは面白いことを聞いたとばかり將來の應用をたのしみながら記憶のなかに保存して置くのであつた。いつたい生徒なからでは、院長がビイタアだけを特別に取扱つて居るやうな氣持があつたので、此の時こそどうであらうかと、片唾を飲むで院長のする事を眺めたのであつた。するうちビイタアは運動場の方に飛んで出てしまつた。まるで鼠が逃げるやう

にすばやい。だが結局逃げ場を誤つたのであつて、學院長はすぐと追つかけて行き、大股十二
 三步でまんまとビイタアを掴まへてしまつた。

『いよ。いよ。承知ならぬ』と學士はビイタアの襟頭のところを掴むでまるで犬が鼠を啣へて
 振りまはす様に振りまはしながら、『わしは、お前を鞭つてやる。生徒をみんな集めてその前で
 鞭つてやる。』

だが此の時ビイタアの方もすつかり熱しきつて院長に益々喰つてかゝる。

『僕が伯父さんのノビイに告げてやるから』と大聲をあげた。『僕の伯父さんのノビイに告げて
 やる。ノビイは偉いぞ。兵隊の大將だぞ。』

かう云ひあつて二人は階下の教室の方に戻つて来た。ビイタアはおそろしく髪や服装やを亂
 し、兩足を蹴りたてゝ居るし、メンツキリング學士はがつしりとビイタアの服のゆるみを掴む
 で居るのであつた。

『黙つて鞭を受けるんぢや。喚いたつて駄目だぞ』と進むる學士も、あまりのことに興奮の涙
 さへ加はつて居る。

『僕の伯父さんは兵隊だぞ。く。の。を持つて居るぞ。何だい。君が僕を鞭でなぐるなら、伯父

さんは君を殺してしまふぞ。殺してしまふぞ。』

『誰か。その答鞭をとつて呉れ』とメンツキリング。

『殺してしまふぞ』とビイタア。

誰も答鞭をとりに行くものが無い。『プロビン』と學士は叫んだ『お前答鞭をとつて呉れ。』

プロビンは躊躇して、ニウトンに『ニウトン、お前とつて来て呉れ』と云ふと今まで中腰に
 なつて居て何時でも御用を辨じますとでも云つた様な顔付きのニウトンはすぐと答鞭を持つて
 来てメンツキリング學士に渡した。

『僕に一寸でも觸つて見ろ』とビイタアは威丈高になつて、『殺してしまふぞ。伯父さんが殺し
 てしまふぞ』と云ひながら、學士が答鞭をうけとる爲めに手をのばした隙を、すかさずしたゝ
 かに學士の膝頭を蹴り、その一刹那の智慧でもつて、身體をぐる／＼と學士の着て居るガウン
 でまいてしまひ、鞭をあてられても痛くないだけの用愼をした。

が、メンツキリング學士は兎も角も答鞭を手に入れたのである。彼はまづ怖しい形相をして
 齒で答鞭をくわへ、兩手を自由にして、さてガウンをゆるめ、相手をぐつと掴みなほして、
 愈々答鞭を振りあげた。學院生徒全體は片唾を嚥んで眺めた。ビシヤン。ビイタアは鰻の様に

身體をうねつた。ビシヤン。

ビイタアの叫ぶ聲は涙聲であつたが、しかも明晰な充實した聲である。

「殺してしまふぞ。伯父さんがすぐに來て殺してしまふぞ。僕は學校を焼いてしまつてやる。」

「何。何と云つた。」

ビシヤン。蹴りかへす。ビシヤン。黙つたまゝ、廻る。

「五、六、七、八、九、十」と學士は答鞭をあてた數を數へて停止し、如何にも突慥實につまばなしながら「お前の席に歸つて行け！」と云つた。ビイタアが案外おとなしく席に歸つて行つたのを見て學士は内々ほつと安心をした。ビイタアは時によつて非常に子供子供しく見える事があるが、丁度今がそれで、顔にいつぱい涙をため、頬を赤く熱し、おそろしく髪を亂して居るが、しかも尙ほ斷じて泣き崩れては居ない。その顔は激情の爲めに痙攣して居る。此の聖十字架學院での最も重い罰が課せられたのであるが、ビイタアは毫も屈する色を見せない。一寸肩越に後ろを覗いて見れば自分はまだ追はれて居はせぬかとさへ思つた。そして獻款のなかにも尙ほ伯父さんの名を呼んで見るのであつた。

メンウキリダ學士は之れをもつて懲戒を全部終へたものとは認めて居ない。彼は如何なる

手段に出てゝも必ずビイタアの心を屈服させねばならない。ビイタアはまだ傲然として居る。

「それから、スタブランド」と學士は落着いた嚴正な言葉でもつて「御前は今日の午後も、明日も朝から晩まで學校に留まつて居て、私は勉強します。なまけません」と五百書いて私に渡しなさい。五百書かねばなりませんぞ。」

何だかビイタアの唇からぶつくと聲が漏れた。拒絶するやうな聲であつた。

「おそくとも水曜日の晩迄には必ず書いて持つて來なくてはなりませんぞ。その間だけはお前は忙がしいのだから——遊ぶ暇はすこしもないのだぞ。さあ、よく耳に置いて置くのだ。私は勉強します。なまけません」もし之れが出来なかつたら今度は答鞭を十二しつかりと當るぞ。いゝか。出来るまでは毎朝十二づつ答鞭があたるのだぞよ。之れが此の學院の峻嚴な罰なんだ。どんなにしても通れることは出来んぞ。學院の院長たる私を愚弄したものは必ずそれだけの懲罰を受けねばならない。何處までも嚴格なんだ。之れがすくなくとも規則のある學校のあらはしなのだ。お前は今まで社會主義の腐つた學校に居たのだからもの事をすく考へる癖があつていかん。これから私の手でお前を立派な紳士につくりあげねばならぬのぢや。だから充分に今お前を懲戒してやるところなんだ。——たとへ御前に百人のノビ助とかがあつて攻めて

來ても、こちらはびくともすることは無い。よしんばお前に何千人のノビ助伯父さんが附いて居たとて、お前が此の聖十字架學院で不名譽なことをした以上お前を助けに来る様なことは無い……………」

かう訓戒されてビイターは命せられた言葉を五百書くつもりになつて居たところ、丁度午食前の時に運動場でニウトンが二人の友達とやつて來て、『おい。シモン・ビイター君。君は五百も書くつもりかい』と訊いた。

『書くもんか』と答へるのが斯う云ふ場合の少年の心理である。

『どうせ書かにならむだらう』とニウトンが云つた言葉には何處までも嘲笑が含まれて居る。その日の午後ビイターは風通しの悪い教室に獨りどりのこされて居たが、書いたのは兵隊の繪や戦争の繪ばかり、そして心のうちでは一大冒険の計劃を樹てしまつた。

彼は逃げ出さうと心を決めた。此處嫌な處を捨て、廣い世界に馳けつて行かう。さうだ逃げ出すには明日の午食の済んだ時がいゝ。丁度水曜半どんで、逃亡するには絶好の機會が與へられて居る。その時だつたら誰の眼にも訝まれないで學院の門を抜け出ることが出来るんだ。ビイターには午食から夕食までの間の時間さへあれば、どんな遠い所へでも行くことが出来る。

思はれたのである。『逐電』とビイターは何處で聞いたのか妙な言葉を云つて見て、大變美しく面白く響く言葉の様に思つた。さて學院を抜けだして先づ何處に行くか、ビイター自身にもわからぬ。ぼんやり一度はリムスフィールドの伯母さん達の處に歸らねばならぬ様な氣持ちもするのであつたが、とにかく行きたいのは遠いはるかな海の方である。海のある方に行きさへすればすぐとノビイに會ふことも出来る。何故今までにノビイの處に駆けつけて行くのを忘れてしまつたんだらう。ノビイは今たつた一人で居るだらう（茲まで考へて來るとビイターの心持は益々夢の様になつて行く）いや。或は母ちゃんや父ちゃんやなんかと一所に居るかも知れない。かと思ふとまた一所に大冒険に出掛ける。ノビイと二人で火を焚いて夜營をすると、そのあたりに獅子が猛々しく吼えたと、居る。かうして猛獸狩をやりながら、方々冒険旅行をして居るうちに何處かでメンウキリング學士やプロビンやニウトンやなどに出くはす。彼等は意氣地がなくて野蠻人の部落がなかに捕虜になつて居るのだ。

こんな意氣地の無い厄介者に對して、ビイターやノビイや父ちゃん母ちゃん、それからブンゴにジャンなどが何でかゝはて居られやう……………」

しかし之れ等の無禮者をどう處置してよいかビイターは長い間考へた。何しろメンウキリン

グ學士をそのまゝ寛恕すると云ふことは如何にビイタアの度胸が廣くても出来難いことである。プロビンも赦し難い。プロビンは泣いて前非を悔ひ詫びたので以後は下級生として取り扱つてやることになり、ニウトンは以後は下僕として飼犬の世話かなんか卑しい仕事を命じて置けばいい。だが何處までも赦し難いのはあのメンウキリングだ。如何に寛大な心持になつて見ても到底ゆるし難い奴だ……。

あんな奴こそほつて置けば、どん廢謀反をするか知れたものでは無い……。

ビイタアの眼前には一光景が彷彿した。メンウキリングが一人の腹黒いアラブ人と怖い惡だくみをしてわが冒險隊に對して大危害を加へやうとするところを現行犯のまゝでビイタアが掴まへる。彼は手に彎刀と拳銃とを持つて居るところだつたが、そのまゝひつたてゝノビイとブンゴとの居る處に連れて来る。「そいつは殺してしまつた方がいゝ」とノビイが云ふ。「はやく殺した方がいゝ」とブンゴも云ふ。「その前付きでは什麼惡だくみも仕兼ねまじき奴だ。」

そこへビイタアが一足踏み出すと、メンウキリング學士はふる／＼と震へ慄いてビイタアの脚下にひれ伏し、恐怖此の上もなく、ひたすらにビイタアの仁慈に寄り縋つて、どうぞ赦してもらいたい。どうぞよろしくとりなして戴きたいと懇願をする。

よろしい。ゆるしてとらす！ さう云つてビイタアは後ろにさがる。

此の仁慈ある光景は如何にも美しい……。

ところがノビイが中々峻嚴である。「ビイタア。それはあまり心が裕すぎる。こんな惡漢を赦してとらすと云ふ方がありますか。間違つても赦しては置けない奴だ。われ／＼は既に此の男の共犯者であるアラブを殺してしまつたのではないか。アラブに較べて此の奴は何百層倍罪が重いかわからぬ。黒人がするならばまだしものこと、その身英國人でありながら、よくもよくもか程までの好惡なことを……。こら、メンウキリング貴様は眞實そんな名前を持つて居る人間だつたならばやく蹲づいて往生の觀念をしろ……。」

此の瞬間に眼前の彷彿は掻き亂された。實際のメンウキリング學士がクリツケット用のフラインネル運動服を着たまゝでこちらへやつて來たのであつた。夕食前の一運動をやらうと云ふのである。教室の前まで來ると立ちとまつて、大きな子供達に見せつけた。

彼は何にもしらないやうだ。

ビイタアは一生懸命に忙がしく書いて居るやうに見せかけた……。

水曜日の午食が済むとビイターはしばらくの間運動場をぶらぶらした。

「シモン・ビイター。蹴毬をやらないか」とプロビン。

「教室で留置にあつてんだ」とビイター。

「あいつ、五百も同じい文を書かんならんだからなあ」とニットン「可哀想な奴、正直に書いてるんだらう」(ニットン！ 今に見ろ！ 見せてやるぞ！)

ビイターは何も云はずに教室に歸つて行つた。彼の机の上にはバタの付いたパンが二片、これは朝食の時にそつと取つて置いたもので、それを習字帳の紙に包むだ。是れが彼の唯一の兵站部である。此の他に鉛筆が一本とよく石の行く投石機がひとつ、これだけで廣い廣い世界に飛んで出やうとするのである。金錢は一文もない。

ビイターはそつとメンウキリング學士の跡をつけて行つて、學士が書齋にはいり、例の晝寝をやるために扉を閉め、窓掛けを引いたのを見届けた。耳を澄ますと、學士は身を横たへたらしく、肘掛椅子がメキツと鳴つた。もう斯うなれば玄關から抜け出し得る機会が到來したので

ある。學院の後ろの方の門から出ると小使達に見つけ出される危険があるし、クリケット場になつて居る運動場から抜け出ると、屹度他の生徒の告げ口屋に見つかると、運動場から垣が遮つて居るから、十秒間位で姿をかき消すことが出来る。が實際その時のビイターは、教場から抜け出て、學校の窓が見えなくなる迄と云ふもの、全く心も身も固くなつてまるで、琴の弦の様に緊張して居た。彼の短かい生涯のうちで、まだこれ程までに神経をおどくさせたことは無かつた。往還に出ると一生懸命に駆けて駆けて駆け、クルワア方面への曲り道まで來ると、やつと、大股のすばしこい歩調と云ふ程に緩まつたのである。今や世界は限なく彼の眼前に展開した。

世界は今や暖かな十月の午後で、道は眞つ直ぐ、行く手には白楊が繁り、赤い屋根が見える。その道は何處に行く道であるかは一向辨へては居ないが、彼の心の裡では、如何に空想の雲がむらだつて居るとは云へ、何は措いても先づ第一にイングル・ヌツクの家へ歸らねばならぬ必要を辨と感じて居る。クルワアの方へ凡そ半哩も歩きつづけた後、ビイターの頭に、誰かに道を聞いて見ねばならぬと云ふ考へが浮かんだ。

で第一に會つた親切さうな顔をした小柄の年とつた婦人に聞いて見たが、その婦人は此の道が何處から來て何處に續いて居るのさへも知らなかつた。「何んでも此の道はベスコッド町に行きますよ」とはその婦人の答へ「右側の方の曲り道を行くと馬場と牧場とですから、そつちはいけませんのよ。それ御覽なさい。あそこがクルワアの教會堂なんですよ。」

此の老婦人はリムスフィールドの方の道はどれかさつぱり判らなかつた。ビイターは心のうちで、大かた郵便屋さんは知つて居るだらうと思つた。

が郵便配達夫の影にちつとも見えない……………。

その次にビイターが尋ねた男は、これはまた先刻の老婦人と反對に要らないことをしやべり立てる方で、満面に人の好い微笑の皺を波たせながら真からにこ〜の上御機嫌で、

「此の道は何處に行きますかつて、可愛いことを聞きますね」と彼はビイターの言葉をすぐとつて繰りかへしながら、「此の道の行くさきはメイドンヘッドとコックハムさね、コックハム！ お前さんコックハムの物語を知つてるの、これがそれその道さ、あの物語にある料理人が生煮のお芋を喰はされた處さ。だから Cookham と云ふ名前になつたぢやないか。ね。よく判つたら。だがあんまり青豆の食べすぎは褒めたことでもあるまいで、ね。twinn in green と云

ふ町が、つひそれ、ウキンズルを通り越すとすぐあるよ。はつは。……………はつは……………。

……………メイドンヘッドつて云ふ處まで何哩あるつて？ さう。もうすぐそこなんだよ。さうさね。四哩ばかりか……………四哩と思つときや當のはづれつこは無いよ。」

ビイターがリムスフィールド迄はと聞いたとき、此の上機嫌の男はすぐとウキンチフィールドのことだなど早呑込みをしてしまつて、「うむ。さうか。さうか。左の方に曲る道があるから、それを曲りさへすれば獨り出に行くよ」とます〜にこ〜顔「何。何哩？ なあにすぐそこだよ。五哩——五哩と半もあらうかね。そんなものぢやよ。」

ビイターはその男と別れて少しの間行くと後の方からその親切さうな男が大きな聲で「六哩位もあるかも知れないよ」と叫んだ「七哩とはあるまいが……………」

此れは有難いと云ふのでビイターは、三十何哩彼方のリムスフィールドの方には背を向けながら楽しい夢の幻想を浮べて道を急いだ。ちよつとすれば今にもフィールド伯母さんかフオーブ伯母かが道の曲り角にでも居はすまいかなどと思つて。——

午後の四時頃になつて彼はメイドンヘッド橋まで達し、それから、道が川の流に沿ふて行く。ビイターは之れまで這塵にいゝ川の景色を見た事が無い。時は輝かな十月の午後だから、

川の波は小春の暖かに微笑をたゝえて居る。聖十字架學院なんて云ふものは無限に遠いところに行つてしまつた。彼の心には最早や影だに無い。山のなかに育つたビイタアの様な少年にとつては舟位面白いものは無い。彼はゆるやかな歩調で、舟曳道を歩いて行きながら、水閣をぐぐつて動く小舟の群や荷足舟などを飽かず眺めたのであつた。舟が来るたびにその上にノビイ伯父さんが乗つて居て呉れ、ばよいがと思つた。だけれども何の舟にもノビイは居ない。水閣の近くには其處等の人が飼つて居るのであらう。白鳥が二羽浮いて居る。ビイタアは人が居なくなるのを待つてその白鳥の方に近よつて見た。するとその白鳥が親しげに遊いで來たのでビイタアは持つて居たパンの片を大かた投げてやつてしまつた。それから今度は一人の舟大工が河岸の舟置場で獨木舟を修繕して居るところをながい間立つて見た。それからその次ぎは淺いとこに遊いで居る小魚の群れを凝視めた。それが済んでから暫くまた歩く。川のなかには綺麗な小島が時々あつた。するうち足がすこし痛くなつて來たので、とうとう藺草などの生ひ茂つた心持ちよささうな堤の上に腰をおろして息むだ。

その場所は丁度クレブデンの森の秋の萬燈が灯つた對岸にあたるところで、森の樹立を透して伊太利亞風な欄杆などがビイタアの眼に映つたのであつた。森の茂つた影をうつして居る川

の面はさながら黒い鏡の様で、今霧がたちのぼりかけたところである。舟の数は次第に減つてほんの時折り、端艇が滑るやうに静かにやつて來る。ただ音としては規則的なクラッチの鳴るのがあるばかり、はるかかところに白鳥が一羽……………。

イングル・ヌツクはもうすぐそこだ。もすこし行きさへすればよいのだと思つた。で足の痛みがなほるがはやいか、すぐと歩きつづける。まつさきにリムスフィールドは何處かと聞いて、それからイングルヌツクは何處かと聞くんだと、聞いて見る順序までも思ひさだめた。もういくら遠くても三哩か四哩とはあるまい……………丁度夕食頃には歸ることが出来る……………。

だが何處か心のうちで不可思議でならないやうなことが感ぜられた。近所に此んなによい景色のところがあるのに何故今迄イングルヌツクからは人が連れて來ては呉れなかつたらう。みんなが此の様な景色があるのを知らずに居るのは變だ……………。

對岸の森の間に見える欄杆の上には屹度御殿がなければならぬ。そして、その御殿のなかには美しいお姫さんがあつて、ビイタアを可愛がつて呉れる様な氣持ちさへした……………。

丁度此の時、顔のつべりした一人の男が現れてビイターにちよつと番をして居て呉れないかと一艘の小舟を托したのは何と云ふうれしい、またと世に有りさうにもない楽しい幸福なことを思はれたであらう。

その男は、丁度ビイターが腰かけて居る岸の近くの、板で段々がつくつてあるところに小舟を漕いで来たのであつた。そしてその舟のなかに乗つて舵を取つて居る婦人に一寸あがつて来てはどうかなどと話しあつて居る様子であつたが、轉て、岸の板段のうへに飛びあがり、櫂をそのまゝ舳を岸の板にくつゝけて婦人の手をとつて岸にあらがせた。

『おい。おい。トムミー』と此の男は舟を杭に結びつけながらビイターに聲をかけた『一寸の間此の舟の番をして居て呉れないか。私たちが食事をやつて来るまで。』

『だつて、あなた。何哩も行かねばなりませんでせう』と婦人が云ふと、

『シツ。黙つていらつしやい』とその男。

此の男は何か慍つて居るだらうとビイターには思はれた。

ビイターは自分の名がトムミーと云ふのでは無いかと、呼びかけられても怪訝な顔をして居たが、しかし小舟を一眼見ると、もうそつちの方に誘ひ寄せられてしまつた。

『誰れにも盗まれないやうにして呉れるんだぞ』とそのつべりした顔の男は上機嫌な夢の様な笑顔を向けて『その褒美には銀貨をあげやう。』

ビイターは立つてその板段の方に行つた。岸にのぼつたその紳士と淑女とはしばらく何か争ふやうに云ひ合つて居た。——淑女の方はこつちの道を行かうとするし、のつべり顔の紳士君の方はあつちの道を行かうとしたのだ——がとうとう淑女の欲した道の方によつて云ひながらも従つて行つてしまつた。それはクツクハムの方への道であつて、淑女が紳士君を引きずつて行つたと云ふ方が適當であるかも知れない。『どつちに行つたつて何哩とあるでせう』と女は云つて居た……………。

その紳士淑女の姿が消えると再び午後の静けさが歸つて来た。ビイターは小舟一艘托されたまゝたつた獨りで、銀色な川の面や、蔽ひかゝつて薫つて居る枝や、遠くの白鳥やを見た。

最初はビイターは只おとなしく岸に腰をかけて小舟を番して居るだけであつた。見ると小舟のなかには眞紅の敷蒲團が置いてあり、その上にあの婦人が忘れたのか、日本製の繪日傘が一本ある。その小舟の名は Princess may と讀まれた。帆の擦れる方につけてある常布や木やは淡青に塗つてあり、その他の部分は黒褐色にしてあつて、舳には一線の金箔が輝

かしく塗つてある。櫂の恰好がことに面白く舵の形もビイタアの眼をひきつけた。何だかその小舟に乗つて、櫂がガワ／＼と水を掻いたら面白さうだ。舳に結んである繩をちよつと解いて見やうか知ら……ことに此の小舟の上には釣竿が一本のつけてある。此の釣竿さへあつたら、どんなところにも舟を寄せることが出来る……。

その釣竿の誘惑がたまらなくなつて來た。すぐとビイタアはその釣竿を小舟からとりだして、櫂を振る様に振つて見た。それから今度は小舟に飛び乗つて、その釣竿で岸を一押し押しして見ると、小舟の舷は岸とすこし離れた。そこで水の面をガワ／＼やつて見ると小舟はその波にさへ搖れる位輕快でこんなに面白いことは無い。

また暫くすると小舟は繫いであるところを中心にして靜かに岸の方にもどつて横づけになるのであつた。

ビイタアは又一おしおし出して、今度は櫂をとつて見やうとしたが、その拍子に釣竿で自分の帽子をおとしたから、早速それを拾ひあげ、風が吹いても逃げないやうに、しつかりと舟底の方に帽子を置いた。そして愈々櫂ではまりがはりやつて見ると、小舟はいくらでも沖に出たがつて居るものゝ様である。だがあののつべり顔の紳士が繩で杭に結びつけて置いたので小舟

はさながら繫がれた馬の様に逸るばかりである。此の小舟を、すこしの間でもいゝから岸に沿ふて動かして見たいと思ふと、もう何時しかビイタアの手さきは、繩の結びめを解いて見たり、結んで見たりして居るのである。

その頃には英國にも既に小年義勇團運動はあつたことはあつたけれども、まだ小國民達に繩をしつかりと結ぶ結びかたを稽古させるまでには行きわたつて居なかつたのである。だからビイタアが杭に繩を結んだり解いたりするうちに、ほんとうの結び目は何時しか忘れられてしまつたのである。だから繫いだつもりで櫂を一つがはりとやつたとき、もうをそい、杭からまつて居る繩は、丁度草のなかに懶げに逃げて行く蛇の様に、杭からとろ／＼と解けて水におちてしまつたのである。そして小舟は岸から三尺ばかりも離れてしまつた。

ビイタアは狼狽て、櫂を捨て、小舟から岸に飛びあがつたが、左足だけは川のなかにざぶりとおとってしまった。その濡れた方の左足をそのまゝ水につまつて、繩の端を掴まうと身を伸ばしたのであるが、もう手が繩にとどかない。繩は水のしたを漕りながら、逃げ行く小舟のあとを追つて行くばかりである。小舟のちらすやうな幽々しいやうな動きかたはまるでちつとして居るやうで、しかも岸との距離がだん／＼に遠ざかつて行くばかりである。

ビイタアの心はどうしたらよいだらうかと暫く迷つた。何處かに行つて長い竹竿か棒でも拾つて来て引きよせやうか。石を投げたら或は舟がこつちに歸つて来るだらうか？

それとも誰かに大きな聲をあげて小舟が流れてしまふと告げやうか？

ビイタアは急いで板の段から船曳路にあがつて、あたりを見まはしたのであるが大聲をあげて呼びかけるべき人影も無い。小舟の方を見るとだん／＼に流れのまんなかに向つて動きつゝある、そのまゝにして置くと小舟は乾度メイドンヘッドとか云ふ町までも流れて行つてしまふのであらう。小舟が遠ざかつて流れて行く姿を恨めしさうに見送つた。五六人の人々が向ふに見えた時には、彼はその流れる小舟を自分とは何の關係もないと云ふやうな顔付きをする様にとどめた。彼は心のうちに、之れは陸の人々に助けをもとめるよりも、川に人の乗つて居る舟がやつて来た時大聲をあげて、それを岸まで曳いて来てもらい。そこから自分の力でもとの場所に向いて行かうと決めたのであつた。

するうちビイタアはバンガロー式な建築の白い色の門がある家のまへまでやつて来た。そこには忙し／＼に一人の園丁が門前の芝草を蒔つて居たが、ひとつ此の園丁に小舟のことを相談して見やうかと思つた、がどう云ふ言葉から云ひ出してよいかその考へがなかく／＼つき兼ねた。

た。

でしかたなしに其處を通り越して行くと、今度は仁の好ささうな中年の婆さんが丹念に木鉢でもつて生離を摘むで居るのを見た。此のお婆さんの方はさきの園丁よりは言葉がかけやすい。ビイタアは此の婆さんに叮嚀な言葉ながらわざと白ばくれた様な調子で「あすこに舟が一艘流れて居ますよ」と叫んだのであつた。

その中婆さんは眼鏡をかけた眼ですつと見渡した。

「誰やろなあ。舟を繋いどくのを忘れたぢやなあ」とその中婆さん。そして暫くの間その方に向いて凝乎と眺めて居たが、聴て知らん顔をして又庭缺をチヨキ／＼やり出した。

此の中婆さんの冷然たる様子は愈々もつて、ビイタアに、大人に頼んでも駄目だと云ふ考へを持たせてしまつた。

も一度彼が小舟の方を見ると、小舟は既にぐるりと一廻轉をして最も流れの早い中央部の方へとうか／＼浮いて行きつゝある。速度が餘程はやくなつて淺瀬らしい波だつた處でぐくりぐくりやる。しかもそれは水閘の方に向つて動いて行くのではなくて「危険」と云ふ立札のある方に近づきつゝあるのであつた。危険！それは冷たい死人の手の様にビイタアの心をつかむ

だ。もうかうなつては彼は再びあのつべりした顔の紳士に會つて小舟を流してしまつたことを詰問されることを避けるばかりである。太陽は落ちかゝつて、世のなかの輝きがすっかり消えてしまつた様な氣持ちがする。もう楽しい晩食の時刻もとつくに過ぎてしまつたであらう。もう二度とあのつべり顔に會ふことは出来ない。小舟の代金を拂はねばならぬだらうか？ それとも頼まれても承知をした覺えはないと云ひ張ることが出来るだらうか？

しかしそれを云ひ張るとすれば、自分が小舟に飛びのつて櫂や釣竿やで悪戯をしたことが同理があはなくなりませぬだらうか？

彼の左の靴とグートルとは濡れたまゝであつたから大へんに重くつめたく感せられ出した。そしてビイタアの平均を失つた心のなかでは急に夕食の温さと家の團樂が懐しくなつてたまらない。はやく歸り度い。歸りたい。彼は今こそ會ふ人毎にリムスフイドは何處かと一生懸命に尋ねゝばならぬと心にあせつた……………。

ノオクレー先生とプロピンとがメイドンヘッドの橋までやつて來たのはその日の午後おそく

であつて、彼等は搜索者としてあらゆる努力を盡してしまつたので、もはや之れ以上探す手段もなくなつたから致しかたも無い。絶望のまゝで汽車でウキンズルに歸らうかと思つて居るところであつた。足がすつかり疲勞して此の上は何の餘力も無いと云ふ時、はからずもビイタアの踪跡に出くはした。その橋の袖に居る巡查が、『何んでもしはらく橋の上で迂路迂路して居た様でしたよ』と語りだした『それから舟曳路の方に出かけて行きましたよ。たしか灰色のフラインネル服を着て居る少年でしたよ。慥つた様な黙つた顔をして居ましたね。私も何だか變だなどとは思ひましたよ……………』

そこでノオクレーとプロピンとは水開のところでは例の顔のつべりした紳士と出會ふことゝなつたが、此の時、此の紳士は非常に困つた様な風であつた。

何でも堰のところまで行かうと一生懸命に怒鳴つて居る『何んだつて又舟がこんなになるまで誰も構はずに居たんだらう。かうなるまでには餘ッ程時間がかゝつて居る筈だ。見殺しにしちやつたのかなあ。可哀相に乗つて居たとすれば小供は死んぢやつたかも知れない。』

その少年がどん麼であつたかを聞き出すまでにはノオクレー先生は餘程の骨折りであつた。何しろのつべり男の紳士が興奮しきつて居るのであるから、氣を落ちつけさせて話をさせるこ

とが出来ない。實際それを話させるまでにノオクレー先生は二度までも此ののつべり紳士から、恰も邪魔になる樹の枝かなんかの様に顔を押しつけられた程であつた。

ことにプロビンにとつては何と云ふ怖しい一大悲劇の経験であつたらう。彼はノオクレー先生と二人で水閘をつたつて、水閘番人の棲んで居る鉛屋根の家のうしろにまはり、更に、堰の方に来ると、所謂「危険」と注せられて居る處に出た。川の水溜は九月の大雨の後をうけた爲めか物凄く、堰はさながら大溜の様に轟々と鳴つて居る。見ると一艘の小舟が無惨にも柵にかかつたまゝ、哀れな姿を見せ、あまつさへ一本の日本製傘が泡だつ渦のなかに、竹の柄を天に向けながらぐるぐると舞つて居る。太陽はもう暮れつくして、空氣はつめたく、冬が迫つて来た様な陰鬱の感が轟とした。

それにすぐと足もとに近く柳の葉が薫つて居る邊にプロビンは水にぶ濡れた子供の麥桿帽子が浮か浮かして居るのを見つけ出した。それは如何にも名残りを語つて居るかの様に柳の枝にもつれあひながら、流れの淀みとともに淀んで居る。

もとより疑ふ餘地もない。その帽子には聖十字架學院の徽章となつて居る白と黒とのリボンが巻いてあるのだ。

「あゝ。どうしたらいいだらう」とその帽子を見たプロビンは熱い涙をぼろ／＼出した。

「ビイター。可哀相に、ビイター君。僕は君を虐めたんだ。ビイター君」と泣きながら語つた。威張屋のプロビンに似合はしからず非常に泣きだして感傷的になつてしまつたので、ノオクレー先生さへ全く愕いてしまつた程であつた……………。

その次の朝、朝狀師グライムス氏はメンウキリング學士から長文の大變費用のかゝつた電報をうけとり、引き續いて長々しい辯解の手紙がとどいた。それによるとビイターは學院を逃亡し、ポールター水閘附近で溺死してしまつたとのことで、グライムス氏は全く驚愕に失神してしまつた。眼前にはフォープ嬢の怖しい姿——しかもフィリス嬢もまた劣らない女傑と想像されるから、以前の恐怖が倍になつて、——が徨徨として来て、今にも血みどろの大復讐を計畫して居る様だ。もう斯う思つただけで彼の全身はふる／＼の大震動が起つて来た。彼の事務室に居る書生はその朝、内では主人の爪が齒にがら／＼あたつて鳴るのを、外では風が枯草にさら／＼鳴るのと諸共に聞いたのであつた。先づグライムス氏は何處かに逃げたさうかと考へた。諾威か

瑞西か何處でもいゝから容易に追ひつかれない處がいゝ。しかしあまり文明の空気を遠ざかつてしまふと、いざ綱まへられた際にどのやうな惨虐なことをされても訴へることが出来ぬと云ふ懸念もある。シャロット女史はまだ英國に居る。實は出發しようとして云ふ日に、海峡が荒れ始めて引きつづき荒れ通したものだから控へたのであるが、それが爲め萬事の計劃が齟齬して未だに英國に愚圖愚圖して居ると云ふ状態である。早速女史の許にかけにくい電報をうつて置いて。ウキンズルへと、全身のガタ／＼ぶるいを連んで行つてメンウキリング學士に面會を求めた。ともかくも全力を努めて死骸なりとはやく探し出して、メンウキリング學士に對する相當の問責をせねばならぬと覺悟したのである。

その電報がシャロット女史をまた頗る驚愕させてしまつた。折りも折りバイパス夫人からジャンが手におえないと頻りと泣き事を訴へた手紙が丁度前後して舞ひ込むのである。その日の正午頃、メンウキリング學士から細々と報告が來た。流石に舊教派精神から出て居るだけであつて、文面は嚴肅で敬虔を極めたもの、それによると死體はまだ見つかからないが、しかし充分に見つけ出す見込みがあるとあつた。午後になつた、狀師のシカモア氏がやつて來た時には、シャロット女史は病人となつて客間に横たはつて居り、女中のアニンが甲斐甲斐しく枕頭に侍

して看護して居ると云ふ體たらくである。先づ女史は病牀の上に大きなリボンの一束とレースとを置き自分の落膽を慰めつゝあるものゝ如くに見せかけ、更に、大きなリボンのついた帽子をば、黒と金とに飾りかへて壁にかけた、枕頭の卓上には香水瓶、氣附眼藥、樟腦、薄荷腦など云ふ藥品がならべて置いてある。尙ほ此の他の黒葡萄の乾いたのや、強壯劑などもあつて、女史は此れほどの重病であるにもかゝはらず、泰然として客に接しつゝあると云ふ意氣が露出して居る。

シカモアはイングルヌツクでビイターがびん／＼して居るのを見た眼で、かうしてチャストランドやウキンズルやで死んだものだを取り扱はれて居るのを見ると何だか最初は事情が呑みこめなくて、ぼんやりして居たが、臆て推察がつかだした。まことにシカモア氏が茲に訪ねて來た目的は、茲で待ち伏せられた目的とは全然違つたものであつたのである。

最初此の室に通される迄がなか／＼の時間がとれた、カッセル爺やが立開で、今日は奥様は『大病で』『御危篤で御座ますから』などと頻りに斷つたのであがる、結局客間に通されることになり病牀の老女史に御眼通りが出来ることになつたのである。

が女史はお客には言葉をかけさせず、こちらから先んじて、

「シカモアさん。わたし病氣なんですよ、大變に悪いんですの。本當ならわたし奥の病室で呻つて臥て居るところなんですけれど……え……とうとう外國で保養することが出来なくなりました。もう病氣しますと、物事が面倒になつて來ましてね。そこへ以つて來て今度の悲しい出來事、まあ、どうしたらよいでせうか。全く途方に暮れました。」

「奥様はまだ御存じないかと思つて參りましたが……」とシカモア氏が話したすと、

「知らないでどう致しませうか。電報が參り手紙が參りましたんです。私に匿して置かうたつてそりや出來ません。此の無慘な事實が匿しきれるものではありません。まったく私がおろそかにしたばかりに此の様な悲しい事になつてしまひました。」

「貴女がおろそかに、そんな態度は無いでせう」と云ふと、

「いえ。私のおろそかです。私がおもひ此の子に對する責任を三四年前に果して置いたら——子供達もちやんと當り前に洗禮を受けたのでせうし、したがつて此處事件の起りやう筈も御座いません。」

茲にいたつてシカモア氏はビイタアの逃亡したことがつまらない大騒ぎになつて居るなど、真相をぐつと呑み込み、何だかひとつ挑戦でもしてやりたい様な妙な興味が浮かんで來たので

あつた。

「シャロットの奥様、お差しつかへなかつたら、一寸その電報を拜見願はれますまいか。」

「アニン。電報を持つておいで」と女史は女中に命じた。アニンはすぐとそれをお客に手わたした。

「小船ヲヌスミダシ、——堰ニテクツガエリ……」と讀みながらシカモア氏は「こりや大變です。大變です」と叫んだ。

「アニン。手紙を持つておいで、——それぢやない。——そつちの方のを。」

「死體は未だ發見せられず候が……」とシカモアは讀みあげた。そして「こりや全く大變ですね。大變ですね。私早速かけつけて見ませう。始めて承りました。小舟に來つて、堰で溺死した。どうして捨て、置かせう。」

「そこに以つて來て私の身體が斯うなんで御座いませう」とシャロット女史「わたしの心臓は弱いと思はれますんですよ。どうも私は此の頃過勞です。あまり種々な方面に心配し過ぎましたのですよ。もう私は獨りでは歩けない位に衰弱してしまひました。こんなに弱い筈は無いのですけれど、何ですか、醫者の言葉では、旅行に出るまでに一ヶ月位は身體を動かさずに静養せ

なければならぬつて、まるで大嚴命を下されて居ますところに、此の打撃が來ましたんでせう。ほんとに這不運な時を擇び抜いてわざ／＼死んで呉れなくても……」

と云つて女史は絶望の表情をなし、非常に疲勞しきつた様な様子で、曇みかけになつて居る大きな枕の奥の方に身を縮めるのであつた。そして弱々しい聲を出して、

「シカモアさん。此の二十四時間と云ふもの、わたし鶏卵をたつた一つ戴いたさきりですの。……此の事件がどんなに私を苦しめたか。御察し下さいまし」と云つた。

がそれに對するシカモア氏の同情は何處かすこしばかりそぐはない處がある。「そりやさうで御座いませうとも、何しろ、そのまゝにして置けば、すくなくとも安全だつた筈の學校から、わざ／＼子供達を奪ひ出して此の始末になりましたのですから、貴女に責任感が重くるしくかかつて來るのは御尤もと存じます……」

シヤロツト女史は突然大聲をあげて對手の言葉を遮つた。「わたしに何の責任がありますか。

——責任は絶対に無い筈です。シカモアさん。誤解なさらないやうに願ひます。たとへあの不良少年の様な子供達の身の上にとどの様な事件が起りませうとも、私に何の責任がありますか。そりや非常に氣の毒にも可哀相にも思つて居ります。——けれども私は自分を責めは致しませ

ぬ。私はただあの子供を、望ましくない境遇から救つてやつて、一つの學校、それもなか／＼お金銭のかゝる學校でグライムス氏が特別に推薦して呉れましたのに入学させてやりましただけで、それは私の義務としてやらねばなりませんことでしたから致したのです。私の責任はその時で済んでしまつた筈です。」

シカモア氏は此の時までにする／＼と身體を椅子に埋めたまゝで、丁度女史の枕頭左斜めと云ふ位置に持つて行き、法律上の敵と云ふよりは。まるで親切なお醫者様の態度になつて居る。女子が滔々としやべり立てる間、彼は眼をその部屋の蛇腹の方にやつて居たが、やがて、女史の話が盡きかけると、別段顔を向けもしないで、やわらかな獨り言の様な調子で「別段法律上の責任はありますまいね。」

「ありませんとも」と女史「もし誰かに責任を問ふなら、グライムスさんこそ責任者ですよ。」

「とにかく私は貴方に二人の被保護者を出して戴くために私は今日参りましたのです」とシカモアはそつ氣なく云ひ出した「オスワルドサイデンハム氏が今夜サツザムブトンに上陸されるんです。」

「あの人は何時だつて歸る歸る云つて、歸つたことが無いぢやありませんか。」

「今度は歸つて來ました。」

「ほんとにあの人がはやく歸つて居てさへ呉れましたら、こんなことは起らなかつたのでせうに。ですが、ほんとに歸りましたの。」

「歸りました。もう英國に居ます。」

シヤロット女史は吐息をついて仰向になつた。アニンは急いで氣附眼藥の瓶を手渡した。「私はただ私の義務をしただけです」と喘ぐ様な聲を出した。

シカモアは此の時調子をすつと和けて、「で誰が責任者かと云ふ點はしばらく措いて……。」

「私は責任者ぢやありません。」

「ですが貴女はすこし不注意ぢやなかつたでせうか。」

「シカモアさん。不注意なのはあの子供です。今更あの子に罪を着せるのは私の忍び得ないこととありますが、——今、何とかして善良な少年と思ひたいのですが、思へません。普通の子供ではありませんのです。何しろあんな氣狂ひ同様なものゝ手にかゝつて腐敗させられてしまひましたんですからねえ。學校から、それも立派な學校から逃亡する様なことをしてかしたのです。それにシカモアさん。よく御承知を願つて置きたいのですが、わたしが學費は一切出し

て居りましたんですよ。何しろ遺産のことが常態ではありませんですよ。すべての収入が私には何の相談もなしに、あの若い女達の手に自由にせられてしまひますのでせう。まあ。そんなことを今さら兎や角申し度くはありませんが、私だけが學費を拂はねばならぬ破目に陥しいられ、私もよろこんで拂つたわけです。ですから、私だけ何分子供がすつかり腐敗しきつて居たものですから、もう致しかたありません。まるで破戸漢同様じやありませんか逃亡するなんて、私もうくすつかり手を洗つてしまひ度う御座んす。」

それに就いてシカモア氏は何事かを云はうとしたが、それよりもよいことを思ひついたらと云ふ顔付で、

「ともかくも」と云ふ「オスワルド・サイデンハム氏の依頼により、私はせめても一人の方の子供さん。あの娘の子さんの方なりともお連れして歸り度いと思ひますのですが……。」

「あの娘を御渡しすることは出来ません」と女史は遮二無二に云つてのけた。

「それをお拒みになりますと、事が六ヶ敷くなつて參りますが。」

「どうぞ誤解なされない様御願いたします。あの娘は立派な人の手に預けてあります。預かつて呉れて居る人は、ほんとに申し分のない立派な方なんです、ただ近所が……えい。家の外

では絶対に遊ばせない様に極々注意をして置きましたんですが、何しろまだ子供ですから、隙さへあれば飛び出すと云ふ次第で、——飽くまでも麻疹に對しては警戒をしておきましたが、……よく／＼あの娘も麻疹のことは心得て居た筈ですのに……やつぱり近所の穢らしい兒童たちと遊びますものですから……」

『麻疹になつたのですか。』

『さうです。』

『どうしてですか？』

『どうしてですか……』

『シャロットの奥様。これもやつぱり貴女の不注意です。貴女の爲めに如何に好意を以つて見ましても不注意たるはまぬがれません。サライのあの空氣の澄んだ學校に置きさへすれば、どんな傳染病にだつてかゝる氣遣ひはありません。』

『でもあそこには正統な宗教々育がありませんでした。』

『しかし貴女がご選びになつた學校に宗教々育らしいものがありますか。』

『わたしの信じますところでは……』

と女史は半分云つてやめた。

シカモアは茲でしばらく自分の云ひたいまゝを云ひだした。『シャロットの奥様。どうも私は變挺に思えてならないことですが、いや變挺どころかまるで不可思議でならないのですが、此の英國々民のカソリック教派の信者でも教會でも——まあ、私の云ひかたが間違つて居たら御免をかうむるとして、——いつたい宗教團體たるものが、子供の教育の全支配を得やうと思つて日夜苦慮を惜しまず莫大の精力を費して居るにもかゝはらず、まことに不注意極まる粗略なやりかたをして居るとはどうしたものぞう。——ほんとに驚くべく粗略で不注意ですね、——生徒の性情を考へず、健康を顧みず、その授ける教育そのものさへ考へて見ない。それから家庭のことなども更にお構ひなしで、ただ／＼彼等が考へて居るのは、子供達に烙印を捺しつけさへすればよい。死なうが生きやうが何うでもいと云つた有様ではありませんか。』

『あの學校は立派な學校です』とシャロット女史『大さう立派な學校です。貴方の非難はあまり慘酷で聞くに堪へられません。』

シカモアはまたも云ひたかつたことを控へて、別な方から『兎も角も、オスワルド・サイデンハム氏にあの娘の子さんの居る番地だけは知らせねばなりませんね。』

シャロット女史は暫く考へて居たが、『別にお匿しする必要もありません』と云つてバイパス夫人の番地を教へ、『最も信用して、婦人です』。シカモアはチョッキの衣囊から取り出した小形の手帳に注意深くそれを認め、それから、どうしようか、今すこし反抗的に出てやうか、このまゝおとなしく歸らうかと思ひくらべた末、とうとう反抗的になつて、

『何しろ』とその小形の手帳をもとの衣囊におさめながら、考へ深かさうに『學校教育と云ふことに宗教上の儀禮や信條やを第一義として強ひることは、他の場合よりは幾層倍も偽善と腐敗とを産み出すものと見えますね。どうもさう見るのか一斑の觀察ですよ。どんな學校でも宗教と名がついた以上駄目な學校と見做して、せう。そりや儲かにその筈です。一方に誇ると一方に間拔けて來るのが道理ですからね。世の中で一番賤しい不正直な人間が心證を示すすれば、宗教的心證を示す位示しよいものは無いでせう。學校でもその通りでして、他の何等の效驗の無い學校は、宗教的に嚴肅だと云ふことを賣物にするんです。まあ、事實から云へばあらゆる悪い學校が正統派宗教なんて云ふことを標榜するのであつて、別に正統派宗教が悪學校をつくり出すと云ふのはありません。が何れにしても現代では宗教と云ふ名前が、惡徳者の最後の避難場ですなあ。』

貴方はその様な世俗な御考へ以上何も考へてはいらつしやらないならば』とシャロット女史は頗る嚴肅な顔つきになつて『貴方はそれを何處か科學の實驗室にでも御出かけになつて御講釋なされるが結構ではありませんか。……私の感情と云ふことにはすこしも御願みがありませんのですね。……失禮です……』

『シャロットの奥様』とシカモアはその言葉に輕蔑の調をあらはしながら『貴方が子供をおいれになつた學校は餘程悪い種類の學校ですよ。』

『斷じてさうではありません』とシャロット女史『貴方は何の據りどころがあつて、そんなことをお仰いますか。』

シカモアは女史の云ふことなど耳に這らないと云つた風に『何か子供同志の間にほんの無邪氣ないたづらがあつたのを、教師が理由もへちまもなしに慘酷な嚴罰を加へると云ふのですから。』

『貴方がそんなことを御存じの筈は無いぢやありませんか。』

『ありますとも。直接聞きました。子供から。』

『ですが子供がどうして——』

『その子供は先生から綽名で呼ばれて返辭をしなかつたと云ふ理由から、没常識にも不可能な罪課を強ひられた。誰にも訴ふべき人が無い。で駈けて逃げた。リムスフィールドに行きつく心算であつたが、日が暮れて夜になつた。惘然な子供であつたから、或る親切さうな家を見つけたし、その家の女主人に、學校を逃げだして家に歸りたい心を告げ、イングル・ヌツクの伯母の番地を云つたものだから、その翌朝子供は送り届けられた。丁度今朝家に歸つたところだ。』

シヤロット女史は變な聲を出したが、シカモアはお構ひなくすん／＼話を急いだ。『どうして此の小船と堰との悲劇が生じたか、それは私の知る限りでは無い。子供はその事に就いては何んにも云はなかつた。何しろ黙り勝ちの方の少年だから、云はんでも濟むことは云はなかつたであります。兎も角もそれはこれからよく聞き糺して見ませう。』

『では——では——子供はまだ生きて居ますんですか』とシヤロット女史はせき込んだ。

『幸にも。』

『かう云ふ電報がありましたも。』

『私は二時間前に子供を見て來ました。』

『ですが此の電報や手紙やはどう御考へになります。』

シカモアは明瞭にくす／＼笑ひをしながら、『そりやグライムスさんが説明の任にあたられませう。』

『で子供は生きて居ますんですね。——そつくり。』

『びんしやんして居ますよ。繪のやうな鮮かな顔をして。』

『では……では……はんとうに管鞭をあて、飽くまでも懲らしめてやらねばならぬ』とシヤロット女史は叫んだ。『それこそピイターです。ピイターです。生きて居るとはほんとうに、人を馬鹿にした奴です。心配をさせて……ほんとに、私はその爲めに病氣になつてしまつた位です……アニンや……』

アニンは氣附眼藥を渡した。

シカモアは立ちあがつた。彼にはまだ女史に對して通告して置かねばならぬ本當の用事が残つて居る。だが女史の青い瞳のなかには、どうしても今即座に立つて歸つて呉れと要求する様な色が漲り溢つて居る。そして女史の頬も上にある例の特長の髭の叢が、云ひがたい辛辣さでもつて激情に震へて居る。

『あゝ。嫌だ。嫌だ。考へてさへ嫌だ』とシャロット女史『わたしはすっかり陥しいれられました。陥穽にいれられたのです。』

と云つたきり後は何の言葉も出ない。シカモアは今にも爆發しさうな女史の激情を見て破裂しないさきにはやく用向を傳へた方がよいと覺悟し、勿體らしく自分の頸をたゞいて、如何にも悠揚せまらざるが如き態度をもつてすらく話した。

『實は今日御邪魔いたしました本當の用件を申しあげなければなりませんですが、奥様、今日の用件は決して子供の逃亡一件のことではありません。全然他のことです。あの子供等に對する御互の態度も條件もすつかり變化して來ることになりました。そして今後は、貴女もまたスタブランドのお嬢さん達もジャンやビイターアの正當な保護者ではなくなつてしまひました。その事情を。奥様。すこし詳しく御説明致しませう。實は二人の獨逸人が伊太利のカブリの脚で、ビイターアの父母の船が覆るところをいたのださうです。それによると最初スタブランド君が船頭と掴みあつて居るうちに、とう／＼船が覆り、それきり二人の男の姿は消えてしまつたさうでして、多分二人とも曳きすりあつて死んだであらうとは、確かに實見者の云ふところですからスタブランド夫人の方ですが、可哀相に随分長い間海のなかを泳いで居たさうです。』

餘程その時は浪が荒かつたさうですが、陸地までの半分の距離位までは泳いで居たとのことです。此の春私もネブルに旅行した際によく調べて見ましたが、どうも此の二人の獨逸人の實見談は信を置くに足ると思はれます。此の二人の獨逸人は、——何と申したらよいでせう。あの大砲で有名なクルツの關係者で決して虚言など云ふ人ではなし、且つその當時カブリに棲んで居ましたのです。で奥様、肝心なところで、此の實驗談を信ずるとすれば、スタブランド夫人の方の遺書が效力を持つわけで良人の方には無効となり、したがつてオスワルド・サイデンハム氏だけが子供達の唯一人の保護者と云ふことになりますのです……』

と云つて言葉をきつて。老女史の四角な顔は次第に勿體らしい威嚴ある満足らしい色が漲つて來た。

『ではあの子供達は幸にあの女達の手から救はれることになりましたのですね』とシャロット女史『それでわたしの義務もすみましたよ。それさへ確かなれば、もう／＼、私は何も申すことは有りません。わたしも随分つくしましたが、今更とやかく申しますまい。何も感謝され度くてやつたわけでは無いのですから、いづれ子供達が大きくなつたら了解つて呉れますでせう。』

アニンは教會堂で牧師の説教に有難く頷くやうな言葉を出して女史の言葉に頷いた。

『是れでわたしの氣持もすつきり致しましたよ』と老女史——『ほんとによくになりました——甥が歸つて呉れました以上、もう／＼何の心配もありません』と云つて女史はジョージアン初期の身振りよろしく氣附艱藥を勿體らしく雅致ぶつて嗅いで『私ほんとにすつきりいたしましたのよ。馬鹿にされ、輕蔑され、弄ばれて病氣にまでなつたのですが、もう、もう、すつきりしました。すつきりしました。』

と云つて又もや勿體らしく氣附艱藥をとりあげた。

第九 歸れる人

狀師シカモア氏がシャロット女史をぎゆうぎゆうやつつけて居る間に、オスワルド・サイデンハムは既に倫敦の西端部をあるきまはつて居た。

彼はまたもや生涯の新危機にでつくはしたのである。全力を擧げて徹頭徹尾不快な制限された生活に身をあて嵌めて行かうとして居るのである。倫敦に居る彼の醫者はたゞ／＼彼を峻嚴に宣告するばかりであつた。曰く、もはや斷じて阿弗利加に行つて生活することは不可能だ。彼は普通な人間が堪へ得られる最後の極度まで黒水熱病の發作に堪へ忍んで来て、もしも此の次ぎの一發作が起る様なことがあれば、もう生命は無いものだ。故國に歸ると云ふ最大の動機は之れであつたが、搦てゝ加へて、すつと以前にかの埃及爆彈の破片が腕のなかに這りこんで眠つて居たのが、急に疼き出して来て、之れもどうでも英國に歸つて適當な治療室で手術して貰はねばならぬと云ふ必要がある。と云ふので、今や親友の一人もなく職業の道も更にない倫敦に歸つて、も一度新しい生活を踏みださねばならぬと云ふ境遇になつたのである。

全くがっかりして歸つて來た。こんなに力の抜けてしまったことは無い。英國に歸つてからの彼は前途に何等想像に摺み得べき光明が無い。ついそ腕を繙帯で吊つた此のまゝの姿で阿弗利加に歸つて行き、今生の思ひ出に最後の一仕事花々しくやつて、熱病菌の渦巻くなかに斷未魔の息を引いてしまはうかと、何度そんな悲壯な決心に誘惑されたか知れない。だが何か此の英國でも長い間には役に立つことがあるかも知れない。そして何物か彼のうちにある無神の意識が、まだく自暴自棄に生命を粗末にしてはならないぞと根強く叫んで居る様な心持ちがした。

また暫くの間は、あまりに阿弗利加の實情が英國に知られて居ないのに氣を腐らした。それに英本國では光榮ある大帝國主義の思想が如何にも鈍化されて、腐れかゝつて居るのが嫌やで嫌やで仕様が無い。英本國ではあらゆるものがみんな眉に唾ものゝやうに思はれ、そして一度眉に唾して御破する以上、そこに或は大に働かねばならぬものが發見出来る様な心持ちがする。ともかくも彼に何等かの力が残つて居る以上、その力を以つて、英本國の人々に阿弗利加の過去未來を熟知せしめるべく働くことが出来やう。此の仕事はやるだけの意義があり、したがつて生存するだけの意義もある。阿弗利加に渡つたとて最早や彼の爲めには活動の餘地もなく、

ただ死ぬだけの事である。

以上の事が理智の上から極めて明白だ。しかしいくら明日でもこれから英國に留まつてする生活が淋しい心細いものであるとの感じは更に變らない。遙かに阿弗利加の天地を觀れば長いこと磊々の胸襟を開きあつた司令長官や副官ムイルやその他勇士の面々がある。忠實な土人の奴隷もあり、その奴隷を愛することも出来る。いたるところ痛快な活劇が演ぜられる。それは全く彼の生活に馴れた雰圍氣である。嗚呼。あそこにはまた太陽が爛々と照り輝いて居る。温帯では夢にも見られない燃ゆるが如き太陽だ。あゝ、それを思ふと此の英國は何と云ふ灰色だ。落莫だ。曇天だ。孤獨寂寥の世界だ。茲では太陽の光とは要するに空寂な無存在を意味して居るに過ぎないでは無いか。

しかし、彼は心のうちで考へて見た。兎も角も英國で彼が爲さうと思ひ又爲し得ると思はれる此の種の仕事は、必ずしも不愉快なものでは無い。何は措いても全力をあげて見ねばならぬものだ。彼は自分の性質が峻阻になつたことを自覺して居た。長い間の不健康がさなきだに怒りつばい性質を愈々悚立ちやすくしてしまつた。又彼は自分の腦髓が今や大へん不備かな一道具になつてしまつたことを痛感した。ある時は明晰な頭腦になるが、多くはどんより疲れて、

不決斷と中途半端な思想とを泡立たせて居るに過ぎない。阿弗利加で本領を發揮させれば、一刀兩斷の爽快味があるべきものを此の祖國ではたしかに愚圖愚圖寝入りの喧嘩になつてしまひやすい。口惜しまぎれに指節を噛み、向脛を傷け勝ちになりやすい。あゝ。つまらない英國——しかし何等の面白味が見出せないにしても、仕事を眞面目にやらねばならぬと切に感じた。「熱心を單めるんだ。燃え立つんだ」かうオスワルドは獨りで云つて見た。「一切を新たに出来ない。それよりほかに仕方がない。」

だがその日の午後倫敦で彼が強ひても燃えたくせよとした心は熱心にはならでむしろ怒氣そのものであつた。困惑に陥つた場合必ずオスワルドの心の逃げ行くところは憤怒と呪咀とである。他人なら落膽する場合、彼は怒り出す。沈鬱な型の人間が努力を捨てる場合、血氣な型の人間は蹴りまはつて暴れ狂ふ。前者が縮み込んでしまふ時、後者は蹴散らかしてさらけ出す。オスワルドは表面おとなしい顔付をして居ても、その腹では何物かに對して牙を碎いで居るであつた。彼の本能は、彼の肉體が次第に衰へて行く悲憤を、何物か外部に敵をもとめて、それに憎惡の焦點を結ばせやうとするのであつた。

此れももとより彼は自覺して居て、全力をあげて此の黑暗澹たる心を抑へつけ、惡鬼の様な思想や度胸やになることを避けよう避けようとした。彼は如何にも蹴散らかして見たい。けれども何だか蹴散らかすだけのことに至勢力を費してしまふのが惜しかつた。彼は蹴散らかすのを正義だとは思ひ得ない。まだ運命に對する自分一個の呪咀の感情でもつて、自分の理性を亂してはならない。飽くまでも自制した靜謐な心と高踏の精神とを保持して行かねばならない。「しつかりしろ！」とオスワルドは自分自身に云つた。あだかも此の決心に裏書きをするやうに。

まづこんな風な道徳的決心に従つて、此の脊高の瘦せこけた白眼兒は、心のうちには自分が大に膨脹に與つた筈の帝國の現狀に就いて頗る慊らず、痛心悶々の情を抑へながらも、畸形になつた頬を、恰も半分手いれの美術寫眞の肖像よろしく、出来るだけ表情をやわらげて、愉快げに、逸樂の人のやうに見せかけ、恰ものらりくらりと身邊に快樂を探りもとめて居る無爲飽慾の人として英國の社會には入り込まうとしたのであつた。そして出来るだけ沈着にあせらな

いで居やうと努めた。何も氣がかりにならぬ様に努めた。つまり極々平靜な傍觀者たればいゝのである。即ち先づ大に落ちつかうとする前に、その豫備知識として一通り倫敦を見まはるには此の平靜なる傍觀者たるに限ると心得たのである。これから倫敦に永住しようか、それとも

田舎の静かなところに隠栖してしまはうか。それはどつちでも構はない。氣に向いた方にすればよい。心さう思つて見れば總てが氣に向いて居る。甚だ愉快だ。今は賢明なるぶらつきと、判断あり適度ある活動との生活こそ望ましかれた。斷じて騒ぎまはつてはならぬ。

彼はその前日に英國に到着したのであるが、しかしシカモア氏にほんの一筆通知した他、誰にも歸つたことを知らせない。彼は倫敦につくと先づピカデリー街のクライマックス俱樂部に



シムパンヤチ

宿をとつた。此の俱樂部は半分ホテルになつて居て、寢室もあれば居間もある。それから一寸醫者を訪ねて——實は此の醫者の診斷によつて彼は始めて永久にアフリカを見ずてねばならぬ運命に向つたのである——歸つてからは俱樂部でその夕べを新聞や雑誌やを讀んで氣を静めようとした。だが誰しもオスワルドのやうに惘寂して病氣で居る時は新聞や雑誌やに書いてあることはみんな間違つて居て癪にさはるばかりだ。

丁度1908年で、チャムバレン氏が南阿から歸つて盛に自由貿易反對論を唱へて居た時だ。——しかもオスワルド自身は氣質の上からして自由貿易賛成論者である。さて日刊週刊月

刊のあらゆる新聞雑誌がどれもこれも保護貿易是非の論議を満載して居る。保護貿易なんて云ふことはオスワルドの眼には殆んど堪へ難い下劣な精神の發露と見える。彼の帝國主義はその根本がロマンチックな寛宏の空想から成り立つて居て、實は彼自らの奉仕の精神を慰める夢幻に過ぎない。彼は帝國の爲めに奉仕し、帝國は人類の爲めに奉仕すると思へばこそ生きて居られるのだ。保護貿易なんて云ふことは最も心の穢い政策であつて到底光榮ある帝國の決しとすべき限りでは無い。それを堂々たる英國々民が白晝論じて居るとは何事ぞ。保護貿易だの關稅政策だのと云ふは國家機關を以つて海賊を行ふものだ。全くの我利我利主義だ。エリザ朝時代やジャコピン黨の海賊の思想が新たに權化して、その古るぼけた光榮を再びくりかへさうと夢想するもの、此の海賊思想があるが爲めに、英國史に奴隸賣買だのウルスター問題だのと云ふ穢れたものが出來たわけだ。そこには何ら帝國の光榮がない。帝國の光榮あるところは、ただバアジニアやバルバドスやの植樹事業位なものではないか。それ以外のこと悉く海賊同様だと思ふとオスワルドの心は悚立つて悚立つて、茫然自失するばかりに切齒の状態だ。あゝ何と云ふ保護貿易論者の饒舌きはまることぞ。之れ明かに英國を破滅に導くものではないか……。

時その振舞を眼をまわくして見て居た同宿者の視線とびたりと會つたので、照れかくしに、恰もそれを彼が雑誌を読む時の平常の癖であるかの様に見せかけ、今度はその俱樂部書庫にありおはせの詩人サウゼイの「The Poet」と云ふ本を抜き出しその方に意を向けようとした。食事が済むと彼は西端部の方に散歩に出かけ、アルハムブラにも行つて見た。茲は慥かに新聞雑誌よりは氣を静めて呉れる。飛んで罪惡の炎にいる人間と云ふ蛾が持つ古來からの興奮を彼は此の時はずこしも感じなかつた。此の地の此の幻影のやうな輝きが以前はどうして彼の血をあんなに湧かしたらうと不思議に思はれたのであつた。それにしても矢つ張りその出し物の妙に衝動をそしる輝かな何等前後の脈絡の無さうなぼんやりした味はいは如何にも面白かつた。

その夜はぐつすりと寝た。朝になるとシカモカ氏の書生が電話をかけて來た。それによると先生は只今市外に出てシャロット・サイデンハム女史を訪ふて居られるが、すぐに歸られる筈で、午後の十一時にオスワルドに會談を願ひたいものであるとの事——餘程それは重大な要件があるらしい。その日は曇りに明けてしばらく曖昧だつたが、漸く晴れた。正午前頃にはもう倫敦では稀に見る輝かな快晴の天氣である。けれどもオスワルドにとつては弱い光線の一微動に過ぎない。帽子でも脱いだら、悚つと寒けがしさうである。が彼は大に瘦我慢を張つた。十

月は暖かくて結構だ』などと云つて見て、一つまた西端部をぶらりぶらりやつて店を素見したり物事の變化を見たりしようとして心に決め、グリーン公園を見おろす窓のもとに、遅く朝食を済まし、俱樂部の髮床により、更に洋服屋に行つて、それからボンド街で新式の帽子三つと瑪瑙の帽冠に金の帯を巻いた一本の頑固な杖を買ひ、更に長靴、手袋その他の雜品を買ひ調べた。彼が第二の俱樂部はバル・マル通りのブランテン俱樂部であつて、そこに新聞を讀みに立ち寄つたのであるが、またもや伊の保護貿易論が載つて居て癢に觸り出して來た。あたりを見廻しても誰も知つて居る顔が無い。淋しい晝食をやつた。そして午後になると一度倫敦の賑かななかに流れ込むだ。

彼はもはや倫敦の市街をあるいても別に氣おくれもせず不快な自意識にも責められないで済む様になつた。彼の片側焼けそづれた顔が、以前ほどには自分の氣がかりにならずに済む様になり、充分に自己の不具性と融和し得て來た。以前では自分の醜を誇張して考へるのであつたが、今では却つてぼんやり忘れてしまつて居る方だ。廣過ぎるほどの大鍔の帽子を上手に阿彌陀に冠つて丁度義眼の方の片目が影にかくれるやうになつて居り、黒い髯が幾何學的な形に濃ゆく整つて居る。彼はよく鏡を見るが、その度にすつかり自分の醜惡化された半面を最小限度

に見せかける術を心得てしまつて居る。市街を行けば、行きすりの人が好奇の眼を持つて立ちとまつて、彼のひよる長い姿を見つめるのであるが、それは誰の場合にだつてよくあることだ。彼はバルマル街に沿ふて行つた。其の頃のバルマル街はまだ崇高い上品なところが、帝國自動車俱樂部なんて云ふものに掻き亂されたり、商店の懸命な廣告術に俗悪にされたりしては居ない。聖セームス街を通つてピカデリーに曲る間、眼にうつるのは昔のゼルミンガン下町通り、其處は彼がまだ若々し海軍士官候補生時代に始めてレストウランドの味をしめて遊蕩の経験をした思ひ出深いところである。その若かつた痴夢が今は遠い遠い世界のことと思はれる。ポンド街の店々が次第に彼を北の方に誘つて行く。彼の子供の時代に喜んで見たドレの繪畫館は矢張り變らずやつて居た。それから彼は大理石門邊までも牛津街をうろづき歩いた——ジローは昔のまゝのジローで、セルフリツヂはまだ倫敦の世界に曙を齎しては居なかつた時代である——それから歸りにはセームル街を通つてレゼンド街に出たのであつた。その道ばたのザアレーの教會堂には一寸會釋をして置いた。そこは彼の教母で、もうお婆さんのパーシバル・ペラム夫人の愛護のもとに、昔、短かい市松模様のフロツクに白の靴下と云ふ姿で聖餐の御馳走になりに行つたところである。すべてが千八百九十七年に捨て行つた通り變化がない。かの舊

ストランドの街觀を大破壊し、本屋町を一掃し、ドルレン小路を無いものにし、舊跡の何十と云ふものを狼藉してしまつた一大市區改正は、其の頃まだ西端部には襲つては來なかつた。矢張り昔と同じ様に瀟洒とした輕快さうな一頭馬車が群つて居り、立場のところには整然と列をなして居る。荷馬車もまだ昔と變らず澤山通る。レゼンド街やピカデリーやは矢張り綺麗に着飾つた人々が賑はひ、殊に美裝の女があてどもなく逍遙して居る有様が、ただ昔と變つたと云へば、その舉動が明かに雅致を失つたこと、顔の塗りたてがげげしくなつた位のものである。瓮石道のほとりに昔ながらの乞食もあるし、サンドウキツチ賣りも居る。多分昔よりは荷馬車がピカデリーやオスフォド・サーカス邊には群るやうになり、すこしは雑踏の度を増した點はあらう。が之れは或は人煙稀少の阿弗利加の蠻地から歸つて來た眼に特に目立つたことであつたかも知れない。

そしてまたそこゝに自動車なるものゝ姿を認めた。變妙な無恰好な何だか馬の無い馬車の様なものだ。いやさう云ふよりもあのすんぐりしてさもく重つたさうな趣きは何處か軍艦みたいなところがある。なかに五六臺は青いやうな煙をブツ／＼と出して嫌な臭ひを搖曳させた。レゼント街では自由畫堂の前で此の怪物の一臺が困難に陥つて居る。群集が

よりたかつて面白がつて居る。特に通りがかりの辻侍ちの馭者は明瞭に嘲罵の聲を放つて居る。オスワルドもまた好奇の群集のなかに立ちまちつて、舗道の隅の方で、その運轉手が頬を熱しながら困惑さうな顔をして怪物の狂つた個所を何だかコチ／＼やつて居るのを眺めた。

オスワルドの傍に立つて居る白チョッキの老紳士がこちらに顔を向けて云ふには、

『ほんとに馬鹿げたものですね。騒しくて、危険で、その上悪臭を放つんですから、どうしてもしりや禁止せねばなりませんね。』

『まあ、どうにか改良して行くでせう』とオスワルド。

『あんなもの、改良の仕方が無いぢやありませんか』と老紳士、『忌々しい鐵の化物ですね。』

かう云ふがはいか、それで結論も済んだと云ふ顔付きで此の老紳士はさつさと行つてしまつた。オスワルドも亦ものを考へながらその老紳士の行つた跡の方へ足を動かした……。

再びまた思ひあたる様に四邊を見まはした。ピカデリー・サーカス・あゝ。茲には古るくから馴染みのカツフエ・モニコがある……ある。ことにはクリテリオンがある……。

だが、どれもこれも小型のものとしか見えない。

小さく見える！ 之れが彼の倫敦歸來第一の強い印象である。どうも倫敦が小さな難形のや

うなものに見えてしようが無い。

此の小形の町が世界第一の大帝國の首都であるとは何とも變挺なことである。遠方から歸つて来た人の眼には、倫敦と云ふ都は一向帝國の國運に無關心で、冷淡で、全然利己主義にばかり没頭して居るとしか見えない。一度倫敦を遠く離れて、ウガンダに行き、東アフリカに行き、蘇丹に行き、埃及に行つて見ると、如何にも天外范漠たるの地域にあり、加之もこれ等の地域では大英國が、平和の爲め文明の爲めに史上類例なき大きな寄與をしたところであるから、そこから想像した倫敦は雄大な寛宏な倫敦である。救ひを叫べばすぐに救ひの手が來り、援助を願へば、すぐに援助の手が來べき筈の倫敦である。だが實際は此の狹隘な金屬的な街路に群る市民たちはみんな利己のことにばかり醜態として居る。メンゴの大市場に雑踏する白衣の群集と何等擇ぶところが無い。特に憤慨すべきは、何等アフリカのことを考へて居ないことだ——

薬にしたくもそんな考へが無いのだ。彼はボンド街とその繁雜で不便な舗道とを、ウガンダの首都の宏大な遊園地の林間路に比較して考へて見て、適かに後者のはうが立派だと思つた。それから彼はヨーク侯の階段路をくだつて、古い乳牛場の牛の群を見ながら柵のほとりを過ぎ、マルの牧場の方へ行つた。はるかに見えるパツキングムの宮殿は、アフリカのカムバラの城

若の展望潤達たるに及びもつかない。聖ゼムス公園の植物園とかその鐵柵など云ふものには、ウガンダの首都の廣大な外廓を繞つて居るところの羊齒類その他隱花植物の豊富な點や、また赤々と色彩をほどこした葦の防柵やを見た眼からは何と云ふ貧弱な衰つばいものだらう。オスワルドの眼には、すべての英國の樹木は矮生であるとしか映らなかつた。

宮殿の方へ丁度樹木採伐が行はれつゝあつた。採伐された跡は齒が抜けた様にまだ代りの樹木が植ゑられて居ない。それに變挺な形をした板圍ひが一つあつて、エドワード王陛下がピクトリア女王陛下への孝心を示すべく建設中の立像を包むで居る。聽てその包みの暮は女王の孫の獨帝に打ち落とされるのを待つて居るのであるが……。

それから彼は官衙の立ちならぶホワイトホールの大道の方に行つた——その頃はまだアドミラルチイ・アアチが無くて、マルの牧場からは、一寸突き出た堤さへまはれば噴泉園のところを傳つてすぐと來られる様になつた居たのであつた。そこにもオスワルドは暫く立ちとまつて、トラファルガー街のはいつくばつた様な建築や妙に高い尖塔やを眺めまはした。みんな十月の太陽光に沿ふて琥珀色に淡い。眺めをはつて、足をウエストミンスターの方に運んだ。彼の心は次第に『さ迷へる歸來人』としての意識が強くなつて來た。禁衛騎兵の營所の前に騎馬

で立つて居る番兵にちよつと笑顔を見せ、新たに建つた軍事省の建築を見て大に贊意を動かし、昔の同僚で顔をおぼえて居るのに會つたり、海軍省や殖民省やの前を懐しく過ぎたりした。此の一衢街においてこそ舊世界の運命を次第に醗酵醸成させて、遂に歐洲の天地を狭しとして七大海洋をわがものとす大發展大膨脹の發祥地である。オスワルド自身もより大なる自負をもつて此の大發展大膨脹に参加した一人である。彼は悠然としてウエストミンスター橋にさしかかり、低徊して河の流れを覗いて見た。が要するにその流れとて一溜りの水たるに過ぎない。聖パウルの大寺院を遠く眼かに望むとともに、チャリングクロス停車場の赤錆びた屋根と疊的な鐵のブリツヂが、露骨なのは何だかピクトリア朝時代の風潮を性格づけた利己的跋扈の魂が市街美を不態に横領して居る様で、此の時ほど醜く見えたことが無い。

彼はウエストミンスター橋畔を一端から一端に横ぎつて欄干に身をもたせかけながら、國會議事堂を眺めた。旗は翻つて居り、一群れの絹帽の紳士と華美に裝つた淑女連とが入り雜つて地壇の上で喫茶の歡を頰つて居る。

オスワルドは心のうちで『なんだつて、またあんな偽のゴチック建築で大帝國の議政なんかしなければならぬだらう。すくなくとも議事堂はローマ式建築であつて欲しいものだ……』

と思つた。

するうち彼の注意は運送車や通行人やが群れて居る方に向かつた。そして獨り言を云つた。
 『あゝ、あんな人間達には皆目わからないんだ。あんな人達の眼の前に突然に屋氣樓になつて、此の古ぼけた議事堂が支配して居る海外の殖民地やその都會などが出現したらどうであらう……』
 ……丁度その時、一人の小柄な頑丈さうな男が小馬に荷車を曳かせてやつて来て顔るオスワルドの眼を曳いた。その小馬の荷車は如何にも輕快さうな新形のもの、馬方の着て居る着物も新しさうでさつぱりして居る。口の隅にくはえた天向きのパイプからは煙がたちのほり、着物の鈕穴には眞紅の大輪の菊の花が挿し込んである。何處までも自足した體たらくで、天上天下なんの不平なしと云ふ顔つき、時々手綱をやさしくしやくつたり、またまるで魚釣りにでも出かけて居るやうな氣分でしなやかに小馬に鞭を呉れてやつて居る。『あゝ、何んだつてまたあんなに氣樂に出来たもんだらう』と自ら問ふて見た。之れまで彼はかう云ふやうに自足した顔付きを、恰もスフィンクスの謎に對するやうに阿弗利加で土人の何の苦もない顔に見つけて來て居る。
 『帝國もへちまもあの男にはないなあ』とオスワルドは云つた。

帝國はオスワルドにとつては何のへちまでも無い。大關心だ。大に煩はして居る。いや見れば見るものが悉くオスワルドを煩はして居る。かう云ふ場合において、どちらが眞理かその解決は微妙だが、ともかくも肉體上の沈淪が沮喪した思想をつくるのか、それとも懷疑に蝕まれた心が人間の神経を病的にしてしまふのか、何れにもせよ、彼の事業に對する自信や計畫に對する覇心やが、殆んど知覺する能はざる程な速度ながら次第に消滅して行くのであつた。

すくなくとも過去五六年の間は何の懷疑心もなく事業に没頭して來た。ひたすらに多忙であつた。が今となつては、不健康な肉體が不如意な環境と結びついて、これまでつひぞ疑つたこともない懷疑の世界に彼を暴露してしまつたのであつた。そしてその懷疑たるや極めて根本的原始的なものである。その懷疑は彼の生活の根源にまでも食ひ込んで行つた。彼は今や『帝國なるものが嘗つて彼が考へ來つたものゝやうに、しかく立派な偉大なものであるかどうかを疑ひ出した。……彼が生命を捧げんとしたその『帝國』が懷疑の焦點となつたのである。

ただし之れは彼を帝國主義者たらしめざるものとなるのではなくて、寧ろそれと正反對に彼

の帝國主義的思想を益々鋭敏にいら〜させて焦燥の度を上げしかりであつた。

オスワルドは前後合すれば十八年間で云ふものをアフリカの中部及び東部に過したるのである。彼の病氣が突然にその忙しい生活を停止させた。彼が此の前に英國に歸つてから二年の餘



殿宮 ▲ ガンキツガ

にわたる間、重にアフリカのランゴの地域を出つはいつして、カ
パレガ族と戦つたり、蘇丹人の殘黨を征服したりした。又ウガンダ
の反王のムワンガ酋長の包圍攻撃にも參與し、更にその子の幼酋
長を擁立させ、後には親らその地位をとつて代つてしまつた。千八
百九十九年の終り頃に、彼の前の首領のサア・ハリイ・ジョンストン
が英領中央アフリカから特別委任をうけてウガンダにやつて來る様
になり、大に地區の整理を行ひ、行政機關を敷き、鐵道を布設し郵
便を開始し旺に文明的施設をやつた。その翌年に戦争がまた始まつ
たが、此の戦争こそアフリカ利經倫最終の戦争であつたとも云へや
う。その原因はナンヂ族の一部落が電信柱に架してある銅線を頗る執念深く掠奪にやつて來る
ことから始まつたのであつて、何の爲めに彼等が銅線を盗むかと調べて見たら、彼等蠻人がそ

の妻女を飾るために腕輪や 踝輪やを銅線でつくらうと云ふのである。随分此の婦人裝飾のた
めには惱まされとほして來た。銅線をその本來目的に任用する爲めにおそらく最大最善の努力
を拂つたであらう。之れは戦争と云ふよりも寧ろ相互の誤解に過ぎなかつたので、充分に蠻人
に説明しさへすれば解決が出来ることであつたから、オスワルドがその任にあつて、うまく
纏めることが出来た。此の銅線さわざから、彼が病臥する迄の間の一仕事は、海岸からビクト
リヤヌヤンザ湖までの鐵道布設であつた。

ウガンダにおいても、ヌヤサランドに於けると同様、オスワルドは丸で國家創業の様な痛快
な興味でもつて、その地の開發整正の忙しい迅速なる業に參加することが出来たのである。す
くなくともその事業に參與して居る數年間と云ふもの全精神が炎と燃えたつて居るから、どう
して懷疑などが這り込んで來る餘地があらうに。

十九世紀葉末におけるアフリカ整正の事業はおそらく全世界の歴史中最も迅速に且つ最も有
效的になされた整正事業であつたらう。千八百八十年代の終り頃までの全アフリカと云ふもの
は、下及埃の端からかけてロデシヤにいたるまで、一面ただこれ混沌たる冒險と悲惨との世界
のみ、その無頼なる野蠻横行の闇黒世界を、小銃を以つて打ちまくつたのであつた。そしてアラ

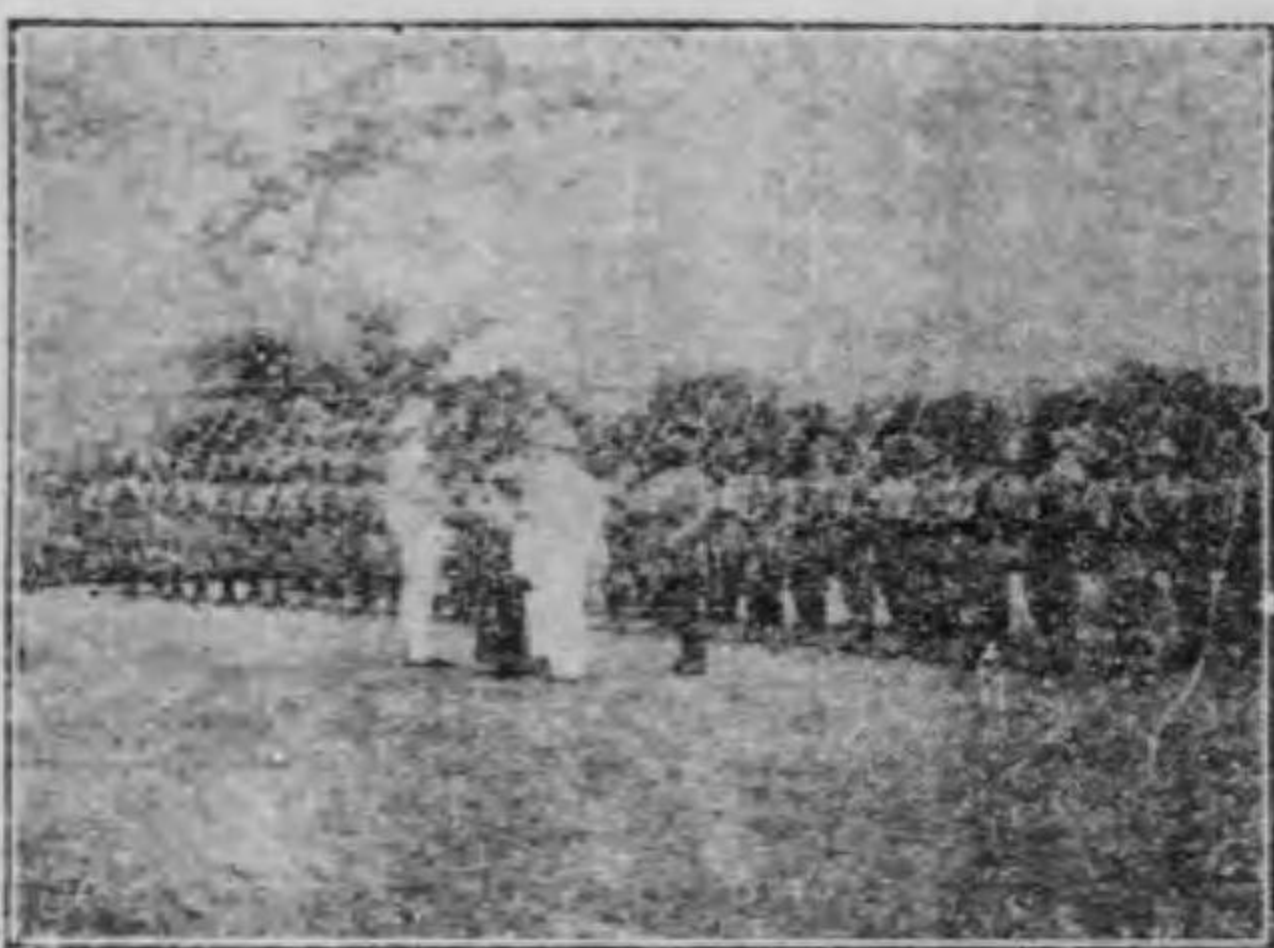
ブ人と歐洲人とが茲に大なる活躍の場面を開いたのである。その頃はヌビアからロデシヤにかけて學校なんて名のつくものは更に無い。あるものはただ不斷に連續する腥血の無益な流出のみ、長年の間ただ争闘、ただ惨酷、ただ猛烈なる本能慾の發現のみ、それが愈々益々嵩じて来て正しく大修羅場を展開して来て居る時である。此の惨憺たる阿弗利加に文明の輝きを照さうとすれば、愈々光を投じて愈々照したるもの醜惡した腐敗の狀態の暴露のみ、茲に救世の運動のやうな自覺でもつて新軍隊が派遣されたのであるけれども、此の腐敗に爛れたなかで何をすることが出来やう。ただ舊來の軍隊と同様旨滅法に亂暴を働いて惨酷なことをするより外は道が無い。以前の征蠻軍と異つて居るのはただ武器が優秀なだけである。アラブ人は全然馬鹿な屈從民族に過ぎないから、歐洲人は之れを狩りあつめて、頻りと團體的訓練をやつた。そして酷い勞働を背おはせた。だからしてクリスチヤニチの第一の成果は内亂を産んだ。そしてオスワルドがウガンダにおいて 第一の經驗はムワガガ王の反逆を平定すること、メンゴでロマンカソツク派を率ゐた敵に對してアングリカン派の争闘をなしたこと、であつた。此の後者の場合ではルガアトの小城砦に據つた敵をやう／＼マキシム砲で打ちまくつて、偉大なる高壓的平和を取へてつくつた。先づその數年間と云ふものザンベシ河からナイル瀑流までの間

は到るところ何等の安定した生活が無かつた。おそらく千八百八十年から千八百九十年にいたる十箇年間、中部及び西部阿弗利加には正直な人間は一人も居なかつたと云つてもよからう。そして爲すことにこと／＼絶望の影が翳して居る。そのなかにあつて苟且めにも正義の心をふりたてやうものなら、たちまち蹂躪が来る。迫害が来る。貪婪、憎惡、狡猾、反逆、蠻男、慘虐、あらゆる惡魔が黒い翼を重疊させて迫るのであつた。單に人間の根性がひねくれたばかりか、それに加勢してもつて、背後から熱帶的自然の慘酷性がほしひまゝに猛烈とやつて来て居るのだ。自然は此の熱帯では眞にむら氣で夜叉よりも怖しく意地悪をやる。温帯における自然は平和な乙女であつても、此處では眞に惡婆の形相である。毒草や寄生蟲や惡疫菌や猛獸やあらゆるものを此の惡婆はさらけだして居るのだ。けれども結局は文明が勝利を得た。花々しい勝利を得た。約十年間、それに處するの間は無限に厄難の連續だと思はれたが、回顧すれば短い一夢、今にも消えて無くなりさうだつた足跡道やまた絶えて道らしいものゝ無かつた叢林泥濘の瘴癘地が坦々たる往還となり、到るところ危険のない安全地帯となつた。鐵道があり郵便があり電信がある。それまでの阿弗利加は短命な酋長政治や蠻族王のむら氣な暴戾な權力亂用のもとにあつて、開闢以來何等恒心ある正義と云ふことを知らなかつたのであるが、茲

に始めて公平なる法律観念を得るにいたつた。湖水の上からは海賊の獨木舟が影を絶ち、山賊よりほか業ありとも知らなかつた蠻族が牧畜をやり出し、耕作をやり出した。そして其處此處

に學校が建つた。病院が出来た。おそらくウガンダにおいて二十五萬人位の新時代の若者は單獨に読み書きが出来たらう。ウガンダにおける讀んだり書いたりする能力の百分率は速かに印度や露西亞やのそれを凌駕しつゝある。

さて斯う云ふ變轉の順序を目前にした人の考へでは、當然、全世界と云ふものは刻々のうちに文明化され幸福に向つて行くこと云ふ觀念を持つ——手つとりばやく持つにきまつて居る。まるで地球が文明と云ふ幣で片つばしから掃きあつめられて居ると考へてしまふ。數年間オスワルドの心の傾向はこれだつた。全く此の信仰に生きて來た。そして片つばしから此の文明事業に着手して、着々活動した——黒水熱病にとつつかまつてその活動を停止される刹那まで活動はすこしもゆるまなかつたが、一度び緩むとともに懷疑が雁首を擡げ出した。



式兵團王ダンガウ

しかも南阿弗利加——あの西歐文明の一掃下にありとさへ運命づけられた南阿の地から彼の懷疑の第一芽萌が生れたのである。オスワルドの首領たるサア・ヘンリ・ジョンストンは頗る磊落で且つ辛辣なる酷評家で、彼はセシル・ロードが音頭をとつてはじめた新帝國主義上の新南阿政策を散々にやつつけた。實は喜望岬からかけてヌヤサランドにいたるまでのセシル・ロードの新殖民政策こそオスワルドの心に先づ懷疑の卵を孵化させたものである。本來帝國主義の生粹の傳統的的精神は、射利的政策を度外視した施設であるとジョンストンは真向から振り翳す。然るにシセル・ロードの新帝國主義はまるで一擱千金の獨みどり主義から割り出した利慾政策である。一度セシル・ロードが手を施すとともに全阿弗利加は露骨に我利々々主義の亂闘に亂舞しだした。忽ち類焼して白耳義國領も我利主義者の競争者と化し、コンゴ自由國は流血と慘苦との巷となつた。もとはコンゴ自由國は最も高潔なる動機のもとに創められた理想的政治機關で、また眞に國際的緩衝地たるの使命も帯びて居るものである。しかるにその自由國が茲に最も不信任な治者の手に委ねられ、その暴君無人な貪婪政略によつて素晴しく破壊されてしまつた。英領全殖民地を通じて、誠意ある爲政者も殖民政策家も、善意の探検家も、文明宣傳者も、ことごとく、此の新帝國主義から割りあてられた掠奪的責任を重々しく感ぜないわ

けには行かなかつた。そしてそれを第一に感じたのは土着の蠻人を取扱ふ上においてである。商人とか、樹木栽培業者とか、いろんな事業をやつて居る白人の實業家連がまたもや以前やつた奴隷扱ひを土着の蠻人の上に復活させた。さて奴隷扱ひは此の程度には止まつて居ない。總て組織が大仕掛になつて、今度は汽船に蠻族の一隊をのせて賣買同様なことをやりだし、愈々もつて白人の我利々々根性を天日にさらし出した。……

何のことはない白人は小さな海賊や山賊やを平定して、更に大仕掛な帝國主義の名を持つた大海賊大山賊をやるために道を開いたやうなものでは無いか？

右の様な事態が、既に、南阿の英柱戦争が始まる以前にオスワルドの理性に矛盾の苦みを與へつゝあつたのである。だが英柱戦争が始まるまでは、それやこれやに就いて種々な批評が行はれたにもかゝらず、兎も角も大帝國の所謂大目的とやらにはまだ誰も一指も觸れなかつた。そして帝國の泥棒行爲が續行されて居た。が愈々南阿戦争が勃發するに及んで始めて大英國の國家的弱點がおそろしく昂進して居る實際を散々に暴露した。英吉利帝國は眞の機會でないのに急いで狼狽して、戦争をおつばじめたばかりか、その戦争は全然先見も洞察も無い計畫の上に遂行され、その作戦がまた何たる失敗だらけのことか、これには流石に英國内の識者達も頗る

眉をひそめた。でおそろしい莫大な戦費の無駄づかいをした揚句、ともかくも金づくの方でやつと甚だ光榮ならざる勝利を得た。そして暴露されたものは英國軍隊の傳統がすっかり墮敗してしまつて居ることだけ、の可哀相なほどな貧弱な無力な點、その士官の大部分が何等教育の無い下劣な人間で、固陋な、理想の低いのは驚くべき程だ。みんな戦地の農業家や、法律家や、牧畜家やの、一視つてばかり居て、すつかり彼等殖民地の射利的人物のために籠絡されてしまつた。だから時までも平和が遷延せられて有耶無耶騒ぎをやつて居る間に、眞に英國の國辱たるべき惡徳が首尾よく行はれたのである。そこで始めて一般の教育ある英國人士は、此んな小さい戦果を収めるために何故あんなに莫大な犠牲を拂つたらうと、後の祭り

に氣がついた。英國國民の人民がこんな次第でがつかりして居るところに、さてこれを現はれて來たのは怖しい勇敢な競争者、即ち獨逸及び北米合衆國の殖民地上の野心は着々と眼前に成功を見せて來た。英國は此の二つの偉大な競争者に對して後ろに堂若たらざるを得ない。英國の採鐵冶金事業の權威は鼎の輕重を問はれた。化學工業では明かに遅れをとつた。世界の海上王たる地位もぐらつき出した。第一に威嚇して來たのは獨逸のやりかただ。先づ獨逸は對英競争に貿易上の勝利を占むべく次第に航路と汽船の數とを殖やし始めた。そして特に燃えたつ

炎のやうな熱心でもつて海軍擴張をやつた。此の海軍擴張は何を意味して居るか？ 英國は世界到るところに獨逸人の顔を見出すやうになつた。そしてどうやら獨逸もまた英國が執つたやうな新帝國主義を執つて居る。いや英國の人の眼に映るところでは、彼等獨逸人はもつと辛辣にもつと大膽にもつと勇敢に此の新帝國主義を把持して居る様だ。醒めよ。英國！ ウェルズ公殿下は加奈陀行啓から歸るとかう叫んだ。その叫びが物の響きに應ずる様にウガンダに鳴り渡つてオスワルドの耳に共鳴した。そして會へば會ふものにそれを説いた。(之れと同時にロースベリイ卿は「能率増進」と叫んだ。)

しかしオスワルドは今その願つて居る覺醒がせめても新聞紙の何處かに現はれて居はしまいかと思ひながら、手あたり次第に涉り讀んで見ても、ただ眼にうつるものは、忌はしい新帝國主義が臆面も無く、その掠奪、現金的な我利的な醜惡極まる心底を暴露して居るのに出くはすばかりである。オスワルドもつとて居る覺醒は靈魂の覺醒である。もつとて高大な理想に眼覺め、世界の文壇、くすぶきもつとて崇高な國家の使命を自覺することである。彼が會ひ度いと思ふ人間は、國家的教育の大家を語るの人である。人類改善の新機軸を出す人である。新しい人類學を樹て、熱帯植物學や、東洋語學や、研究して、もつて眞の帝國主義の活

動をもつと根元的な本質的な高大な立場に置くべき人である。しかるにその代りに彼の眼には英國の全體をあげて『外國人から税金をまきあげやう』と云ふ野卑な雜言で満たされて居る。こんな國家的我利々々亡者を目してどうして彼は覺醒だと名づけることが出来やう。彼にはただ惡魔が翼を重疊させて迫つて居るのだと思ひやうがなかつた。

われ／＼人間の深い信念と雖も、生理的變化の支配にあつては、どんなに窮いものであらう。身體の具合ひとつで、心持ちがすぐに變つてしまふのは、ほんとにたわいも無いものだ。

オスワルドが最後に襲つて來た黒水熱病の發作のために身體の機能を壞されてしまふ以前には、よしや多少の懷疑に蝕まれたとは云へ、まだ人類終局の勝利に就いては何等の疑念も抱かなかつたのである。彼が奉仕して來た大帝國は結局永續すべきものだと云ふ事も露ほども疑ひをかけなかつた。多少の屈折はあれ必ずその使命をはたし、何等かの方法で全人類の統一をやるだらうと確信して居た。よしや彼オスワルド自身は失敗もしくたばりもしよう。だが彼の所謂アングロサクソニズムは次第に勢力を持つて來て、正義と自由との傳統は光榮ある勝利

によつて裏書きせられ、かの『人間の殉死』と云ふ暗黒な場面は永久に消滅するだらうと云ふ信仰を持つて居た。だが熱病は彼の神経や肉體の組織やをすつかり衰へさせてしまつて、最早や此の終局の確信を享樂することが出来なくなつてしまつた。そして彼は世界の森羅萬象は必滅のものだと考へられるやうになつて來た。ゾイクリア朝時代の確固不動をさへ揺らつて來たと感じ出して來た。

此の歸國を餘儀なくされた熱病に呻きながら、或る夜寝られぬまでに彼は古代廢墟チムバベの死市の光景や、その他アフリカに埋没された廢墟の都會の面影を思ひ浮べて。さらに此の慘



像子師の墟廢のソロビオ

寥たる想ひはユカタンの廢都の方にも飛んで行つた。その他、バビロン、ニネヴェなどあらゆる古代文明の滅びた跡を辿つて行つた。それを思ふと何れの文明が滅びざるは無し。歴史はただ人類滅亡の長い連鎖であつて、あらゆる民が永久なものを探まうとして失敗した跡を語るばかりである。かう云ふ死市廢墟を想ふ心に更に最近彼が讀むだ人類構造學上の一論文から來る暗示が加つて來た。その論文は科學の權威をも



市廢バガマイテ

つて極めて確信的に二種の人類即ち大きな脳髓に繊細さはまる心理を持つて居るネアンデルサル族及びクロマグノン族が、現在人類の發生の以前に全く廢滅してしまつたことが證明されて居る。して見れば我々現在の人類もまた絶滅して過ぎ去るであらう。寝つかれぬ夜を次第に高まる熱とともにかう云ふ感慨に襲はれるのは甚だ凄愴で寂寞で怖しいことであつた。やうやくのことと此の種の暗鬱な想ひから脱して寢つくと今度は夢にまた此の灰色は心持ちを高潮させたやうなものか訪れて來る。幾度も幾度も同じ夢が繰り返された。

さう云ふ夢のひとつは明かに惡魔の形相をそなへて徹頭徹尾現實的に迫つて來た。また他のひとつは彼の白日の醒めた決斷力を豫め序曲に示す様に心を支配してしまつた。夢はさながら震へる心の幕に幻想の映畫を躍らす腹黒い創造的藝術家である。夢の惡魔はすつかりオスワルドを掌裡に捕へて思ひのまゝに醜弄する。彼が心の奥に酵母の如くに生れ出た懷疑と齟齬とに、怪奇な光芒を添へて無限に不可思議な暗示を齎して來る。その雲霞の様な不合理な超絶的

な恐怖の群るなかに一貫した一つのものが絶えずオスワルドを惱ました。それは暗い深い森林のなかに居ると云ふ思ひだ。そしてその森から一生懸命にのかれ出やうとする努力だ。何でも彼は何を征伐するともわからないが兎も角も或る遠征軍の一隊を率ゐて居る隊長で、無限に暗い森の奥にさ迷ひ込んでしまつて居る。率ゐて居る人数は幾千か幾萬か幾百萬か不確かだが、ただ何處までも續いて居る。そして眞黒い樹木や蔦蘿類が彼の身のまはりに天を蔽ふまで繁つて居て、時には自分がたつたひとりとそのなかに絡まれてしまふ。見るかぎり暗く暗く繁つて居る。蔦蘿が身體をびつ掻き、長い蛇の様な蔦蘿が顔を巻きつく……そして彼は不斷にのがれ出やうと身をうねり藻掻く、藻掻いて藻掻いてのがれ行かうとする處は何んだか知れないがぼんやりした希望だ。何處でもいゝ光線のあるところだ。空気が自由とあるところだ。友達心のやうな安心した氣持ちで星の眺められるところだ。此の森は『生』で彼を囚へて居る。闇黒で絡むで居る。いくらあがいても足を粘泥に捕へられねばくした深い溝に落ちこむばかりだ。その陥ち込むとす黒い粘泥の溝からは黒血のやうな腥い水が悪臭で鼻をつく。それがよくよく泥から湧くばかりでは無く蔦蘿からもぼた／＼濡れる。悪獸が彼の部下をおびやかす。怪蛇が現れてのたうちまはつて追ひちらかす。説明し難い恐怖心が漲つて長い長い部下の列が亂れ

て互に殺しあふ。遠征隊がぼんやり白痴になつてしまつた。彼は隊伍をとどめて、その長蛇の様な遠征隊を檢閲してまはらうとまづ兵站部を見ると一人の男はパンを投げ出してその代りに靴のなかに一生懸命に毒薬をつめ込んで居る。また一人の男は彈藥箱のなかに芥や腐つたきたない物などを積みあげて居る。彼は鬼のやうに荒れ狂つて兵站部を怒鳴りつけるとみんな暗いぼんやりした顔をして荷物を捨てながら逃げてしまふ。かと思ふとまたある時は全部隊が不思議な疫病に襲はれ、兵卒の身體がみる／＼變挺な徴候をしめし、化物の様になつてしまふ。彼は氣狂の様になつて何か疑はしいけれど手あたりまかせの薬を吞ませやうとするが、どの兵卒もそしを押しつけてしまふ。かと思ふと突然に立つて居る地から何千萬と云ふ薄つべらな毒毒しい白い蛇の群が湧き出て、それが吸ひつく度に黒赤い色に變化する……。

かと思ふと懸て遙かの方で樹木の列をとほして光が輝いた。彼の身内には一大希望が湧躍した。見る見るその光りは赤くなつた。ゆら／＼と紅蓮の焰にかはり俄然として蒸し熱い風が來ると樹木がメリ／＼と燃えあがる響き、仆れて枝が鳴る音、焰の尖塔、焰の旗、そしてその焰の舞ひ狂ふ色が次第々々に渦巻いて天に沖する。すると眞下の黒い森の繁茂したなかから何千何千の黒い獸が驚走する。天空一面蛾や小鳥やが逃げまはつて郡集する。彼はすぐと森がすつか

り火事になつたなと意識に浮かべる……。

その大森林の大紅蓮が何時しか最高潮點である。それと同時に腰部や背部やが熱い熱い燃えつくやうな焦げる感じがして、彼は悶掻きまはり、叫び聲をあげ、暗い黒い巨きなものゝなかに逃げやうとする。蔦羅や垂れた枝やが五體に纏ひついて動けない。するうちばつと焰が燃えうつる。まるでクリスマス木に火が灯つた時のやうに明るく閃く。ふと眼がさめると全身熱汗をあびて苦しむで居るのあつた。

彼はかう云ふ熱病から快復すると、すぐとまた起きあがつて實際夢に見た様な森のなかを一部隊を率ゐて突進するのであつた。阿弗利加中部の孤島の様な森林は濕氣を帯びて水ぼつた。そして夢と同じ様な焦燥した心持ちで混雑と目的顛倒とに迷宮の奥にあるやうな思ひで獅子奮迅をするのであつた。

すつかり覺醒して居る時、オスワルドは全然悪夢を放逐して健全な判斷力に歸るのであつた。そして自分が病氣のために意氣沮喪してこんな夢を見る様になつたかと冷静に觀察し、その時には此の悪夢と眼前の現實との間には何の類似も平行も共通も無かつた。けれども何だか知れない暗憊たるものが儘に現實にも影を翳して居る。無論その雲翳は時には知覺し難いほど微か

になることはあつたが、常に綿々として有ることはあつた。

・ ・ ・ ・ ・

オスワルドがふらりと食事をやりに這りこんだプランテン俱樂部と云ふのは、世界のあらゆる方面から集まつた、探検家とか、旅行家とか、殖民地の官吏とか、聖ミカエル勳章を持つたK.D.N.G.連乃至はC.N.G.連なんて云ふ面々の集まるところで、また大にこのことを誇りとして居る俱樂部である。此の俱樂部では帝國主義的思想を大に談笑交換することになつて居り、ほんの倫敦近郊在住の少数會員を除外として、大抵はたゞ世界の隅々から歸つて來るのであるから、お互の間には顔馴染みでない。時たま遊獵談なども持ちあがることもあるがそれは極めて稀だ。耻しげな眞黒こげな顔をした人間達が三年振か四年振かで深ひ込んで食事をやつて又別れて行く。或る時印度で日射病にとつつかれた一會員が宗教狂に變つて、二階へあがる階級の三段目のところから、丁度その時電報を讀んで居る三人ばかりの會員を眼下に見くだしながら、見神談の大演説をやりだしたこともあつた。此の宗教狂を取り除くのは随分と骨の折れる厄介だつた。此の俱樂部の室内の壁には一面に赤紙が刷つてあつて、白ペンキと對照

をなし、そこへ黄色がかつた遠い世界の隅々までの地圖がのべつに貼りつけてあるし、室の中央部には地球儀や天體儀やが据ゑつけてあつて、會員たるものは、何時でもそれをぐる／＼まはして、以つて茫々無限の宇宙における彼等の地位を大觀し得るやうになつて居る。だが此の俱樂部の最も誇りとするのは之れではなくて、豊富な人種學的及び野獵的(猛獸狩)紀念物の彙集である。雑多な種類の槍とか、屠獸用の刃とか、腹部を刺る道具とか、吹矢、弩、石投げ機、火繩鐵砲などといろんなものが陳列してあつて、すこし手器用な會員はすぐそれをとつて使用を會得することが出来る。尙ほもひとつ此の俱樂部の自慢は珍獸の頭が集めてあることだ。到るところの壁や柱やから突出して居る飾りは、野牛、羚羊、野猪などの頭から上で、之れ等は頗る會員達の情調に叶ひどんなに隅つこに縮こまつて居る人の眼をも悦ばせる。食堂に行つて見ると、どの食卓の上にも河馬とか、犀とか、虎とか、獅子とかの怖しい頭が硝子の眼玉を輝かせて、その生産地らしくしつらつてある盆景を見くだして居る。かう云ふ怪物の眼下に、時々帝國建設者連が時々々々文明を訪れては、きちんと叮嚀に夜會服を着て席をとる。流石に猛獸との對照の徳で小柄な青白いやき男に見えるのが殊勝だ。

此のブランテン俱樂部に獨り淋しく食事をするつもりではいつて來たところ、食堂のなかには、大藏省勤めのスリングスビー・ダルトンと云ふ顔のまんなかに鼻の形のもつともない小柄の倫敦子が麋鹿の頭の下に厚かましい表情をして陣取つて居る。オスワルドは此の男を見ると嫌な奴が來て居るなと昔の記憶を思ひ出したのであるが、それでも知つた顔を見つけ出したのが何だか喜しかつた。しかたが無い同じ食卓についた以上は嫌な男を出来るだけ面白い對手にするだけだ。

オスワルドは食物と酒とを考へて擇むだ。赤葡萄酒は醫者から禁せられて居る。だが茲の給仕にモーゼル河畔で醸造されたと云ふ白葡萄酒を、屹度衛生的だからと確信をもつてすゝめられたまま、五臓に心地よく浸み込ませてしまつた。それからまたスリングスビー・ダルトンが問ひたづねるまゝに自分の身の上ばなしをしてしまつた。自分は今ウガンダから止む得ず歸らねばならぬやうなつたのでその理由をのべ、お見かけの通りの氣のさばけた人間だからどうぞ以後よろしくとも云ひ、ウガンダを捨て歸るのは残念であつたが、しかし懐しい祖國を再び見たのはうれしい。何しろ此處は一切の活動の中心だ。これから一働きしやうと思ふと云ふと――。

『政治の方面にでもですか』とスリングスビー・ダルトンが問ふた。『丁度いゝところすなわ。』

今二三票欲しい處だつて大に聲援を仰つて居る候補者がひとりありますよ。』

政治活動——それもいゝかも知れぬ。だが政治社會に乗り出すにしても、とつつきが中々面倒だ。『政治はおそろしく議論ばかりがやかましくて、一向に實行が手ぬるいですなあ。望むで叶つた事ありませんね。』

此の云ひかたは餘程控え目にした穩便なところである。實際は——僕は英國の覺醒を信じて居た。だが惰眠をむさぼりながら議論して居るんだ——と怒鳴つても決して云ひ過ぎではない。

オスワルドの顔には新帝國主義に對する反感がざらりと輝いて居る。

『ですが。どうです』とスリングスビー・ダルトンは反抗するやうな口調で『チャンパレンの大演説を御読みでしたか。素晴らしいもんぢやありませんか。』

『え。読みましたが』とオスワルドは澁い顔。

茲で此の兩紳士は對抗の初期の状態になつたのである。だがまだまだ火蓋はきらない。スリングスビー・ダルトンは聞いたまゝで黙つて居る。オスワルドは愈々端緒を得たので大に胸中の鬱を散せやうとして居る處である。

オスワルドは、英國はまだ一向改良の道にのぼつて居ないと不平を云つた。軍隊は無能を暴

露したではないか。殖民地の戦争さへろくに出来ない。こんなことでどうなる？

『さうですとも』とスリングスビー・ダルトン『しかしあなたはまさか徴兵制度論者では御座いますまいね。』

オスワルドは徴兵制度などのことはちつとも考へては居ない。主眼とするところは、Technica reorganization! 學術科だ。もつと科學的にし、もつと設備を充分にすることだ。だが彼が眼のあたり見た軍隊の變化とし云へば、たゞ帽子が野蠻然とした變挺なものになつただけである。(その頃はあの嫌なプロリツク式軍帽の全盛時代であつた) 經濟生活上の社會革命またまさに火の手を擧げんとして居る。失職者の行列が毎冬次第に長くなりつゝある。(海關税をかけるといゝ)とダルトンは囁やいた。『人心革命が必要だ』とオスワルドが叫んだ。それから問題は教育にうつる——。

『教育が』とオスワルド『全活動の最も根本的なものだ。』

『いや必ずしも教育ばかりでは改造が出来ない』とスリングスビー・ダルトン。

『全的改造の根本的問題としての教育を』とオスワルドはダルトンの言葉など耳にもはいらす。『一班の人間は更に念頭に置いて居ない。英國人は夢にも知らないのだ——英杜戦争はおそろ

しく英國の教育が退嬰して居ることを示したではないか。——吾々の高等教育も、科學教育も一班の學術教育も、特にわが官吏の教育及び普通教育が如何にも時代遅れで居るではないか。「見たまへ。僕等は世界大の大帝國を持ちながら、心の想像は一選舉區よりもまだ狭少ではないか」——だが之れを革命して行くのは頗るの難事業である。あまりに難事業過ぎる。オスワルドは此の難關に面して愈々躍氣に愈々問罪的になる。彼の生きた方の半顔が憤罵に輝いた。それに面してはバルフォア最負のもの頗る不快に面喰はざるを得ない。親愛なる老英國教會は此の新教育を支配し把持して行く力が無い。けれども親愛なる老英國教會をして是が非でも教育權を把持させて置かねばならぬ。だからして英國の政略家や策士連やは、しばらくの間、仰山らしい議論でおだてゝおいて、何時しかに此の教育革命の全問題の責任と解決とを低級な教會學校と Passive Resistance Movement とに負はせてしまつた。(Passive Resistance Movement とは課税金の不當に使用さるゝと信する時、納附を拒絶し甘んじて刑罰を受けることを團體的にやつた運動を云ふ)しかも教會學校と云ひ Passive Resistance Movement と云ひ、兩者とも揃ひも揃つて、悦んで現實を回避してしまふ方だ。オスワルドは Passive Resistance Movement に對しても教會教育に對すると同様大反感を持つて居る。

此の長廣舌を吐き終つたズリングスビー・ダルトンは桃むで見える氣持ちになつて、『僕は教育問題をさうまで根本的に観ることの可否は判断が付きませんがね。それは別問題としてもあのチャンバアレン氏の大演説の雄大さはどうです……』

茲で俗に所謂油が煙におちた。

一千九百三年の十月は英國社會にとつては熱騰勃沸の時である。此の月バアミンガムから騒風突起した。怪腕の大政治家ジョセフ・チャンバアレンが保護貿易論の巨策を政治の海に投げこむと、俄然怒濤天を捲いて、大帝國の極端點までも波瀾重疊し、その擾亂は止まるところを知らない。まことに此の政策は課税を納めることをやめてその代りに外國人に税を課するの政策である。新帝國主義の夢は茲に花を開いたわけだ。到るところの食堂で、列車のなかで、喫煙室のなかで、人々が會へば必ず此の談に耽るのであつた。もとよりオスワルドにとつては此の新帝國主義が單にバアミンガムの利益のみの爲めに世界大の搔搦をやるとは、おおよそ考へても考へられない程な殘忍中の殘忍な海賊行爲を臆面もなくしてかしたものだ。サイデンハム家の血液はもとから商賈人の血液は流れては居ない。がズリングスビー・ダルトンは明かに此の新政策運動をやんやと擔いで浮かれて居る一人、見るからにその顔が瘡るさうで憑かれて居る。

る様だ。小生意氣な横柄な面をすこしかしげて、議論に楯つかうと聲を次第に高めて居る態つたらぬ。オスワルドの心頭倏ち怒りの焦點を結び、舌端鋭くひり／＼刺すやうなことを云ひ出した。對手の議論を一舉に埋り去るべく極めて露骨な齒に衣させぬ事を並べる。彼は外面に表はれた事實からづか／＼と判斷を下したが、如何にもそれは的中した。大當りだつた。曰く『明盲者の政策だ』對手はぎくつとして眼をまるくした。今は明かに英國は能力のない見劣りのする状態に居るのであつて、教育にも貿易にも軍事にも非常に綿密な着實な改革意見を樹てねばならぬ時だ。それを一つ一つ別扶したあとで、一段大きな鳴りひびく様な聲を張りあげて、『またあの煽動政治家がいつもの萬能薬をつかひだしたんだ』と云ふと、

スリングスビー・ダルトンは佛然として『あなた。そりや。あんまりない云ひかたぢやありませんか。チャンバアレン氏を煽動政治家とは。』

『だが今の場合を考へて見たまへ』とオスワルド『今の場合を。すべての方面に健全な調和的な建設的事業が必要である時に、此の空騒ぎな、安つばい下劣な思想を煽りたて、不正直極まる、まるで興業師の仕出かす様な真似をする。……惡むべきピラ貼り政治家だ。』

『またあの煽動政治家がいつもの萬能薬をつかひだしたんだ』と云ふと、

スリングスビー・ダルトンも打つて返した。『ですがチャンバアレン氏の新政策ほど健全な建設的事業がほかにありますか。現下の國家經濟上最大の急務です。』

オスワルドはそんなことに耳を籍さない。關稅政策は山師の數醫が盛つた藥だ。『關稅政策！考へてと見たまへ。地球の表面いたるところに領土をちらかして居る此の大帝國がそんなことをする。各方面の領土がそれ／＼特種な必要を持つてと云ふことだけ考へてもわかるぢやないか。關稅政策の矛盾だらけは三歳兒でもわかる。それなのに君たちはチャンバアレンの演説に魅せられて、關稅政策さへ行へば、それが見る見る地理學上の大奇蹟を演じだし、地球全面に散在した領土がまるで一大陸のやうに寄り集まつて、ちやんと外國人に對して塙壁が築けると思つて居る。これほど愚劣なことは無いぢやないか。世界大の帝國の扉が閉められるとも思つて居るのか。世界に散らばつた英國領土を一つにあつめて海賊團をつくらうと考へて居んだ。國家的破滅には是れほど一直線の早道は無いぞ。』

『國家の危機をすくうにはこれほど一直線の早道は無い』とスリングスビー・ダルトンは敵の言葉尻をうまく操つた。

がオスワルドは介意はず突貫する。『僕等の帝國の様に世界に散らばつた帝國が、そんな我利我利なことをして他を排斥するとなれば、僕等の同胞は太陽のもと敵を受けざるなしと云ふ有

様ではないか」と云つて罵聲一番して「到底、駄目だ。此の汚らしい不正義を掃せねばならぬ。人道蹂躪を防止せねばならぬ。あゝ。僕は此の新帝國主義を蛇蝎視する。蛇蝎視するばかりか怖しうてならぬ。僕はそのために夜も寝られない。僕を憐れなす。何處までも憐れなす……」

スリングスビー・ダルトンは心のうちで、同じ憐れ位ならば現在の自由貿易がどんなに國民の血をしぼるやうに苦しめて居るか、それを憐れむだらよさうなものと思つた。

「僕は何も帝國の現状を無視して僕の議論をたてゝ居るわけでは無い」とオスワルド「僕は此の眼で見つめて来たんだ——」

スリングスビー・ダルトンも亦自分の眼で見張つて来たのだと云つて、對手の云ふことを無視してしまつた。

だがオスワルドはもう此の時は「君。話して聞かさうか」と云ふ見幕で一段上から構えてしまつて居る。

彼は旺に説いて聞かせた。曰く新帝國主義は獨逸から輸入されたものだ。獨逸の世界政策の教授達が發明したもので、それをミルネルなんて云ふ先生が牛津大學のバリオル講座で受賣り

したに過ぎない。そこだ。獨逸の國狀は英國のとは全然異つて居ることを考へねばならぬ。獨逸には地理的統一がある。丁度この拳固のやうに寄りかたまつて居るから、自然の必要から統一が必要だ。ほんとに獨逸は拳固だ。地勢上の拳固である。英國は掌を開いたやうな帝國だ。だから英國は手を開いて世界を迎えねばならぬ。われ／＼は開放の民族だ——開放以外何物をも無いのだ。僕等の祖先は常に自由解放を生命として来た。僕等の屬する民屬は歴史上最も公明正大な抱負を發揮して来た民族である。だが近頃になつて此の自由解放と云ふ精神を忘れてしまつた様だ。民族の使命を忽緒にして居るんだ。われ／＼英國人は所有者の様な顔をして威強つて居るが、實は所有者ではなくて、ほんの信託されたに過ぎないのだ。人類を信託されて居るんだ。それなのに傲慢になつて圖々しくなつた。世界の半分をわがものにして、他人を關稅でもつて門外に閉め出さうとして居る——茲でオスワルドはすつかり自制心を失つて、

「『下劣な商人の慾深根性だ』と叫むだ。その貪慾な根性を今行はむとしつつあるでは無いか。——他人の足を踏み躪つても掴まう掴まうで懸命になりながら、教育に失敗し、軍備に失敗して居る。さうだ。掴まう掴まうの餓鬼になつたんだ。餓鬼！ いゝ言葉だ。彼は餓鬼と云ふ言葉を何遍つかつたかわからない。餓鬼の夢想だ『軍備もなくして世界を挑まうとし、教育も

なくて世界を治めやうとして居る。』獨逸にはすくなくとも理窟がある。あゝするのも無理ないと思はれるところがある。彼等獨逸人は愨張ると同時に軍備も整えて居る。教育にも努力して居る。何等かの訓練がある。だがわれわれ英國人とては他人の足を踏み躪りながら、それで居て八方に伸よくして行かうとして居るんだ……。

こん寒風にオスワルドは——麋鹿の頭のもとで——滔々とのべたてる。その間スリングスピイ・ダルトンは時々反對の言葉を刺し込むで見える。だがスリングスピイ・ダルトンの心持ちでは、もはや此の論敵を押しひしぐのは言葉では駄目だ。食刀と硝子杯とをぶつけてやるのが一番の早道だと度胸をきめながらも、わづかにそれをさし控えて、わな／＼の二本指をオスワルドの鼻さきにつきつけながら、

『あなたは萬能薬だつて笑ふけれども、よし、關稅政策が一つの萬能薬なら、あなたの教育はなんだ。教育、教育つて、此の方が餘計に萬能薬ぢやないか。』

丁度此の時彼の助太刀でもやりさうにワルサル氏とビンナの牧師とが、その大入道然とした黒い河馬の頸の下の食卓から、こつちの方にやつて來た。ワルサル氏と云ふのは博物學者で、昔オスワルドが自然科学の研究熱に燃えたつた頃會つたことのある人だ。ビンナの牧師君も

また嘗つて阿弗利加のタンガニカで傳道をやつたことがあつて、オスワルドの評判は風に聞き知つて居る。で此の兩人はオスワルドに敬意を表しに來たのであるが、スリングスピイ・ダルトの方が逸早く助太刀を乞ふてしまつた。

『今、太に政治論で熱戦をやつて居るところですよ』とスリングスピイ・ダルトンはオスワルドがのぼせあがつて居る有様を指した。

『政治問題となるとどんな人でも熱し易いと思えますね』と牧師『何しろ愛蘭問題などでも熱するので餘惡になりますんですからね。』

『オスワルドさんの萬能薬ですが、世界を教育で救はうつて云ふんです。そして經濟上の改革などはどうでもいと仰るんですから、やりきれませんや。』

牧師は兩眼を丸く見張つてオスワルドの方に向いたまゝ、口あんぐり、丁度満月の様な表情だ……。

それからスリングスピイ・ダルトンの先頭でもつてみんなが會計臺の前を通つて喫煙室の方に移り、そこでもつて教育問題に關する大議論を闘はした。並み居る聴衆は羚羊、野狼、角馬、犂牛、海獅子なんて云ふ面々だ。オスワルドは自分ながらこれ程立派に教育論上の大抱負が云

へるかといわれとわが雄辯を驚くほどにまくしたてた。まことに一個の示現にあつたやうなもの、彼は新たな自覺と勇氣とを明白に持つことが出来た。彼はあらゆるものをみんな無教育だと断言し、最後にあのチャンバレンこそは『真に教育の足らぬ男だ』と云ひ傲してしまふことに大成功を得た。

ワルサル氏は、狼狽して論断を下すことや、熱氣にほとばしるやうなことには、極めて念ひの反對者である。判事がものを考量する様な興味を持ち、ソクラテス辨證法式な考慮を娛む餘裕綽々家である。大型の艦甲の輪のついた眼鏡をひっかけ、灰色な毛もぢやらの頭をして、何だか鼻の様な感じのある紳士だ。頭を右に左にゆるやかに搖曳させながら、にこり〜笑ふ。そして何時でも言葉をのべる前に『あなたはさう云ふ様にお考へになるとすると……』とか『あなたは此の一點を見おとしていらつしやる』とか『それはそれとして信じて置くとしても、別にまた……』とか必ず前置きをする。それが大變しとやかな調子で、しかも注意を加へて一語々々油が塗つてあるやうに滑かにすべり出る……。

彼は嚴肅なる疑問でもつて、果して教育が何等かの効果を齎すものなるやいなや——教育のみならず如何なるものでも効果があるかどうかと云ふことに就いて疑ひをかけた。

その晩それから海獅子君その他並みいる面々の默想せるが如き偶蹄類達の御聞きに達したる喧々轟々の議論は、あまりに長びき、且つ熱し過ぎ且つまた頗る多岐にわたつた争議であつたものだから、おそらく餘つ程な眞面目臭つた讀者でない以上書いたつて讀んで呉れられまい。教育論上のあらゆる異端説がその晩に限つてのこゝへ飛び出して、オスワルドを憂目にあはせた。スリズスピイ・ダルトンは曰く『何よりも先づ人間を金持ちにせよ。すれば教育は自ら具はるべし』と。ワルサル氏は曰く、教育の力でしあげられ位な人間なら教育しなくつても何者かになるからさう教育々々と云ふ必要もなからうと。彼の説によると、知識の價値ある所以は、それをうるにあたつて苦む經驗があるからであつて、困難を通過しないものは何の價値もないとのことである。(誰か正氣の人は之れを眞實だと信するでせうか?) ワルサル氏に云はせると『私は科學そのものには何の價値も置きませぬ。たゞそれを研究する熱心家の熱心に價値を置くだけ』と云ふことになるのであつた。

『だが君達は御承知ですか』とオスワルドは恐しく沈靜な態度になつて『茲に英吉利帝國と云ふものがあります。そして此の帝國が今眞に危急存亡の秋にあるんです。もつとも必要として居るものがあるんです。』

(するとクリスグスビー・ダルトンの唇から押しつぶした様な私語が漏れた『その必要なものは金ぢやないか。』)

ワルサル氏また此の危急の必要に就いて思索を施した。われは餘りに此の帝國を計劃と意志とで左右することが出来る玩弄物の様に考へ込んで居るのではあるまいか。帝國は生長しつつある有機體だ。丁度人間の様なもので、別に考へなくとも成長して行く。それから成熟期にも達し、老衰もし、死亡もする。われが考へたつて別に此の帝國の運命が救へるものでもない。

(見向きもなれないで居たスリングスビー・ダルトンは愈々ワルサル氏とともに無視された。)
『獨逸は大に考へて居ますよ』とオスワルドが突きこむと、
『考へて失敗して居るんでせう』とワルサル……………。

ピンナアの牧師の虐めかたはワルサル氏のよりは更に穩私であつたが、熱したる論敵にとつては此の方がさらに酷く悚立させる。彼は教育の害を説き出した『教育あるプロレタリアト』は社會の害毒だ。しつかりした社會の體制をつくるには極少數だけの人が教育されて居ればよいのである。社會の平均はいつでも群衆を教育し過ぎるので破れる。『わたし達は心の正直な善

良な單純な勞働人を教育して不平滿々の月給取りにするなどはほんとに馬鹿げた事です』するとオスワルドが口末の泡を飛ばした。『いや。近代の人口を以つて成る都會の市民たるものは、必ずその屬する國家に就いて必ず何程かの見識を持つて居らねばならぬ筈だ。』

『それは教へるよりか、信じさせますんですな』と牧師、『知らせるよりは、信じさせるに限りませよ。極簡單な問答教訓位でね。』

牧師は露西亞を漫遊したことがある。そして露帝の戴冠式の大變に綺麗な儀式を見て來た。その盛大な式典は見物人の間にほんの偶然な殺傷事件があつたばかりはまことに滞りなく目度く運んだ。その頃の露西亞はまだ日露戦争の以前であつて、露國議會(一九〇六年に始)の開設はまだと云ふところである。此の善良なる牧師の言葉によると、露西亞はほんとうに讚美すべき國であつて、われは露西亞から學ばねばならぬことが澤山ある。露西亞こそは、心の寛い祝福されたマリアの國であるが、これに較べると英國は忙しがつてばかり居るマルタの國である。(マリアは聖母マール)世の中に露西亞の政治的共在性ほど浦山しいものは無い。『われは國のあの騒々しい選舉騒ぎのあとで、あの露西亞の安靜なところに行つて見ますと、わたしは屢々心のうちに問ひましたね。『われは露西亞人は慥に間違つて居るのでは無いか知ら

む。露西亞に來て見ると、何だか知らむ大きなものがある。何處までも大きくなつて止まないやうなものがある。何だか單純で朴素だ。ここには大きい服従もあるし、ほんとに元始的な満足もある。白衣の神父たる皇帝に對する深い深い信頼、宗教に對する深い深い信仰、茲にこそ眞實基督教精神が生きて居るのですよ。』

議論に夜が更けて十一時が鳴つた時、ワルサル氏が一つの逆説を持ち出した。『どうも今夜の教育論を總括する』と得意げに『自身の耳を引つばつて自分の身體を空に持ちあげやうとした男の話を思ひ出しますね。私等の國のやうなデモクラシーは、教育をしない以上自分等の國運を理解するやうな興味を持つ筈はなし、それかと云つて、自分等の國運に興味を持たない人間をどうして教育することが出来ませう。此の兩頭蛇の通れ路が無いぢやありませんか。』

『社會の體制は』とオスワルドは暫くの後、要所を引き掴むだかの様に『社會の體制は一つの心から成るものではない。澤山の人の心から成り立つて居る。だからある部分は智識があるし、或る部分は無。社會は常に新しい智識ある心を中心にして新陳代謝して居る——。』と云つたが、そこで何だか一寸拍子が抜けた。

『われ／＼は茲に斯うして居る』又しばらくたつてから頗る怒つた様な聲を出した。その聲で

牧師の口があんぐりした。『かうしてお互に生半可なことを云つて無駄口をたゞいて、何だかだと、國家に對するお互の責任を回避して居る間に時機は過ぎてしまふのだ。帝國の試さるべき危機が焦眉の急に迫つて居るのでは無いか。——』とまづ云つて突然に止めたが、

『いつたい。君達には判らないのかね』と再び始めた。『いつたい此の帝國がどうなると思ふ。何百萬、何千萬と云ふわが國民はまだなんの光明を見ないで居る。それに光明を興へる手段を君等は考へたことがあるかい。われ／＼は世界を指導する民族としての教育が無いために、掴み取りの射利的民族となつてもいゝと云ふのか。われ／＼は羅馬やカーセーデと何の擇ぶところない民族になつてもいゝのか。教育を忘れて、世界の領土や金錢やを掠奪するのか。掠奪か教育か？ 之れがあらゆる方面にむかつての帝國の運命の分れ路である。今僕は全英國が舉つて共鳴しつゝある。君等は理想が無いのか。理想がないのか。』

牧師は淋しげに頭をゆすつた。そして心のうちで此の人は氣狂になつて暴れて居るのではないか知らんと思つた。

『理想、理想つて。いつたい君の理想は何だね』とワルサルは嘲笑の聲を出した。『何百萬人の

大學教授をつくらふとでも幻影に描いて居るんだね。」

『まあ、どんづまりのところは』とスリングスビー・ダルトンは疲れた様なうめい聲を出して『みんなの考へたところがさう違ひさうも有りませんや。何をすることも金が先きだからなあ。まあお金を儲けて學校に寄附することだ。ところで關稅政策でもとらねば大きな金銭も出來ないし——。』

と云つたが、オスワルドはもう議論をうち切つてしまつた。

『僕はもう寝なきやならむ』と云つて懐中時計を出して見ながら『僕は十時に寝るやうに醫者から嚴命されてるんです……。』

そして特別姿のいゝ印度水牛の頸がぬつと慈愛ありさうに見くだして居る下で外套を着ながらオスワルドは『馬鹿どもが……』と小さい聲で云つた。それから夜の市街に出ると、月が冴えて居る。その月に向つてもなく、またそこにある英雄的精神の發揮損ひを記念する如きユーク侯の銅像に向つてもなく、それから云つてまたすぐ近くに居る辻待ちの取者に向つてもなく、云つた。『あゝ。これから帝國はどうなつて行くだらう』——『どうなつて行くだらう。知識ある連中が教育に就いてあんな意見しか持つて居ないとすれば？』

さて茲らで話をジャンとビイターとに歸するのが最好の時機だ。何しろ此の小説はジャンとビイターとが主題であつて、此の二人物を一刻も忘れてはならない筈だつたのだ。要するに彼等二人の小供の唯一の保護者をはじめ彼等の面倒を見る様になつた時、どんな心的状態で居たか、それを語つて置きたかつたまでであつた。オスワルドがクライマックス俱樂部で氣持のいゝ部屋に歸りつくがはやいか、もうその十分前からシカモア氏から電話が掛かつて居て、すぐと小供達に對する責任感を思ひ出させられてしまつた。俱樂部の小僧がすぐと受話機をオスワルド・サイデンハムの寢室の方にまはした。

その頃はまだ電話が完全と云ふ域に達するには頗る程遠かつた。その後十年間まだ電話は一般の用には役立たなかつたと云つてもよからう。……シカモア氏が話しかけた聲が蚊の羽音の様に細くなつて居る。

『モシ、モシ。サイデンハムさんですか。シカモアが話中です。』

『わたしに話中？』とオスワルド『今まで話しかけられた覚えはないですが……。』

「あなたは何方ですか。私はサイデンハム様に話しかけて居るんで。私シカモアです。」

「私サイデンハムです。貴方は何方です。私は今まで話をした覚えはありません。人違ひでせう。私は今受話機を受けとつたばかりです。」

「あなたの状師のシカモアです。シーカーモアです。」

「オヤー。さうでしたか。シカモアさん。御機嫌如何で御座いますか。僕サイデンハムです。子供達はどうして居ります。」

「御機嫌よう。サイデンハムさん。」

「ありがたう。あんた如何です。」

「今日私はシャロット女史に會ひましたんですがね。あの大変なこと。あなたもう御存じですか……………」

「ウオツ…………ウオツ…………ブニ、ニ、ニ、ヂヂヂ…………沈黙。」

暫く混線して居るうちに漸くシカモア氏との連絡を部分的に取りかへした。部分的にとは即ち前よりは先方の聲がすつと細く遠くしか聞こえなくなつてしまつたからである。「現在の状態がどうなつて居るか、もう御存じですか。」

「何も存じません」とオスワルド「何。火事？」

「私の聲がよく聞こえますか。あなたの聲は聞こえない位ですよ。」

交換手に向つて一喝して漸くのことですこしく通話を良好な状態にすることが出来た。

「何かあなたは火事のことをお仰いましたですね。」とシカモア、

「いゝえ。何んにも。さう聞こえましたのですが……………あなたは小供の事に就いて何か仰いましたんですね。」

「さうです。さうです。サイデンハムさん。事情が甚だ錯雜して來ましたんですよ。あなたが教育上の全責任を御持ちになることを希望いたします。只今の處小供達は教育を受けて居ません。奪ひあひの喧嘩の種になつて居るのです。」

「今の處は誰が面倒を見て居ますんですか。」

「誰も見ては居ません。ただスタブランド家の御嬢さん達とシャロット女史との間に戦ひがありましたんですよ…………ターダーカーイが。私はあなたの御考へを承りたいのです……………さうです。さうです……………どうぞお考へ下さい。両方とも伶俐な小供達ですからね。今茲で適當な教育を怠るのは非常に不爲なことになります……………事情大變に切迫して居るんですよ。今日シャロット、

ト女史に會つたところですよ。お存じですね。女史は小供達を攫つたのです。』

「攫つた？」

此の時突差に娘々した涼しい中心から幸福さうな聲が、ぼつんと通話を遮断してしまつた。

「もう二分間経ちました」と云つたのだつた。

帝國建設家らしい力強い聲がオスワルドの唇から突き出た。そして何だか遮二無二にその涼しい娘々した聲を押しつけて、シカモア氏との通話を恢復した。

だが通話が寸断々に切れた。混線だ。しばらくの間は、何か知れない女の聲が何か知れない對手にむかつて頻りと何か知れないがデョーシと云ふ第三者の振舞に就いて不平をならべたて、「腕」が無いのとか何とかいへ、聞こえて来たのであつたが、結局シカモアはオスワルドに二人の小供の事は非常に急を要すると云ふことを傳へ得た。一刻の猶豫も無く即座に世話をみてやらねばならぬ。二人とも全く願ふものが無い状態である上に、殊に娘の子の方は病氣だ。「一刻も早く御面談いたしたいのですが」とシカモアが云つた。

「明朝八時に御出かけを願つて、朝食を御一所にいたしませうか。」と熱帯から来た男は云つた。

「九時半に願ひませう」と倫敦ん子は云つた。それで通話はお終ひだ。

通話が終つても暫くの間オスワルドの受話機では電鈴が鳴り續いて、時々神經的に急激になつた。でそれにオスワルドが答へると、電話姫から「何番？」と来た。「君が鳴らしたんぢやないかッ」とオスワルド。「いゝえ。いゝえ……。」と電話姫。

それからオスワルドは寢臺の縁に腰をかけながら、「いやしくも帝國が」と私語いた「電話さへ碌にかゝらない様な不備なことでは……。」

「教育だ……。」

彼はブランタン俱樂部でやつた一番あとの演説めいた怒鳴聲を思ひ出した。随分亂暴に云つてやつた。彼等はそれを何う思つて居るだらう。はて何う云ふ言葉で云つたか知らむ。何でも生半可が無駄話に耽つて居るんだと云つた様だつた。時は過ぎ去つてしまつたぞと云つてやつた様だつた。さうだ過ぎ去つて居る。彼等は滅んで新しい少國民が生長しつゝある。

はて、それを云つたか知らむ。新しい少國民の勃興、それが最も主眼とするところだつたんだ。新時代の新國民は旺に生長しつゝあるのに、それを此の南阿戰爭ですつかり弱點を暴露した愚圖々々の現國民より向上させやうとは思つて居ないのだ。もつと睿智のあるもつと能率のある、もつと眼界の高大な國民に教育せねばならぬとは思つても居ないのだ。それを云へばよ

かつたに。そこが最も云ふべきところだつたのに……。

長い間は寢臺に腰かけたまま、ぼんやりして、着物を脱ぎをはるのも懶い程疲れて動かすに居た。がとう／＼横になつた。けれど寝つかれない。ランタン俱樂部でやつた怒號が妙に氣になつて、堪へがたいほど心を攪亂してしまつたのに我れながら驚いた。彼は此の舊式な國家のことは成るだけ思ふまいと思ふまいと頻りと心に念じて見たが、あまりに疲勞し、あまりに昂奮し過ぎ、何遍となく無駄な寝がへりをうつて見るばかり、心が病的に牙えて來た。彼が久し振りで敵國に歸つた悪い悪いこんぐらがつた印象がどう振り落さうとしても膠着してしまつて、愈々無益な無進歩な心の滯滞を齎すばかりであつた。

しかしながら寝つかれない夜をかう云ふ想ひになやまされて居る英國の識者はまだ此の外にどの位あるか數へきれない程澤山にあつたのである。南阿戰爭から歐洲大戦亂にいたるまでの十二年間は覺醒せる英國の無数の識者が幾夜かまんぢりともしないで、國家の危険、國家の野心、國家の見當違ひの矛盾に就いて惱まされて來たのである。「覺醒せよ、英國」の絶叫はよし

んば晝間の英國に大なる變革の收穫を取るやうに蔭られなかつたにしても、すくなくとも夜の世界において或る程度までの大きな幽靈をつくりだして人心を襲はしめたのであつた。彼は何編ともなく幻影のワルサルを向ふにまはして論駁を加へた。時にははつきり醒めた意識でもつて敵に論及するがまた時には論戦とともにまどろむみながらぼんやり時形な筋道のたゞぬ觀念に落ち込むだりした。ワルサルの方が正しいだらうか。民族の本質や自然やを改善すると云ふことは眞實不可能であらうか。われ／＼英國人は永久に平和において鋭く、戦時において間違ひだらけをする民族として止まらねばならぬ運命だらうか。英國の成功は偶然であつて、失敗が本質的なのだらうか。われ／＼の血には魯鈍が流れて居るだらうか。しかし偉大なる努力をすれば何物かを贏ち得るかも知れない。政治的生活を改造する大努力、國民教育を改善する大努力、新聞を眞實の意味の輿論と批評との機關にする大努力、……それを振り翳すとワルサルがまたもや嘲るやうに「自分の耳を引つぱつて自分の身體を空に持ちあげやうとした話を思ひ出しますね。私等の國のやうなデモクラシーは教育をしない以上自分等の國運を理解するやうな興味を持つ筈はなし、それかと云つて、自分等の國運に興味を持たない人間をどうして教育することが出來ませう」と云ふ聲がきこえる。

オスワルドは呻いてまた寝がへりをうつた。
 思ひまどうことが、知覺し得ざる程な度合ひで次第に夢に變つて行く、その夢がまた何時しか淺むで醒めた氣持ちになる。何時でもワルサルと牧師とがついて居て教育上や國家的努力やの論争をやつて居る様だ。それが時としては憎としたたの芬圍氣だけを感するのであるが、時とするとはつきりと現實的になり、そして現はれて来るのは阿弗利加のあの夜の襲はれの黒い暗い森である。絶えず問擻いて、絶えず何時か出られる林間路は無いかと見まはす。何處でもいゝ。暖い晝の光のあるところで、森の外に出さへすればいゝのだ。それなのにワルサルが巨大な森の鼻になつて、大きな眼鏡をかけながら、何つちに向つても道の前にはだかつて、大きな羽蓋て手をたゞくやうにはたり〜叩いて出道は無いのだぞと知らせる。無い。此の森は生た。此の森は何時だつて人生なんだ。これより以外に生は無いんだ。けれども結局此の森はさう悪い森でもないよ』まだ他の種々の姿が行つたり來たりする。一人の巨きな圖體の僧正らしい牧師が安樂椅子に座つて居て、有望な林間路を塞いでしまつて居る。そして宣言して居る。書籍を教へることはただ下級社會に不平と反抗心を抱かせるだけだと。それから今度は阿呆面をして満足ののでぶ〜肥つた男がまんまるい葉巻を燻しながら一頭馬車を驅けさせては何遍

となく進行軍の行手を横ぎつて邪魔をする。彼は何んにも云はない。ただ馬車だけで無限に邪魔をする。何處からともなく自動車ややつて來た。此の自動車は森を通れ出るには屈強の具だが、ただ壞れて動かない。オスワルドはその傍らに白胴衣を着た老紳士が嘲笑つて居るにもかかはらず、それを修繕しようと思ふ。此の時突然に森が子供の群で一つばいになつてしまつた。何千萬人が無數に子供が群集して居るのだが、それが何んだかたつた二人の子供の様に感じた。此の時オスワルドは蜿々長蛇の遠征軍を率ゐて居るのでは無くて、孤りで黒い雑木の茂つて居るなかに二人の子供の顔を見て居る。二人の子供は青白い顔をして發育が不完全で、光線と空氣とが無いために今にも死にさうだ。誰も看護してやるものが無い。そのひとりとは病氣で大へん重い。此の森から出られる道が見つかからない以上彼等の生命は覺束ない。二人ともドライの子供で、彼の被保護者だ。だがどうして此の二人を保護することが出来るだらうか……………。

するうち彼は前方に大きな火焰が燃えあがつたのを認めた。それは最初は眞晝の光線だと思つてうれしがつたのに火事になつてしまつたのだ……………。

『黒珈琲!』とオスワルドは何度か眼がはつきりと醒めた折りの悪夢のきれめで斯う叫むだ。

『煙草、談話、あまり興奮し過ぎたんだ。……僕は攝生せねばならなかつたんだ……僕は自分

の身體が衰弱しきつて居ることをわすれて居た……………。

………僕の心から斯ん麼妄想を取り拂はねばならぬ。明日の朝はあの懐しいシカモア氏に會ふ時には、よくスタブランドの坊やのビイターやジャンのことを聞いて見やう。そしてすつかりその責任を持つてやらう。僕は長い間あの小供達のことを忘れて居た。

まだビイターはドリーのことを覚えて暮つて居るか知らむ……………。

『しかしともかくも』と彼はまた寝がへりを打ちながら『これだけは眞實だ。教育が現代で最も忽緒にされて居る重大な義務だ。根本的なものだ。それに僕は何をして居る。英國だ——英國はもう信頼出来ない。——英國にあの子の教育を委して置いては駄目だ。僕がどうしても見てやらねばならぬ。僕が……………僕が……………やらう……………。』

シャロットの伯母のところにも行つて一日二日逗留しよう。明日の朝電話をかけてすぐに行かう。』

チャストランドの女史の家で心靜かに物事を謙慮に觀て居るカツセル爺やの生活は、オスワ

ルドの來ることによつて頗る活躍して來た。

カツセル爺やの御主人シャロット女史の心のなかに起つた嚴肅な只事ならぬ動搖と焦燥と口惜しさとの波立ちちは、シカモア氏が歸つたすぐ後から俄かに眼だつて騒がしく表面に彰はれた。それが微細なことまでひとつ／＼判然と爺やの眼にうつる。さつき出て行つた紳士が何を云つたか爲たか知らないがよつほど酷く奥様に激動を與へたものに相違ない。あの紳士が家を出るがはやいシャロット女史は寢椅子を蹴つて起き卓を離れ、強壯劑をひつくりかへし、まだ美裝のガウンと帽子を冠つたまゝ、矢庭に旅行鞆に伊太利行きいろ／＼なものを詰め込みだした。そのあはただしさつたら無い。女中のアニンが頗る機みだした。それから『お馬鹿』と呼び捨てにされて居る他のひとりの下女は叱られどほしで眼が涙の泉になつてしまつた。旅行鞆や食料鞆やが忙がはしく行つたり來たり動き出す。呼鈴がけたましく鳴る。小間々々した命令が叫ばれたり、取り消されたりする。午後の遊山の爲めに二度までも、馬車を呼びにやられ、二度ともまた空しく歸つてしまつた。それから漸くのこと、シャロット女史のレースの化粧着が、お茶の時の食事をやるにもつと便利な衣服に替つて現れ出でたる時のもの凄さ、まさに腕力的威壓を漲らせて居る。丁度その時アニンが女史の旅假髪と帽子が歪むで居るのを

見て、なほしてあげやうかと思つたのだつたけれど、あまりに女史の見慕が怖しさに控へてしまつた。で女史のプロンドの捲髪が無恰好に片つ方に眼の上に垂れかゝつた姿は、頗るカッセル爺やを驚かし且つ面白がらせてしまつた。女史は五時半になるまでもお茶をとらない程に忙しがつたのであつた。

女史はその堅い感じのする青い眼で空の一方を瞰みつけながら叫むだ。「何の、何、茲に止まつて愚弄されて堪るものか。」

「何だか調子が變ぢやぞ」とカッセル爺やは上り口のところで小さい聲で云つた。「どうも變ぢやな。奥さんいつたはどうしたつてんだらう。」

「カッセル爺や！」と女史はお茶の道具をしまひこみながら、霹靂一聲を發した。

「は、奥様。」

「すぐとグライムスさんに電話をかけて、いつもの様に伊太利・バラントア行きの切符を私とアニンとの二人分とつて置くやうに頼んでお呉れ。明日の朝はやく出發の分を。」

爺やが女史にもうグライムス氏は事務所を退いて家に歸つて居る時刻だと告げるのは怖しくもあり面白いことでもあつた。

「では明日の朝第一番に電話をかけてお呉れ。朝私はチャリング・クロスに十一時四十七分の發車に間に合はねばならぬ。汽車のなかでお午食をする事になるのだから、お辨當にはチキンの羽肉に佛蘭西赤葡萄酒がすこし、サンドウキツチに海老のベエスト、それから乾葡萄酒がすこし、ほんの手輕でいゝよ。爺や、お前はチャリング・クロスまで荷物を手傳つてお呉れ……。」

女史が旅行出發の意志は之れで判つた。

「何だか夜逃げ見たいぢやぞ」とカッセル爺やは心のうち「此のめかしや婆さん。何を困つてるんだらう……。」

その次の朝になつて爺やは稍はつきりと心得た。

シャロット老女史御出發の準備は悉く整つて停車場には十一時に大丈夫つける。まだ半時間位はゆつくりして居たつてよろしいと云ふ處である。その十時半と云ふ時にオスワルドから簡単な電報がとどいて來て總員見る見るとよめいたつた……。

アニンは血の氣のない白い顔をして居る——いつでも旅に出るとなると悪性な頭痛を感じるのが彼女の癖だ。——着て居る着物はわざ／＼外國人の秋波をさける爲めとあつて一種獨特な黒まだらの模様で、それに大きな黒い帽子、もう玄關のところ、奥様の紫色の旅靴の側に

今か今かと陣取つて居る。カッセル爺やは並べてある荷物を一通り數を調べ立、お辨當のなかまでも覗いて見て、命令の通りすべての料理が揃つたかを確かめもう安心顔、そこへ突如として衣箱の音が階上の方から、如何にもあはただしくさや／＼と降りて来て、現れたのはシヤロット老女史、盛装の帽子美々しく旅の面衣を掛け、後ろに曳きする裳も長々しいが、その顔はただ事ならぬ興奮の爲めに、白く輝いて『アニンや。一寸おいで』と呼び爺やの方に向ひ、『カッセルや。私は病氣になりますからね。私は病氣が重くて誰にも面會が出来ないつて云ふのですよ。わたしは病氣が重いんだよ。』

と云ふがはいいか、恰も二十歳前後のお嬢さんの様な活發さでもつて奥に姿を掻き消してしまつた。

爺やと女中とは呆氣にとられて奥様の狼狽した後姿を見送ると部屋の扉をひどく閉める響き……そしてあとは暫く森とした沈黙。

『は——れ』とやうやくのことでアニンが立ちあがつて、殉教者のするやうな溜息をつき、奥様の旅行靴を持ちあげながら——その重量約四十磅——ハンカチーフで頭痛のする顛頭を抑へつけ抑へつけて奥様の部屋の方へと二階にあがつて行つた。

カッセル爺やは口をぼかんと開けたまゝ人心もなかつたが、聽て玄關の叫鈴の響きでわれに歸つた。出て見ると訪問客はオスワルド・サイデンハムで、片つ方の手を繃帯でぶらさげ、もう一つばうの手にも何やら纏ひつけて居る。

『やあ。カッセル爺さん。僕の部屋はまだ昔のまゝか。電報がとどいたらう。どうだ伯母さんは相かはらず元氣かい。』

『今、大變、大變病氣が重いですよ』と爺や『床につきつきりてがしてなあ。』

『なに。そんなに酷いのか。』

『へい。急にお悪くなられましたでがすよ。』

『ふむ。まあ。奥様に僕が来て二三日泊つて行きたいからつて云つて呉れ。それから一寸此の僕の荷物を預つて、呉れないか。此の馬車でひと驅りリムスフィールドに寄つて來たいんだ。午食には歸つて來るからね。』

『はい。さう申します。』

で爺やは外に出て、忙がしくオスワルドの小靴と、行李とを受取つて歸つて見ると、オスワルド先生先き程から、見える方の片眼を物凄く輝かせながら、シロジロと女史の旅行靴やその

他伊太利用の荷物を凝視して居て、今にも手酷い質問が唇からほとばしり出さうである。だがオスワルドは爺やには何んにも云はず、ただ目たゞきを一つだけばかりとさせた。

「腕はお痛みぢや御座んせんか」と爺や、

「いや。別に」とオスワルドは尙ほ怖しく怪訝な面魂をして、その切迫した様な伊太利用の徴候を見ながら「ふーむ。」

が彼は兎も角も急いで馬車の方に行き乗り込まうとしたが、その刹那ぐるりと頭を旋回して伯母の部屋なる二階の窓を見あげたそのとたん、圓らすも伯母の心配さうにこちらを見おろして居る幅の広い顔に出くはした。

「おや」とオスワルドは叫びで、破顔一笑——ただし濼い一笑だ。そしてづか／＼と引きかへして来て、

「爺や」と叫むだ。

「はい。」

「奥様は起きてるぢやないか。旅行に出られるまでに二言三言話し度いことがあるからつて、さう云へ。」

「でも、はい。……奥様は……。」

「まあいゝから。さう云へ。」

「アニンさんにさう申して見ませう。」

爺やは二階の方に行つた。オスワルドはまだじろ／＼荷物を見まはして居る。さうだ。伯母は逃げださうとしたんだな！ すつかり準備を整へて居る。アルピン杖に辨靴に、旅行用の床几まである。すくなくとも此の夜を瑞西か伊太利かで送らうつて云ふんだな。こいつ何はさて置いても直接伯母の顔を見てやらねばならぬと云ふ考へがむか／＼と湧き起つた。ですぐとカッセル爺のあとに従つて追つかけるやうに突き進むだ。ただし極静かに。

すると廊下のところで爺やがアニンと、あはただしげに小聲で云ひあつて居る。「叱られるのよ。叱られるのよ」とアニンの聲、

アニンが、オスワルドが近づいて来るのを見つけて、「奥様は只今……」と口籠るのを、

「シツ」とオスワルドは云つて、人差指をあげて見せて爺やと女中との聲をひそめて、耳を澄ますと、部屋のなかでは、圖體の大きな力のありさうな老女史が大急ぎで寢臺の上に晴着を着たまゝで横たはるらしい氣配が明瞭に感せられるのであつた。

「わたし。ちよつとお部屋にはいつて参りますから」とアニンが沈黙を破る「奥様が……奥様がまた酷くお悪い様子ですから……。」

と云つてアニンが身をかはずやうに扉をあけて這るや否やびしやり、「鍵をかけておしまい。はやく。馬鹿々々」とシャロット女史が鋭く叫ぶ聲が漏れた。——もう時機を失した叫びだ。

此の時はやくもあの嫌な悚つとする程怖しかつたオスワルドの顔が扉の間から、老淑女の室内を覗き込むでしまつたのである。女史の飾り澤山の帽子は枕もとに投げ出されたまゝ、衣帽はすばやく載せられてあつたものゝ、大きなブロンド捲髪の旅假髪が下から覗き出して居り、衣着もぐる／＼まきに纏つてあつても、頸のあたりに瑪瑙付きの襟止めが燦として謀反をするやうに輝いて居る。

「お前はまた何んだつてづか／＼と……。」とオスワルドの顔を見て老女史は叫むだ。

「伯母さんは病氣ぢやない。今日これから伊太利に逃げ出さうつて云ふ處でせう。僕に責任ある小供達をどうしました？」

「こゝは淑女の病室です。お静かになさい。神聖ですよ。お前さんは紳士の面目を汚してもい

いんですか。」

「伯母さんは麻疹？」

「あつちに行つていらつしやい。」

「行きません。ほんの一二年留守をして居る間でも、伯母さんは事を滅茶々々にしてしまふんぢやありませんか。伯母さん。いつたいどうして呉れるつもりですか。」

「お前さんは狼藉者です。あつちにお行き。」

「外務省に頼んで伯母さんの旅行を差し止めます。伊太利で又碌なことをしやしません。」

「カッセル爺や。お醫者さんにまだ行かないの。」と大きな聲で遠いところに物を云つた。「はやく御醫者さんへ……。」

「は。奥様」と玄關の方から微かに應じた。

「それから停車場行きの馬車をこはつてしまへ」とオスワルドが續けた。

「爺や。爺や。それはならぬ。カッセル！」と女史は絶叫して、がばとばかり、荒々しく臥敷を引き掴むで身を起す、その勢が猛烈すぎて、足もとの方から、長いスプリング入りの婦人用旅行靴が飛び出した。此の淑女、長靴を穿つたまゝで寢床にはいつたのであつた。茲に伯

母と甥とあつとばかり驚きいつたまゝ物をも云ひ得ないで、お互に此の新出現を眺めあつたのであつた。

『まあ。——いつたい——伯母さんは——』とオスワルド、

『出てお行きなさい』とシャロット女史。『出て御行き。狼藉ものには出て行けつて云ふより他はありません。』

『お午食には歸つて来ますからね。一所に食べませう。ね。伯母さん』とオスワルドは極やさしく云つてその場はその儘退出に及んだ。

そして辭して玄關を出る時、まだアニンが停車場行きの馬車を返して居ないのを見て一寸不安を感じたが……。

かう云ふ事情のもとに伯母と別れて行つて来たのだから、オスワルドがイングルヌツクの家から歸つて来た時、伯母の姿が見えなかつたとて、別に驚きもしなかつた。シャロット伯母さんは逃げてしまつたのだ。彼が行つた間に書いた手紙をひとつ残して置いて、

わたしの親愛なる甥へ——私は前々から此の冬を外國で送る準備をしたために、お前さんが、

何の知らせもせず急に歸つて来て、それを迎へるだけのことが出来なかつたのを大變お氣の毒に思ひます。ですがカツセル爺はじめ召使の者たちが、よく氣をつけてお前さんを襲ふことゝ思ひます。御存じの通り家のものはみんな親切ですよ。私もお前さんと一所に楽しく語り度いことが山々ありましたけれど、お前さんはあまり突然に失禮な歸りやうをしたのではありませんか。豫め状師の方にでも通知をして楽しい知らせをして置かねばならぬ筈を、たつた六ペンニイの電報料で済ませると云ふ法がありますか。ですから私は出發してしまいます。待つことが出来ませんでした。すつかり手筈が出来てしまつて居ましたのですものね。もつともお前さんに禮儀など云ふことをとめるのが間違つて居たことも知れませんが。之れからはもう禮儀とか習慣とか申すものを御前さんには宛てに致しますまい。とかくサイデンハム家のものは粗暴で通つて居りますんですからね。それはさうとして、どうぞあの可哀相な子供達をあの煙草をふかす不信神もので、晝でも夜着を着て平氣で居るリムスフイルドのあばすれ女達の毒手から救つてやつて下さい。あのあばすれ女達にはどうして教育なんて云ふ責任を持たせられるのですか。全くその柄ではありません。乞食の兒だつてあんな人達に委されるものではありません。子供達、特別にあの娘の子の方を嚴重に教育して

やらなければ墮落しますよ。あの娘の子は生れが生れで無理ないかも知れぬが、虚言を云ふ不正直なところがあつて、バイパス夫人を随分と困らせたのです。不養生で癩疹にかゝつて、氣の毒にもバイパスの家を病院同様なことにしてしまひました。氣の毒で氣の毒でなりませぬ。私はあの子供達の爲めに全く根限りの力をつくしましたのですよ。お前さんも始めからの物語りをお聞きだつたら、さぞかし小説のやうにお思ひかも知れません。よくよく推察して眞實のところを御覽なさいよ。うはべばかり上手に見せかけたつてね。見る人の眼にはちやんとわかります。お前さんはしつかりして下さいよ。何しろお前さんが歸つて呉れて、私の重い重い責任を解いて呉れましたので、私はほんとにせい／＼して來ました。こんな悦ばしいことはありません。お前さんも獨身であんなかゝりあいのない娘子などを育てるのはさぞお辛いでせうし、まだその上にあんな耻しい生れの娘故私も随分とお前さんの氣苦勞をお察しします。おゝかたわたりが時勢遅れの舊へい人ですから今時の人からは笑はれることばかりしたかも知れません。ただ神様にお縋りして居ますだけです。とりいそぎあらましまで、

お前さんの親愛な伯母　シャロット

手紙の文字が終りになるにしたがつて、シャロット女史流なぎくしやくした字體が亂暴になり、よほど狼狽したところを見せて居る。こんな場合すこしも沈着な態度を保つて居られぬが女史の日頃からの弱點である。

オスワルドがイングル・ヌツクの家を訪ねた時随分長い間その新人らしい綠色の門を叩いたのであつたが、誰も案内に出て來るものが無かつた。がそれでも構はず暫く叩き續けて居るうち、とう／＼一人の小柄の一人女中と知られた女が小ひちやなまんなる顔を出して、すけすけとオスワルドの見える方の片眼を眺め込んだ。——何だか嫌な奴が舞ひこんだなど云ふ心持が表はれて居る。そして云ふには「フィリス嬢さん」は今外出であるし、「フィーブ嬢さん」の方は斷じて御邪魔することが出來ませんと。フィーブ嬢は只今仕事中であるし、フィリス嬢はマリイを連れて出かけたのであつた。

「マリイつて誰です」とオスワルドが訊いた。

「マリイつてマリイさんですよ。以前から此の家に居られる人ですよ」——實はウキンズルに

ジャンを連れ出しに出掛けて行つた處である——『それからフオーブ嬢さんが執筆なさつて居る間は何んな方だつて邪魔することは出来ません。シャロット・サイデンハム女史だつて駄目です。ですから貴方を御取次ぎすることは出来ません。どうしても出来ません。』

『ただお取次ぎの出来ませぬのは』とその女中は勿體らしく附け加へた『死ぬと云ふ知らせと火事だと云ふ知らせだけで御座います。』

『貴方の御用事はピアノの日賦販賣ですか』と更に又此の女中は訊きただした。

流石のオスワルドもさうではないと云はざるを得なかつた。

小柄の女中も氣の毒さうにオスワルドの顔を見おろした。

如何にも之れはその頃のイングル・ヌツクの家での嚴正な律令であるからどうする事も出来ない。フオーブ嬢は峻厳で大真面目である。——嬢は一個の思索家としてその著作しつゝあるところの「縫針女」の記録は深刻で高踏的で時にその思想の範圍は雲煙蓬勃し、その賣れ行きは今まさに數萬部を越えて居る。嬢は毎朝必ず九時半から十二時までの間、その著述の机にがつしりと獅噛みついて、絶對の孤獨を味ひ、あらゆる世間との交渉を離絶し、今しも縫針女叢書の第三編の校正刷を訂正したり、沈思したり、時には聲を高々と朗讀して見たりして居るの

である。(此の高聲の朗讀は時折働きに来る庭師のグルームブリツヂ爺やの耳にはいり、爺やは驚異と感嘆との心に溢れながら『あゝ——あ、お嬢さんは胸にあたることを仰る』と云ふのであつた。)流石のオスワルドも之れは待つより他に手段はないと諦めた『お待ちませうかと。階下の部屋にでも』と云ふと、

『さうで御座いますね。階下の部屋に御案内してもいゝでせうか』と、その小柄の女中は明かに相談でもしかけるやうな物云ひ振りをした。

『勿論さ』と云つてオスワルドがづか／＼と這入り込むだ部屋は、正しく六年前に従がドレイと別れた部屋であつた。

部屋にはいと女中が扉を閉めてしまつて、彼がたつたひとり、想ひがけ無くも昔しの記憶があり／＼と浮かむで、犇とばかり身にせまる。室内の有様などほとんど昔のまゝで、時間も同じ朝の此の頃、同じ通りに影が射しこむで、すべての感じがどうしても昔を甦らせずには置かぬあり、一生忘るべからざる六年前の此の時、ドレイは此の同じ扉をあけてはいつて來たがその顔は如何にも打ち沈むで耻ぢ死ぬかの如くに、最後の決定した心持を告げ、そして永遠に別れてしまつたのである。あゝ、あの時の彼女の有様が、今その同じ情景のもとで、どうし

て滅びてしまつたとは思へやう。生きてる。生きてる。オスワルドの眼には、今にもその扉が開いて、ドリイが現れて出て来るやうに思はれてならぬ。つひ、そこらあたりに立つて居る様だ。此のオスワルドの身とて、よし六年の歳月と、熱病の蹊の跡とがあるにしても、何で昔と變りがあらうに、胸には同じ情熱が脈うつて居り、同じ憤怒、同じ希望が躍つて居るのであるに、彼女は時と空とを絶した彼方に去つてしまつたのか。饑餓も慾望もない世界に行つてしまつたのか。此の窓と此の暖爐との間の煉瓦の敷いてあるところも、六年前踏むだ通りに今も彼は踏んで立つて居る。茲こそ彼女を罵つたところだ。戀を裏切られ侮蔑に亂れた狂人となつて立つたところだ。あの時から彼女の死を知るまで、一瞬の間も彼は彼女を救さなかつた。彼女と俱にあつたらばと思はないことはなかつた。あの時の彼の手の振りあげ、顔を歪め、怨恨斷腸の形相を示した姿こそ、ドリイの眼に映つた最後の彼の記憶であつたか。何と云ふ醜い姿を彼女の記憶に止めて永遠に去らしめてしまつたであらう。今どんなにしたつて其の取り返しが附かない。後になつて悟つた心持ちをどうして彼女に告げる術があらうぞ。あゝ。僕は弱かつた。われとわがした事に不覺にも亂れてしまつた。何故君は——僕の戀人である君は————頭いての後の僕を見て呉れるまでに生きのびては呉れなかつたのか。さう思へば此の室内にはま

だ彼女の亡霊がただよつて居て彼を慍つて居る様だ。彼がつくり出したドリイの亡霊だ。實際のドリイは慍りはしなかつた。彼女は一切の悲劇はただ彼女自身にあると思つて最後まで何人をも恨みも慍りもしなかつたのであつた。

『あはれなるものよ。只愛にのみ頼り離るゝ勿れ』と彼は小さい聲で云つた。『只、愛にのみ。愛にのみ。……僕等は愛に破れた。破れた……』

これまで、オスワルドは之れ程に人生の怖しい悲さを感じたことが無かつた。もう此の上此の室内に居ては聲を出して泣き叫ぶより他は無。彼は庭の方に向いた扉を開いて、ダリアと日向葵との咲いた間の空寂な敷石道を立つたまゝで眺めた。

何だか此の庭もつひ昨日別れた様な庭である。ただ異つて居るものは輝かな太陽に痛くも浸み込む悲しい胸の悲哀みがあるだけだ。

『パツ——シュ——パツ——シュ——ツ』と云ふ音が韻律的にしたのであつたが、彼の耳にはそれが入らなかつた。

彼の脳裡にはビイタアのことがすつかり抜け去つてしまつて居た。彼はゆる／＼と、敷石道を傳つて、例のウキイルドの野原を見おろす小さな四阿の近くまで行くと、振りかへりしなに

ビイタアが棒を手にしたまゝ、こつちを見て居るのに出くはした……。

ビイタアの姿を見た刹那オスワルドは、自分の心に何故かうもビイタアに會ひ度い希望があつたのに、胸忘れしてしまつて居たかと思ひ難い程であつた。此の子がまた大變酷くドリイに似て居る。全く同じ様な笑顔だ。彼の片目の保護者のすこし窺れた姿を見つめるがはやいか。まるでドリイの聲かと思はれる程な聲で、「あれ！ ノビイだ」と叫びだ。眞から悦ばしさうな聲だ。彼はもはやオスワルドの記憶にある様な白前垂を掛けたすんぐりの肉魂ではなくて、すらつとした體つきは、なんだか瘦せた顔のドリイが灰色のフラネル、トラウザアでも纏つて居るとしか思はれない。

此の少年はオスワルドが歸つて來たと云ふあまりに俄かな幸福にどきまぎしてしまつて居る。彼は今しがたまで、ゴム毬を勝手裏の壁にラケットで打ちあてゝは頻りと中てた中てないを勘定して居るところであつて、甚だばつが悪い。オスワルドは此の少年の頭にこんな鮮かにあの當時語つたゴンゴの物語が残つて居やうとは思はず、六ヶ年間の歲月が何等少年の記憶を薄らがせて居ないので非常にうれしかつた。

二人はぢり〜と身體を近づけ合ひ。お互に氣合をしながら迫り寄ると云ふ形勢である。

「おぼえて居て呉れたの」とオスワルドが恍惚とした氣持になつて云ふと、

「わすれて、どうするもんか。獅子の皮を持つて來て呉れるつて約束したぢやないの。」

「約束した。」

オスワルドは此の再會の悦びの第一聲に斷じて嘘言つきになることが出來ない。「今送り届け來る最中だよ。」と言葉を濁して、心のうちでは私かに計畫をめぐらせた。

ビイタアは脇に棒を抱へ込み、ズボンのポケットに手を突き込んで、更に一步近づき寄つた。二人の間の距離はもう四歩かそこいらで、オスワルドは身動きもしないで居る。ビイタアは何だか夢では無いかと、此の偶然なる歸來の人をまだすつかりは信用し兼ねて、頭をすこし傾げたまゝ、チロ〜と見て居る。

「君だつた。君だつたね。僕にいろんな面白い話をして聞かせて呉れたのは。」

「その話を今でも覚えて居るの。」

「おぼえて居らあ。ウガンダに居るバガンダの話もしたろ。それから僕のズールー人形だの象だの獅子だのをいつばい床の上に並べて、茲はアフリカだなんて云つたのも君だつたらう。獅子の様に吼へる聲の出しかたも教へて呉れたんだらう。——ジャンと僕とに。君は忘れてしま

つたの。』

オスワルドは想ひ出した。自分が四ツん葡ひになつて、光線のよくあたるあの育兒室で子供達と遊んだのだつた。子供達は逃げまはつたりなんかしたのだつた。そして眼前に大きな湖水を彷彿させて見たり、光線のとほらぬほど鬱蒼と茂つた大森林や、野草の咲きほこつた曠野や、または豁谷などをなぞらへてそこにいろんな野獸を横行させたのだつた。そしてそこには歐羅巴人を見たことも無い土人が幾らも居ることを話して聞かせたのであつた……………。

ビイタアの保護者であると云ふ任務の觀念は、ビイタアの姿を見た刹那には全く消え去つてしまつて、ただ生き生きとした懐しさが先きに立つばかりである。單に保護とか教育とか云ふ關係ではなくて、生命と生命との接觸が實現されたのであつた。いつたい十歳前後の少年でその健康状態や境遇やが何不足の無い場合には、凡そ森羅の創造物中之れ程に優柔な、可愛いしかも情熱的なものは無いと思はれると同時に、眞に超自然的に勇氣があつて、睿智に満ちあふれて居る様に思はれるものだ。あだかも今にも消えて行きさうにばつと燃えあがつた聖火の

煙の様なもので、人生のうちで最も尊いものである。特にその兩親なり保護者なりが、何か氣持が興奮して居る場合には、かう云ふ少年の姿は尙ほ頼母しく思はれる。今ビイタアが纏つて居るフランネルの服は、嘗つて狀師グライムス氏が、身體の生長を見越してずつと大きなのを買つて置いたのであつたが、オスワルドの眼には、それが一向不似合ひには見えす、かへつて少年の身體にはよくある突然な收縮状態だと思はれて一層可愛さがまさつてならぬ。何だか今にも此の少年を連れだして、麥酒を飲み、クリームを食ひに、海水浴に連れて行つて見たくて仕様が無い。

だが斯う云ふ感情は今の場合それはおくびにも出してはならぬ事だ。

『又、何か面白い譯でもして聞かせねばならんかなあ』とオスワルド、『今度は水いこと棲む氣で歸つて來たんだから。』

『此の家に？』——と輝かな聲。

『さう。此の近くにだ。だがビイタア。今度は何處でもお前に會へるよ。』

『僕。いゝなあ』とビイタア『僕、いつも君……おちさんのことばかり思つて居たんだよ。』一寸沈黙。

「おちさん。腕を折つたの？」とビイター、
 「たいした事も無いんだよ。爆弾の片れが這つて居たんで、抜き出して貰つたところなんだ。」
 「ちあ。あの埃及爆弾？。おちさんが、く、の勳章をもらった時の。」
 「埃及爆弾のことをお前に話した覚えはない様だが」とオスワルドが不思議な顔をする、
 「お母ちやんが話した。一度。ずっと以前に。」
 又沈黙。

「ビイター。此の庭も昔の通りで、別に變つた様子もないね」とオスワルド、
 「あそこに方情園と云ふ庭が出来たよ」とビイターは頭の動作でもつてその位置を示しながら
 「狭い庭だ。フォープお伯母さんが始めたんだけど、もう忘れちまつてら。誰でも茲に訪ねた
 人は何か植ゑて置くことに決まつてるんだつて。それから僕とジャンとの庭もあるんだけれど、
 もう雑草がはえてしまつた。」

「どれ。それをみんな見せて貰はうか」とオスワルド、そして此の保護者と被保護者との二人
 は小高くなつた阪の方に足を運んで行つた。

「今年はダリアの花が美しいね」とオスワルド「それから此の日本産の野薔薇には毒が一つは

いになつて居るね。綺麗ぢやないか。之れでゼリイが出来るよ。随分美味いゼリイが。それから
 ら此の徑をすつと行くとウキルドの原一面が見おろされる四阿があつた筈だつたね。あゝ。あ
 るある。ほんにみんな昔の通りだね。」

彼はその四阿に腰をおろした。彼がドリイと語りドリイの手を把つた處である……………
 彼は強ひても言葉でもだして感慨を破らうとした。

「ビイター。丁度何歳になつたのだね。」

「十歳と二ヶ月」とビイター、

「お前の爲めに一つ立派な學校を探さねばならんね。」

するとビイターは、その返事はしたく無かつたのか、「あれからおちさんはずっと阿弗利加に
 居たの？」

「うむ。お前と別れてからはね」とオスワルド、そして此の男は少年の顔を繁々と眺め、少年
 もまた此の男の顔を繁々と眺めかへした。「おちさんは、すうつとウガンダに居たんだよ。戦争
 をしたし、いろ／＼なことも働いたよ。いつかお前もウガンダに行つて、おちさんの爲たこと
 を見て呉れる日があるだらう。おちさんは鐵道も敷いたし、道路や電話やなどこしらへたよ。」

山賊も平げたし。悪いものは残らず征伐してしまつたよ。』

『それから獅子も澤山射つたの？』

『あゝ。澤山。獅子はどうして、ちよつと怖いもんだよ。ナイロビの邊には随分居るよ。』

『獅子が向つて來るところを撃ち殺したの。』

『一疋すぐ眼近まで飛びかゝつて來た奴があつたよ。』

『そいつが僕の皮だ』とビイター、

オスワルドは答へなかつた。

『僕もアフリカに行き度いなあ』とビイター、

『さうだ。行くんだ。』

そして茲に彼は早速にも眞個の帝國主義、即ち新帝國主義が現代を風靡する以前の英國社會を支配した理想によつて英國市民を教養すべき聖なる義務に氣附きそれを實行すべく決心の膽をかためた。さうだ。アフリカに遊ぶ。之れが英紳士の眞面目だよ。ビイター。英紳士たるものは斯うなくてはならないさ。世界の何處へでも行くんだ。到るところに鐵道や道路を開き、文明と平和との輝きを照らし、正義の行はれるのを見て怡しむんだ。猛獸狩をしたり、嶮

しい山に攀ちのぼつたりするのは、英國紳士の道樂遊びだ。英國紳士は世界を監視する巡查なんだ。護衛して居るんだ。奴隷を遣ひまはして大金持ちにならうなんて考へてる下司な人間では無いんだ。英紳士は世界に働きかけるんだ。印度もアフリカも支那も極東も世界ぢうの大海洋も残らず英國紳士が活動すべき舞臺だよ。ね。だから此の少さなよく肥えた緑濃い島國、ちやんと整つて美しい家や庭やで一つばいになつて居る島國は、ほんとの英國紳士が活動するところであらうて、病氣になつたりした時に保養に歸るところなんだよ。本國は子供を育てるか、歸つて來て死ぬかするにはいとところだ。休息する處だよ。元氣な間は留まつて居るところでは無い。』

『さうだなあ。おちさん。』

『さうだとも。』

『だが、おぢさんは死に歸つたんぢやないだらう。なあ。ノビイおちさん。』

『心配するなよ。用があつて歸つて來たんだ。一寸保養するだけだよ。此の腕がなあ、痛かつたからだよ。……それにお前を見に歸つて來たんだよ。』

『ほんと。』

「ほんとだとも、お前はこれから大きくなつて一生懸命に勉強せねばならん。科学とかいんな事を。役に立つ人間になつて、世界の到るところに活動をするんだ。」

「アフリカに？」とビイター、

「さうだ。アフリカがよからう。その爲めにも之れから學校——大學にも行かんらんよ。うんと勉強してまごつかない様にするんだよ。アフリカのことなど。」

「だつて、おちさん。僕にはまだ誰もアフリカのことを教へて呉れないの。」とビイター、

「さう。まだお前の學校ではそんな事は教へまいね」とオスワルド、

「もつといふ學校があるの？」

「あるよ。限りがない。一ついゝのを探さう」とオスワルド、

「學校をはやく止めたいなあ」とビイター、

「何故？ まだ勉強が出来て居ないぢやないか。」

「僕、やつつけ度いんだもの」とビイターはウキルドの曠野の耕されて居る有様を見おろしながら嘯いた。

「まづ學校からやつつけるさ。」

「いゝや。すぐアフリカか印度か、——何んかしたいなあ。」

「學校が第一だ」とオスワルド、

「ちや。おちさんの行つた學校は鐵砲や猛獸狩や山登りやアフリカ土人やの事を教へたの」とビイター、

「さう云ふことも教へねばならぬ筈だ」とオスワルド「兎にかくいゝ學校を探さう。」

「ラテン語も文法も平方根を出すことも無い學校がいゝや。」

「いや。そりやどうしても勉強しなきゃならぬ。」

「どうしても、ノビイお伯父さん。」

「やつた方がいゝ。」

「だつて、あんなもの役に立つの。」

「立つよ。何かの場合に。頭を練るのに大變いゝものなんだよ。ビイター。さう云ふものを勉強するので腦髓がしつかりして來るんだよ。」

ビイターは返辭をしなかつた。

がしばらくたつてビイターが「僕、機械を習いたいなあ。」

『それは、新學が一通り済んでからだよ。ビイター。』

『僕、飛行術を習いたいなあ』とビイター、

『すつと、すつと、先きのことだ。』

『僕の居た學校にお父さんの關機士の友達が居るよ。飛行機が今に出来て来るんだつて。』

これはオスワルドの推測を超越して居る。

『佛蘭西が風船に乗つて行くことを考へついたらか云ふがね』と

オスワルド『今に空氣のなかをあるきまはることが出来るかも知れんね。』

『僕の友達は風船は駄目だつて云つてるよ。風船ぢやなくつて、

本當は飛行機だつて。飛行機は空氣よりは重いんだつてね。鳶や鳥やのやうに飛びまはるんだつて。』

『さあ。そんなものが僕の生命がある間に出るかね』とオスワルド『お父さんの一生にだつて六ヶ敷いよ』ビイターの頭には直覺されて居る人類の運命が、オスワルドには皆目わからなかつたのだ。



初期の飛行機

『……』ビイターの輝かな夢に暗い影が射して来た。(ノビイはよく辨へて居なければならなかつた。彼の言葉はビイターにとつては最後の決断だからである。が何れにしてもビイターの友達の父は機械家であつた。)『僕、飛行機に乗つて見たいなあ』と暫くたつてからビイターがまた云つた。

何だか教會堂から行列が出る時に振り立てる大旗の模様似た感じのする裝飾的效果のあるものが礮石道の上に現れた。それはフォープ嬢である。

嬢はいつもよりは半時前やく切りあげて庭に出かけたのである。がそれよりも前に嬢は下の庭の方でオスワルドとビイターとが話しあつて居る聲を聞きつけた時から、もう落ちついて書けなかつた。思索の絲が亂れたのを、どう纏めやうと思つても纏まらず、暫く回空しい努力をしては後、寢室の方に行つて、鏡の前で、大抵朝のうちは不精に亂れ勝ちにして居る髪など整へ、且つ如何にも自分の格の表現に相應するやうに髪を改めた。嬢の服装は、いロビブナ、濃厚な縞縞のつた裾がくつつき、茶色な鞆の上に草靴を穿き込み、抱へ

込んだ大冊の革表装の綴帳はすぐ必要と云ふよりは、大に著作家たるの象徴として見せる爲めである。それに今日は、金冠の萬年筆を携へて居り、且つ胸にぶらさがつて居る飾鎖りは、その昔乳呑児時代のビイターを頗るよろこばせたものである。

嬢はオスワルドが思つて居たよりは、すつとしつかりしたところのある自信に満ちた女性であつた。嬢は大に雄辯を振つて辯解をやり出した。「私は邪魔をされない爲めに黄金律を制定してしまつたもので御座いますから、ほんとに失禮をいたしました。何しろ書くとなれば、男の作家の筆持ちで、平凡な女になつては居られませんからね。九時から一時までの間は、私は全然閉ぢ籠つて、侍應にはいつたと同様、外界と離絶するので御座んすよ。自我の冥想のめつとも聖なる時間で御座います。私にとつて之れほど尊い時はありません。ですから、どんな訪問客も刺を通すことを許しません。絶対の黄金律にしてしまひましたのですよ。」

「僕等は御互に仕事を尊重しあつて居ます」とオスワルド、
 「ですが、もう放免ですの」とフォーブ嬢は雲が逃げた時の太陽の様な晴れやかな微笑を見せて「今日はもうすつかり済みました。もう私は人間性にたち歸りて居りますの。——明日の朝の九時になるまでは。」

「本をお書きになつていらつしやるんですか」とオスワルドが當り前に急いで寧ろ失禮な問いをかける、

「さうです。縫針女、第三編です。何しろ希待を多くされて居りますからには、大に思索を練つたものを提供せねばなりません、全く次ぎの編の爲めに如隸になつて居るやうなものですわ。」
 フォーブ嬢は壁のところに行つた。そして恰好のいゝ側面を向けながら目下の景色を眺めやつた。心持ち呼吸をはずませて、微かな筋肉の顔へがあらはれて居る。髪は綺麗に梳られたまゝである。「ウキルドの原つばは昔と變つた様には見えませんか。」

「昔と全く同じですね」とオスワルドは嬢と並んで立ちながら答へた。
 「ですが、私にはさうではありませんね」と嬢。事實嬢にとつてはさうであつた。嬢の眼には常に野原は變化して居る。「いつも風々として、いつも不可思議の感にうたれますが、それで居て絶えず變化を見せます。毎日違つた姿を見えます。私は野原のうつり氣な心をすつかり呑み込んで居りますわ。」

オスワルドは何だか嬢にうまく言葉の罫にかけられた様に感じた。明かにどきまぎしてしまつた。

『ですが』とたち／＼しながら『兎も角も根本的にはウキルドの野原は何時見ても同じ野原ぢやありませんか。』

『さあ。さうでせうか』とフオーブ嬢は突差に答へて、じろ／＼と相手の顔を見、恰もその言葉の意味をつたかの様に『はて、根本的とは？』と云つたが『わたしには判りませんわ』と稍あつてから附け加へた。

オスワルドはほと／＼返辭に窮してしまつた。

『オスワルドさん。貴方の今度の新しい責任はどう御考へ遊ばすの』と嬢は話題をかへてかゝつた。『まだビイターは子供ですから、何んにも判りませんでせうね。あれで可々一人前氣取りで意張り込んで居るんですよ。玩弄物などはすつかり投り出してしまつて、驢馬に乗つたりなんかして紳士氣取りですわ』と言ひ、ビイターに向つて『ね。ビイター。お前よくわかつて、今度からは、サンデンハムさんがお前つた獨りのお役さんになつて下さるんですよ。』

ビイターはオスワルドの顔を見て、羞しさうになつて微々とした頬をあくして。

『まあ。何とかやつて行きませう』とオスワルド、
『それでほんとにひと安心ですわ。娘の子の方も御世話なさいますんですわね。』

『え。到底その任には非ずすけれど』とオスワルド、

フオーブ嬢は此の時、ウキルドの野原の方に向いて獨吟でもする様に、

『亡くなつたドリイさん。あなたも哀れな一人でしたね。あなたの母性もとう／＼完全にはありませんでした。何世紀も何世紀も、女は自己を否定して來ましたんですからね』と云つて、それからオスワルドの方に向き、『思ひますわ。若しドリイさんが今すこし物を考へる餘裕を持つて居ましたら、屹度保護者のなかに女性を除外することはしませんでしたわ。屹度。男にどうして子供の教育が出來ませうに。特に娘の子を育てる上に於いてはです。此の小さなことに氣が附かなかつたが爲めにどんな大きな結果が來るかわかりませんわ。もう濟んだことは取りかへしが附きません。あゝ。私には大きな経験でした。恐ろしく意味の深い経験でしたわ。今まで私が育てましたこと。それがどんなに深い影響を子供に與へたか、御了解下さいませうか。』

しばらく沈黙が続いたが、聽てオスワルドが町重に『その御経験と云ふのを正確に云つて聽かせて下さいませんでせうか。』

『女性の影響。——女が子供に及ぼした影響は一番偉大で永遠にわたつて支配しますわ。』

オスワルドは考へて居たが、『では伯母のシャロットが與へた影響も偉大だと云ふことにもな
りませんでね』と投げ出す様に云つた。

『エツ』とフォープ嬢は呆れた様な顔、

『シャロットの伯母も随分子供を手にかけたと思ひますが。』

『女性ですよ。違ひます。シャロット女史は女性ぢやなくつて、男の出来損ひです。根本的に
蠻婦以下です。昔は若かつたから、すこしは女らしく、それで今日の位置が得られたでせうが、
今は何です。情的殘留物ぢやありませんか。未亡人です。寡婦です。女性ではなくて物品です。
それにあの人の——した事はみんな男の頭から出て居ます。男——意氣地も何もないグライム
スと云ふ狀師風情の指圖でやつたのです。ほんとに弱蟲の狀師ですよ。おしやべりの——あれ
が男ですよ。男から出た事です。』

此の猛烈嚴酷な考へが、しばらく嬢の唇を凍と結ばせて居たが、聽て手輕に口ばやに『わ
たし、あいつを撲ちのめしてやりましてよ。随分小つびどく。』

オスワルドが『どうか今後とも貴嬢の御助言を仰ぎたいものですが』と極めて眞面目に云ふ
と、

『いえ。それは』と嬢は云つたが、心はうれしく、『さあ。どんな助言が出来ませうか。定めし
難解なことも知れませんよ。根本が違ひますものね。どうぞ御期待なさらないやうに。
御意に叶ふ御指導は出来つこはありませんから、男と女と云ふ大相違があるんですからね。
私達は今綺麗に貴方に子供等を御譲りしてしまひます。——法律がさう決めてある以上は致し
かたがありません。どうぞ御受取り下さい。』

それから嬢は又原つばに向つて話しかけた。恰も牝獅子の獅子吼か。一語。それは最近十年
間女性活動の基調をなす語で、はるかに雲に反響した。

曰く、『女權獲得』そしてフォープ嬢は驚くべき情熱的な餘韻を長く曳いて、『投……票……權
を……』と云つた。

.....

こんな廢有様で、オスワルドは俄かにどざりとばかり全責任を押しかけられた譯だ。

フォープ嬢のその態度には物懐い暗示が漲つて居て、オスワルドはその場にもビイタアに帽
子をとつてかぶせ、ビイタアの所有品を全部纏めて小さなひと禁げにし、早速左様ならで、廣

い廣い浮世に出かけ、序にその足で、ウキンズルにたちより、病みあがりのあの娘つ子も携へて行かねばならないやうな意味に當然とれるのであるが、但し之れはフォープ嬢の意を誤用したものと云ふべきである。結局愈々さうなつた處で、此の家此の庭園はビイタアの所有物である。だからすくなくとも一切を現狀のままに續けるより外は無。が何れにしても一切指導の義務は茲で明白にオスワルドに落ちかゝつたのである。此の二人の少年少女が正當に教育されるや如何。二人とも怠惰なもの、不完全な人間になりさがるか、それとも、此の大帝國の有爲に價値ある市民となるかどうか。その鍵が全然オスワルドの手中に收まつたのである。

「彼等の爲めに最善の道をとつてやらねばならぬ」と彼は云つた……………

その最善の道がおいそれと出て來ない。

彼はチャストランドの家及びクライマックス俱樂部の借切りの二つの部屋のなかを策源地にして、まづ、その教育的最善の手さぐりをやり始めた。彼はチャストランドの家で日を送る場合には毎日のやうに自轉車でイングルスツクの家を見舞つた。その道は彼の記憶には深く喰ひ込んで居る道だ。その道のどの曲り角でも、彼には思ひ出ならぬはない。その昔ドライの姿を一瞬見る爲めに毎日々々自轉車を駛せたところでは無いか。彼が六年の以前に別れるべく止むを

得なかつたあの往還の傍の、一面の薊金雀花の繁みは、今は名残りの様にすこしになつて居るが、彼はその處で昔と同じ様に自轉車から降り、そして此れも昔と同じやうな古さびた小徑を歩いて近づくくと、ドライの顔が見られるとの想ひで胸が時のいた、と同じ様に今も動悸が搏つ。ただビイタアが次第に彼の心を占領してドライの追想を根絶し始めた。時々ビイタアは往還まで出て來て立つて待つて居る。時にはまたビイタアはその小さくなつてしまつた自轉車に乗つて、彼を追迎へる爲めに、紫だつた共有地の原っぱの真ん中邊までもやつて來て居る事さへある。

大人と十歳の少年との間は、恐らく、大人と十五歳の少年との間よりはすつと仲好しになれるだらう。彼等の間には殆んど自己の揮が無い。まあ、こんな問題はどうちにしても、兎も角も、ビイタアとオスワルドとは何等の拘束もない自由な心持ちでもつて教育を語り、旅行を談じ、政治や哲學や論じあつた事になつて居る。オスワルドは子の無い人間に通有性の通り、濃潤な少年の脳髓と云ふあの灰色なもの、なかに何ものを藏して居るか云ふことは、疑ひをかけないのである。だからただビイタアの言ふことが面白くてならぬ。ビイタアの好奇心に無限の興味を興える。オスワルドの稟性としては、男に對しても女に對しても子供に對し

ても話の調子を引きさげると言ふことは絶対に無い。そんな考へを抱いたことも無い。だが、若し諸君にして、彼にどうしてそれが出来るかと質問したところで、彼は要するに其處ことを人間はしないんだと答へるばかりだらう。でかう云ふオスワルドの心の傾向がどれほどピイタアとの間に廣く廣く話題を擡げて行つたことだらう。何處まで行つても果てると云ふ事の無い仲好しだ。ピイタアはオスワルド以上の好い友達を想像上に描くことが出来ない。オスワルドと話して居れば何時迄経つても飽かない。彼等二人はお伽噺の世界を根柢にしたあらゆる話題を語りあつた。そして二人は物語が齎らす夢の世界を何處までも辿つて行つて、果はブンゴなどが勇敢にさ迷ひ出て来る不滅の領域にまで手を取りあつて行く。オスワルドは何時しか眼前のピイタアの姿が幻景化して、空想の産物となり、何だか光榮あるお伽噺と英雄と伍して居るやうな氣持ちにさへなることがあつた。

彼等の話し會ふことは、多くはお伽噺の形式をとつて居る。

『コンゴの大森林つて、何う行けばいゝの』とピイタアが問ふ『ナイロビの河を傳つて行くの』

『いや。その道ぢやない。あすこに行くにはなあ……………』

そこでノピイとは一所に荷物を整へて、先づ從へて行く人夫の數を調べる……………。

『そのうち僕達は乾度鰐魚が澤山棲んで居るところに行くんだ』とピイタアが云ふ。

『行くよ。その時お前がたつた獨りだけ先頭に立つて、鐵砲を持つて、先づ何者が潜れて居るかつて見とどけるんだ。——頭の上まで 伸びて繁つて居る草を分け分けして行くんだ』とオスワルドが面白がらせる様に云ふと。

『だつておぢさんは僕と一所に居ないの』とピイタアが口を尖らせる……………。

それは現實のお伽噺だ……………。

その頃のピイタアは、よくたつた獨りで紙の前に考へ込んで居るのが癖であつた。そして何枚も何枚も見ると見る冒険の場台を描くのだつた。或る日、オスワルドがそれを見るときやんと自分がその夢幻畫のなかに描かれて活躍して居る。彼とピイタアとが一軍隊を率ゐて戰爭をやつて居る圖だ。『戦象十疋を生捕る』と云ふのがその畫題となつて居る物語りである。それにしても如何に少年ピイタアはオスワルドの眞實を活寫して居ることぞ。その鬨い眉毛の無い顔の半分、如何に非對照に畫いた硝子の眼玉。何等の遠慮解釋も無い。その身體つきが、ひよろ長く、瘦せこけて、前かがみになり、腕はまだ綱索で吊つたまゝだ。總ての筆法が如何にも確信

と驚嘆と愛慕とで漲ぎつて居る……………」。

ビイタアが學校を敵視する心は少しづつ薄らいで來た。聖十字架學院の教へかたは頗る悪く彼を傷けてしまひ、ミルス嬢先生の想ひ出は悉く無味乾燥な聊想を重疊させるばかりだ。だが、それでもオスワルドは絶えず少年に學校には必ず行かねばならぬと吹き込んだ。

『ビイタア。お前はまだ知らねばならぬ事が澤山あるんだよ』とオスワルド、

『だつて家で本さへ讀めばいゝぢやないの』とビイタア。

『本さへ讀めば何んでもかでも判ると云ふものぢやないよ』とオスワルド『眼で見たり、手で稽古せねばならぬことが澤山あるんだ。實際に行つて見ねば判らぬことが多いんだよ。』

オスワルドはビイタアにどんな學校でどんな勉強をするのが本當かそれを思ひ當たらせて見た。

するとビイタアは考へて居たが『僕、いろんな動物の身體の中のことを知り度いなあ。それから外國に棲んで居るいろ／＼異人のことも知りたいなあ。——それから機關車の動くわけと——いろんなことを皆んな知りたい。』

『さあ。さあ。さう云ふことを何んでも教へる學校があるんだから、それを見つげやう』とオ

スワルドは、恰も學校陳列館に物でも註文するかの様な口調で云つてのけた……………」。

彼こそまだ大に教育と云ふことに就いて學ばねばならぬ状態である。

と云つても、まだオスワルドは彼の責任のただ半分だけに面と對つて居るに止まつて居る。

或る時、彼はビイタアが一心不亂に机に對つて白い紙から文字を切り抜いて居るところを見た。ビイタアの傍には土耳其綾織の長い布れ端が置いてある。セリドリツクから剽竊した模様でイングルヌツクの家の飾り箱からでも持ち出したものであらう。『僕。ジャンの歡迎準備をやつてる所だい』とビイタアは大得意だ。僕。此の布に Welcome と云ふ字を切つて貼つて、庭の門の上に掲げて置かうと思ふ。それから凱旋門も拵へるんだ。』

此の時まではビイタアは忘れたも同然だつたが、此の日は彼の頭にはジャンの外物をも無い。オスワルドは圖らずも、自分がビイタアの世界の最高中心の地位から一刹那に轉落して、單なる裝飾手傳にさせられてしまつたことを發見に及んだ。だが實は此の時彼は始めに此の少年を了解し始めたのだ。そして哲學的思索の満足でもつて、自己の白熱燈たりし位置を神護し

たのである。

懸てフィリス嬢がジャンを連れて、此の Widows の門をくぐつて、塹石道にはいつて見ると入口の扉の處までの間、兩側に色紙が澤山花紙にして垂るしてあつて美しい。(之れはフィリアが自分の財布からお錢を出して買ひ、その前夜にオスワルドと二人で飾つたものである。フィリア嬢は偉大な道徳的支持の責任感を發揮して手傳はざる事をもつて手傳つた。) 凱旋門はゴシック式とても云つた風に網柱を應用してしつらへ、それに衣装箱のなかへ持ち出した東洋製の珍らしい織物の切端などを絡みつけ、兩方から魁偉なヘラクルムの頭を二つ番はせて掲げてある。そこに立つて待つて居るビイタアの姿は雪の様に純白な絹子の装ひで、これは頗るビイタアの無邪氣な虚榮心を満足させるもの——ほかの場合、これを飾つてパッサニオを演じ、ハルの王子を演じ、わけてもシイザルの上に乗るかゝつて居るアントニオの役柄など得意にやつたものだ。その白衣の姿でビイタア先生今日恐しく眞面目腐つた顔つきをして居る。彼の後にはノビイおちさんが控へて立つて居る。

ジャンはビイタアが心に描いて待つて居た通りのジャンでは無かつた。彼女は病あがりの瘵れがまだ残つては居たが、脊の高さが五六寸も増した様に思へる。丁度彼と同じやうな高さになつた。それに顔の色が非常に白くなつたので、その髪がいつもよりもすつと黒々と見え、眼が大きく輝いて居る。静々と塹石道に歩を運びながら、その大きな眼を見開いてやつて来る。ビイタアには、どうもその様子が以前とは變つた様に感ぜられた。だがどう變つたかそれを云ひ當てることが出来ない。まづジャンには雅やかな要素が多くなつて、元氣らしい點が減つた。が「ビイタアさん。綺麗ねえ」と云つた聲はすこしも變らぬジャンの聲である。すこしの間彼女がビイタアの前に立つたまゝで居たが、懸て兩手を擴げて彼を抱へた。そして抱き擁めて接吻をした。ノビイおちさんの眼にはビイタアが無暗と抱擁、通れやうとばかりあせり、一向接吻をしかへさうとしないのが、聖十字架學院の惡影響の一端だと思はれた。

がビイタアはすぐとジャンの手を把つて、

「ジャン。遊戯室に行かうよ。その方がいよ」と云つた。

「さう。それがいよ。ジャン。ビイタアと一所に」とオスワルドは云ひ置いて、フィリス嬢の方に會接に行つた。フィリア嬢は如何にも知的な女らしく階段の高い處に居て、之れ等の光景を見おろし、フィリス嬢、後ろにはマリイが續き、マリイの後ろにはリムスフィールドの馭者がフィリス嬢のトランクを肩にして續いて來た。そして凱旋門を滅茶々々にしてしまつた。だが

その時はもうビイターがその場に居なかつたし、後になつて知つた時には怒りもしなかつた。凱旋門は充分にその効果を擧げたのであるから。

遊戯室と云ふのは昔の育児室を豊富にしたのであつて、真に大によかつた。室内の隅から隅まで緑と白との色紙を繋いだのを垂れて飾つて今日の歓迎の光榮が輝き満ちて居る。右側の床の上には丁度窓の下ところに、ビイターの持つて居るあらゆる玩弄物の兵隊さんが觀兵式の様子に立ち並んで居る。——オスワルドが買つてやつた素敵な灰色なスコッチ熊皮があるが、實はそれなど何んでもない。室の中央の堂々たる肘掛椅子の上にはビイターの新所有たる『獅子の皮』が掛けてあるのだ。そしてその椅子の前の方には緋色の玉甕が敷いてあつて、ジャンが之れを踏んで獅子皮の玉座に即くことになつて居るのだ。その玉座の傍には小聖の卓があつて、それに金箔散らしの織物が掛けてあり、素晴らしく美麗な鍍金の寶冠と王笏とが置いてある。之れ等もその朝オスワルドが買ひとゝのえて來たものである。

『此の寶冠はお前のだよ。ジャン』とビイター『王笏もお前の爲めに買つて來てあるんだ。』

小さな眞白い顔をしたジャンはぼかんとして、片手に寶冠、片手に王笏を持つたまゝ立つて居る『寶冠をお冠りよ。ジャン』とビイター『お前のだよ。今日は復位式をやるんだよ。』

だがジャンはまだ寶冠を頭につけ無い。

『何んて綺麗でせう。まあ。こんな綺麗』とジャンは夢心地になつて小さい聲を出した。大きな黒々とした眼を一つばいに見張つて何だかまだ信じられないやうにあたりを見まはしてばかり居る。再び歸つたのだ、家庭に、ホームに——ホーム。バイバス夫人の事は一夜の悪夢のやうに過ぎ去つてしまつた。彼女はこれまでバイバス夫人と云ふものが消えて無くならうとは實際に考へることが出来なかつたのであつた。フィリス嬢とマリイとが迎へにやつて來て彼女を慰撫した時でさへ、まだバイバス夫人と云ふ姿が何か悪靈でもあるかの様に、後ろの方から何時までもつけまはして居て、必ずその現れた時と同様に不可思議な力で追つかけて來るやうな氣持ちがしてならなかつた。ジャンはこれまで毎日々々二階からきやんきやん叱りおろす聲を聞いた、癩疹で寝て居る間も叱られどほしだつた。そして一度はバイバス夫人が病牀のわきにつつたつて居て、まるで議論でもしかけるやうな調子で『此の娘は病氣でなかつたら可愛がつてやるんだけれど』とさへ云つたことがあるのだ。

そのバイバス婆さんがもう居ない。もうきやんきやんの叱り聲が無くなつた。もう不意に平手打ちをされる事も無けらねば、夕食を食へさせられないで寢床に送られる様な事も無くなつ

たのだ。もう癩疹もなければ灰によごれた敷布に不安に惨めた夢を結ぶやうなこともないのだ。もう此の上はあの氣味の悪い小言が、叢むらに潜むで居る悪獸のやうに頭のなかに残つて、惱ますやうなことも無いのだ。ホームに歸つたのだ。ビイターと一所に居るやうになつたのだ。暗いところから出て来たのだ……とはいへ——外にはまだ暗いところがある……。

『ジャン』とビイターは彼女を呼び醒ます様な聲を出して云つた『お菓子があるよ。誕生日の晩に祝に食べた様なお菓子……。』

オスワルドが入つて来た時もまだジャンは鍍金の寶冠を手にしたまゝで居た。

そしてビイターがその手から寶冠をとつて彼女の頭にのせてやるまでも、まだぼかんとして信が置けない様に身のまはりをしろく／＼と眺めて居た。やうやくの事でおぼつかなく干笏を立てた。ビイターはまるで淑女に仕へる騎士の様に此の不思議さうな顔をジロ／＼させて居るジャンをもてなしたのであつた。

.....

それから四五日の間オスワルドはジャンを氣むづかしい物を考へてばかり居る娘だと思つて

居た。何だか彼女は田舎の人々がよく云ふ『黄弊』な型の様だ。妖魔に魂を取換られた取換娘ぢやないか知らんとさへ思はれてならぬ。彼は一度もジャンが笑つたのを聞いた事が無い。そして必ず影の物に添ふやうに黙つてビイターの後にばかり喰つついて居る。

が或る日の事だ。オスワルドはチャスランドの家から自轉車に乗つて来る途中、その家と地つづきの小さい林のなかで不思議な騒々しい響を聞きつけた。聞き慣れた様な、聞き慣れないやうな雜音が入りまじつて、ガンガラガンガラの響が何者がたてるか判らぬが、云はば鑄屋の車を枝子供がひつくりかへして一齊の喧嘩をやらかして居るとでも思はれるやうな盛な物音、それに二人の酔つばらいが喧嘩しあつて居るやうにも思はれる騒ぎが交じつて居る。小さな矮木林を隔てゝ居るので、騒ぎの何物かが判らず、オスワルドは好奇の心から自轉車から降りて、林の中に檢べにはいつた。見ればジャンとビイターとだ。今しも彼等は鋪び鐵の海鼠板の屋根のついた牛舎の古い癩れたのを發見に及び、更にまたその近所で、之れも投げ捨てゝあつた華鐘鍋が一個に三四個の武力鐘が見つかつたところ、二人の子供は此の華鐘鍋や武力鐘やを、急勾乳の海鼠板の屋根に投げあげると、まるで雷が轟く様な響をたて、轉落して来る。それが面白うてならぬ。此の場のジャンはもうむつ／＼顔のむづかしい沈黙屋では無い。ビイ

夕アももとより當時の知識道及に輝いた顔付きではない。大崩れにグラ／＼キヤツ／＼と最大限の笑ひ聲叫び聲を發して居る。これまでオスワルドはつひぞジャンの咽喉からはれほど大聲が出、ビイターにこんな豊富な底拔笑ひのグラ／＼聲があらうとは思はなかつた。『よう。藥罐が煮えたつガンガラガアガア』とジャンが張りあげる『ガンガラガアガア。煮えたつ藥罐がガンガラガアガア。』

『ホー』とビイター『ホー。やれ／＼。ジャン。ホー。』

しかも此の大騒ぎに更に百尺竿頭の一步を進めるべく藥罐が破裂した。まつ二つに。如何にも完全に二つに破れたので、思はず二人の子供は後ろへたぢ／＼と蹣跚した。そして互に半分づつの破れ鍋を握むで、それを滅茶苦茶に蹴り出した。それから二人の子供は草の茂つた上に腹匍ひに寝ころんで、兩足を自由に空氣のなかに泳がし出した。

だがあらくれの魂は愈々糧を得て生長するばかりである。

『ね。なんか。ほんとに悚とする事をやつて見たいわ』とジャンが叫んだ『ビイターさん。悚とすることをやりませうよ。』

ビイターの兩足は一寸空中に突つ張つたまゝ動きを止めて、何だらう悚とする事はと考へて

居る。

『ね。ビイターさん』とジャン『硝子窓をガチャンと壊して見たいわ。ほんとの硝子窓に鉄瓦を投げつけてね。たつた一つでいいは、大きな硝子窓を……………。』

『何處の硝子窓ぞ？』とビイターは如何にも調子に乗つてそれに應すべく答へた。

丁度此の腕白精神が最高潮にのほりかけたところをオスワルドがやつて来て、ビイターの脊をどんと叩いて醒ました……………。

が、その時からジャンは迅速に變つて来た。彼女の皮膚は血色がよくなり、その振舞には多少とも意氣昂然たるところが見えだして来た。同時に再びもとのすんぐりした體つきになり、明かに剛毅らしく、髪も纏れて、外方に突き出して来た。その笑ひ聲や餘所のことを見て来て物語る話やが、次第に加沙度的にイングル・ヌツクの家の手静な空氣に面白い模様を縫ひ込んで来た。ジャンは話す時その聲の響く範圍にビイターが居て呉れるのが非常に悦しい様に見える。ただし之れは只それだけの事たるに過ぎない。

オスワルドは、よくもこんなに彼女の心から暗い影が拭き去られたかと不思議に思つた位であつた。彼はジャンがビイタアの許に歸つたのだから、それでこんなになつたのだとばかり思ひ込んでしまふところであつたが、はからずも或る日ジャンは極めて突然にオスワルドに別な確證を與へてしまつた。その日オスワルドは小さな四阿で煙草を煙らして居ると、ジャンが静かに足音も立てず近づいて來た。あまり静かだつたので、ジャンが話しかけて始めてオスワルドは氣が附いたのであつた。彼女は兩手を後ろにまはして組み、物を考へ込んで居るやうな顔つきで額に皺を寄せながら、眼下の景色を見て居たが、實はオスワルドに最も心のみやげを齎して來たのである。相談をしに來たのであつた。

『バイパスのおばさんが話して下さつただけだ』とジャンは云ひ出した『誰でも神様を信じないものはまつすぐに地獄に行くんですつて……』

……だつて、わたし、神様があるつて信じないわ』とジャンは眞面目に『ビイタアさんも神様の無いこと信じて居るわ。』

オスワルドは此の短刀直人的な論鋒を向けられて、しばらく後ろにたち／＼であつたが、體て云つた『ジャンや。ビイタアは世界中死なす探しまはつて、神様が無いと云つたらうか。』

それからオスワルドは愈々眞當の解決として極めて適確に『ジャンや。お前、かう云ふことはよく得心が行くだらう。どうじや。地獄と云ふものは何處を探したつて無いのだよ。バイパスの婆さんの様にそれ地獄に行くぞつて云ひつけて居る癖の人間には御氣の毒な氣持ちもするが、地獄なんて有る筈は無いやね。ただかうして生きて居る時に怖しいものが怖しいだけで、それさへ心掛けて居ればいゝのだよ。地獄のことなんか心配しなくつてもいゝ。』

オスワルドは之れで何等の疑ひの餘地のない結論だと思つた。だがジャンは矢張り考へ込んで居る。眼をちつと遠くの山脈の方に見据ゑながら、そして如何にも子供らしい加之も答へ難い一つの質問を發した。それは單順ながら、あらゆる複雑な含意があり、歸納がある句蓋があり推測があり誤解があり精隨があるものだ。曰く、

『だつておちさん。地獄が無いとすれば、神様は何をするの？』

ジャンが斯う云ふ神學的思索をやつて何時とはなしに歸つて行つた後しばらくの間、オスワルドは黙つたまゝで動かずに居たが、體て大きな聲で深刻な確信を持つて、『僕はかう云ふ子供

達が可愛くてならぬ」と叫びだ。

此の時から以後彼は英國にとつて異邦人では無い。安固とした錨をおろしてしまつた。彼は楽しい刺策を夢みながらソキルドの野原の秋の太陽に照り榮えて居る景色を眺めた。かう云ふ子供達を教育するんだ。輝かな光榮を以つて教育してやらねばならぬ。オスワルドはビイターが大帝國の爲めに献身する姿をはやく見たくて堪へられない。あの少年は男衆を見せるに違ひない——彼は眞に頭腦の立派なことは見せて呉れた。——人生を樂む度胸を持つに違ひない。それから、ジャンは？ まだその頃のオスワルドには娘の子のジャンに如何なる教育を施してよいか明確な鋭し意は持ち得なかつた。がそれは懸く得られる……。

結局のところ、大帝國、いや、全人類、悉くの世界はジャンとビイターとが齎す世界である。此の帝國があり、此の人類があるべきところは、所詮僕等がジャンやビイターやを如何にするかと云ふことの總量を措いては他に何物でも無いではないか。

第十 學校 難

そんな次第で愈々組織的に教育を施さねばならぬと云ふ意向がジャンやビイターやを囚へて支配する様になつた。彼等は無目的な本能満足の近代人等の手から、如何にも冒險的に且つ無茶苦茶な手段で奪ひ去られてしばらくは英國教會主義の薄暗い腐朽しかけた隅つこの方に引さずられて行つたのであるが、今度こそは此の帝國讚美者の手によつて救ひ出されやうとして居るのである。此のめづかちな苦悶せる教育狂が教へやうとするところ……何であらうか？

オスワルドの心には何があるだらう。彼の意途はまだセンチメンタルで混沌としては居るが、將に何等か一つの決定した形をとらうとしつゝあるところである。丁度アフリカのウガンダの子供達か、保護政廳の治下にあつて光明ある制度のもとに文明人に教育されて行くが如くに、此のジャンもビイターも亦世界に於ける大帝國に相應はしい支配者たり奉仕者たるべく養生せねばならぬ。彼等には世界を支配する民族の持つべき知識を持たせ、優強民族の一員らしい思想や行動やをさせねばならぬ。是等のことが、此の場合、オスワルドにとつては單純に

して明白きはまる必要事である。だが不幸にして彼は病人である。普通な人よりも速かに疲勞
 憔悴し易い。おそろしく悚々とした慄りつばい気分になり易い。それにどこから教育に着手して
 よいか、そんな知識も皆無だ。如何なる補助が役に立ち、如何なる補助は不可能であるか、そ
 れもわからぬ。で彼はあたりまかせに種々な質問を發して見た。その質問のあるものは儘に滑
 稽きはまる愚問もあつた。他の忠告を聞かうと思つて會へば會ふ人に相談を持ちかけて見た。
 その間ジャンとビイタアとは太陽の光線の輝く楽しい十一月をリチスフィールドの野を獸の様に
 駆けずりまはつて遊びくらしした。——そのあまり遊び過ぎるのを或日オスワルドは氣がついて、
 兎も角もとムルガトロイド女史の學校で學期の残りを修めさせることにした。『聖ジョージと尊
 者ビードの學院』では今や、クリスマス之餘興の出し物として、『不思議國のテリス』の稽古に
 全精力を集中して居る。何れにしたつて此の學校がさう悪い教育をさづけることもあるまい。
 それに子供等を悦ばせる面白いことは澤山にある。

いつたい自分の子供達を何の學校に入學させたらよいか、それを教へるところが何處にある
 だらう？

此の問題に就いては少々滑稽だ。オスワルドは先づ文部省に出かけて行つたのであつた。文

部省に——

彼が考へたところでは、先づ茲に精巧な有望な二人の子供を持つて居るものがあり、加之も
 その子供等のために時間と金錢とを充分に用ゐ得る境遇にあるとすれば、文部省の學務局に出
 頭して聞きさへすれば、屹度これ等の子供の保護者たるものは、どう云ふ學校が適當なるか、
 各學校の特質や、生徒各自の希望その他斯様な學校についての比較研究が一目瞭然と判るだら
 うと。だがオスワルド先生宛が送られた。あの六時大の英帝國の縮少細圖を發行して小さな離屋
 までもその存在を載せて居る文部省も、まだ學校地圖なるものは發行せず、學童の保護者や父
 兄やがついて知るべき何等の便宜をも與へて呉れない。まだ各文明國の文部省に教育地圖なる
 ものゝ設備があるのは未來の事に屬して居た時代である。何しろその様な地圖を發行すれば大
 に黨費が出来るなどと云ふ考へがまだ附かなかつたのであるから必要だとは知りながらも大英
 國の宿題として何年も何年も棚にあげてあつたのだ。

だからその文部省での會見では、始めから終りまで、一方の方は佛頂面とほしてしまつた。
 オスワルドは仕方なしに、『タスマス』新聞の廣告欄やその他宗教や教育やの新聞雜誌廣告欄を
 一わたり眼をとほした。——『さうですなあ教育上の方針なんて云ふもなあ』と文部省のお殺人

は極端に不關焉の顔附きをして「それぞれ學校に行つてお聞きになるよりほか仕方ありませんねえ。」

さあ、かうなると英國は一躍十八世紀の幸福な昔に立ち返つた様なもので、人間が安閑として来る。まだ世間がせまくて會へば會ふ人間誰でも心をうらとけて信用するに足り、片つぱしから訪問しまはつて、あなたの學校の方針はなどと聞いていゝと思はれるやうな時代である。

流石のオスワルド、

「何と云ふ事です」と突然に呻り聲をあげて、此の獅子身中の蟲に怒鳴りかけたが、心はもう諦めて居る。「茲に二人の子供がある。惻愍な有望な子供で、しかも澤山の學費をかけて教育をしよう」と云ふのであるのに、いつたい英帝國はかう云ふ子供等のことを素知らん顔をして居るとは何事です？」

「何でも私立學校教會とか云ふものがあるんですがね。」とお役人は興醒め顔で對手をつくづく見ながら「良いものか悪いものか保證はつかんですよ」



ナンピ・ダ・ドルナオレ

ジャンは衣裳を着けて特別餘興の舞踏の稽古をして居るし、ビイターは白騎士の役を演ずるので、その科白をすつかり暗誦してしまつたが、さてオスワルドが此の子供達の爲めに有望な學校を探しあてるのは頗る前途遠しである。或る時期の間オスワルドは夢想にかゝつて居て、探したら屹度何處かにビイターの註文通りな學校があるに違ひないと一生懸命になつて、「鐵砲や野獸や登山や機械や外國人の事や」を教へる學校、「動物の内側」を教へる學校、「機關車が動くことや」その他なんでも「教へてくれる學校を探しあてやうとしたのであつた。これは此の男はレオナルド・ダ・ピンチが校長をやつて居るやうな學校を探したのである。或る一つの學校に行つて、その時間割表に前記の様な根本的學科が見當らない場合には彼は詰問を始め出すのであつた。

その彼の詰問たるや、すぐと學校の校長先生達にとつては退屈きはまる問答教訓に發展して行くのである。英國の大抵な私立學校の校長は過勞の疲れきつた人間で財政上の困難に窮窮して居るのだと云ふ事實を彼は寸毫も拘みとつてはやらないのである。誠に誰彼の容赦もしない。ただ、彼の一圖に念願するところはジャンとビイターとの教育である。——特にビイターの

は極端に不關焉の顔附きをして『それぞれ學校に行つてお聞きになるよりほか仕方ありませんねえ。』

さあ、いかうなると英國は一躍十八世紀の幸福な昔に立ち返つた様なもので、人間が安閑として来る。まだ世間がせまくて會へば會ふ人間誰でも心をうちとけて信用するに足り、片つばしから訪問しまはつて、あなたの學校の方針はなどと聞いていゝと思はれるやうな時代である。

流石のオスワルド、

『何と云ふ事です』と突然に呻り聲をあげて、此の獅子身中の蟲に怒鳴りかけたが、心はもう認めて居る。茲に二人の子供がある。惻愍な有望な子供で、しかも澤山の學資をかけて教育をしようとするのであるのに、いつたい英帝國はかう云ふ子供等のことを素知らん顔をして居るとは何事です。』

『何でも私立學校教會とか云ふものがあるんですがね。』とお役人は興醒め顔で對手をつくづく見ながら『良いものか悪いものか保證はつかんですよ』

ジャンは衣裳を着けて特別餘興の舞踏の稽古をして居るし、ビイターは白騎士の役を演ずるので、その科白をすつかり暗誦してしまつたが、さてオスワルドが此の子供達の爲めに有望な學校を探しあてるのは頗る前途遠しである。或る時期の間オスワルドは夢想にかゝつて居て、探したら屹度何處かにビイターの註文通りな學校があるに違ひないと一生懸命になつて、『鐵砲や野獸や登山や機械や外國人の事や』を教へる學校、『動物の内側』を教へる學校、『機關車が動くことや』その他なんでも教へてくれる學校を探しあてやうとしたのであつた。こは此の男はレオナルド・ダ・ビンチが校長をやつて居るやうな學校を探したのである。或る一つの學校に行つて、その時間割表に前記の様な根本的學科が見當らない場合には彼は詰問を始め出すのであつた。



ジャン・ダ・ドルナナレ

その彼の詰問たるや、すぐと學校の校長先生達にとつては屈屈きはまる問答教訓に發展して行くのである。英國の大抵な私立學校の校長は過勞の疲れきつた人間で財政上の困難に窘窮して居るのだと云ふ事實を彼は寸毫も拘みとつてはやらないのである。誠に誰彼の容赦もしない。ただ、彼の一圖に念願するところはジャンとビイターとの教育である。——特にビイターの

爲めに。

彼の此の詰問的追及はその枝葉點は時々で大分變つて來るのであるが、大抵は次ぎの様式で行くのである。

「貴方は生徒をどう云ふものに仕立てやらうとなさるのですか。」

「貴方の教へられた生徒と、無教育な生徒とは何ふ云ふ風に違つて來るんですか。」

「私の申しますのは生徒の行儀作法がどう違ふかと云ふのではなくて、その想像世界がどう違つて居るか云ふ點です。」

「さうです——私の云ふのはその想像像です。」

「さうぢやありませんか。元來が教育と云ふものは想像を構成させるにあるんぢやありませんか。私はそれをどの教育家の方もとつくに御承知の上と思つて居ましたんですが。」

「ぢや、いつたい教育つて何をするんですか。」

大抵此の邊まで來ると難詰にあつた校長先生達はぎくつと参り、問答教訓者は言葉が短く粗くなるのである。そして問答法は無禮など云ふ感情を運んで來、沈黙勝になりやすい。

「私の保護して居る生徒はどうか云ふ時間割で教へられるんですか。」

「何故羅語をやらねばならんですか。」

「何故希臘語をやらねばならんですか。」

「生徒は此んな古い言葉で、讀み書きや談話をさせられるんですか。」

「すればいつたいそんな語學があつてどんな効果どんな利益がありますかッ？」

「それがすんでから、私の保護する生徒は何か阿弗利加の事を學ぶ様になりますか。」

「印度に就いてはどう云ふ事を學びますか。あなたの學校には印度人の生徒は居りませんか。」

「伊太利のガリバルヂは何う教へられます。機關車の事は？ダウキンの事は？」

「正確に英國語が書ける様になりますか。」

「貴方のところの生徒は獨逸語はうまくやりますか？露西亞語は？西班牙語或は印度語は？」

「皇室取引所がどうして帝國に影響するかその關係を知るやうになるでせうか？經濟學の一

斑から流通貨幣の原則など了解させないで済むと云ふ理由はありますか？荷も市民となる

以上は正貨一磅は何を意味するか位は承知して置かねばならぬ事でせう。吾との日常生活は

悉くそこに基礎を置いて居るんですからね。それから社會主義は何う教へますか？え。何も

教へない！教へないですか？しかし他日國會議事堂に立つ場合があるとすればどうしますか？